

---

# 田舎暮らし百物語（仮題）

朋次郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

田舎暮らし百物語（仮題）

### 【Nコード】

N8587R

### 【作者名】

朋次郎

### 【あらすじ】

すべて実話で人様から伺った話などを主人公モエに託して編成しました。99話完結。人名など差しさわりのある部分はばかされています。が、読まれていくうちにあっこれはここらあたりの話だったっておわかりになると思います。合併問題は現時点では結局統合され町になっています。まったりとゆっくりと話しはすすみます。どこからでも気楽にお読みいただけましたら幸いです。・・追記・・短編集のこうもり池の昔話も同じ村内での実話です。あわせてお読みいただけたら幸いです。

## プロローグ

私が今現在住んでいるここは「かみさい」という地名です。

人口1000人にも満たないしかもおじいさんとおばあさんが大半という小さな小さな寒村です。

過疎の村。今、村は合併問題で大揺れです。

私はモエ。

結婚をきっかけにここに越してきました。

私は某都市に生まれ育ちました。そこで衣食住何不自由なく暮らしていたのに、どうしてこんな田舎に暮らす羽目になったのでしょうか。だってここにはコンビニも大好きな本屋さんもファーストフードのお店もピザの宅配ありません。

それもこれも私の彼、私の夫、トオルのせいです。トオルはこの村で生まれ育ちましたから。お嫁さんもここにきて自分と一緒に暮らして自分と一緒にかみさいに死ぬまで（！？）いると信じて疑わないいいまどき希有な人種なのです。

よく言えば古風、悪く言えば他の世界を知らない人。でも私はこういう人を好きになったのだから仕方がないと感じています。マジ嫌になれば離婚すればいいだけの話だし。

でもトオルはこの村ほどとてもいいところはないといつも力説します。

こういう2人がどうして結婚に至るのか……。実はお互いイラストの仕事を通じて恋愛しました。イラストの仕事って場所を選ばないし、居住区には関係なく読者さんさえつけばどこで描いても仕事があるのです。これはとってもありがたいことなのです。トオルも言いました。

「イラストの仕事はどこに住んでいてもある。どうせならここで大自然に親しみながら暮らそうよ」

この言葉に私はぐっときました。そうして私は大量のイラスト道具とパソコンと車を持ってお嫁入りしました。

これから私がここに住みついて1年間にあったことを書きます。たった1年でもいろいろなことがありました。

それをこれから書いていこうと思います。

だって不思議なこともたくさんあったのですよ。

本当に。

読んでみてください。

季節は今や春。

私の実家では桜が満開で花見客がたくさんあるというのにここときたらまだ冬なのです。当然庭先には雪が積もっています。そしてすごく寒いのに！

トオルとお義父さんは私のために小さな新居を建ててくれました。でも何となく心細い。この寒そうな窓から見える雪景色。

山には雪がたっぷりのつていて常時霧が湧いているしそのせいで輪郭がはつきりしない。

しつこく言わせていただくけどここはマジ寒い。

自他共に寒がりの私は家の中でもマフラーを巻いて分厚い上着を着て分厚い靴下を履いています。それからもちろん灯油ストーブと炬燵をがんがん付けている。（電気代と灯油代がバカにならないらしいけど・・・）

ここには来たばかりなので知り合いは1人もいない。

でも私には予感がある。

これから何かがおこる。そして何かがやってくる。

そしてこれから、

何かが変化する！

## 第1話・鈴の音

始めの始まりはかすかな音でした。

チリーン……

トオルには1カ月に1回か2回泊まりの宿直がある。彼もイラストだけでは暮らしていけないのでフルタイムで働いている。それが村営の温泉場、兼宿舎なのです。彼はその管理人の仕事をしているのだ。

言わば「風呂場のおっちゃん」である。

スキーシーズンにはまあまあ客が来るがかみさい自体知名度が低いのでこの温泉でないとイヤ、という熱狂的な温泉ファンは少ないについてない。なので仕事は楽だと思う。第一かみさいには観光できるところが少ない、と思う。県立の森林公園や滝は大自然なので一応は、ある。でもはつきりいつてそれ以外はない。

職場はもちろんトオル1人で経営しているわけはなく何人かいて交代で宿直する。

その日もトオルは宿直で静かな夜を私は過ごしていました。

実はこの新居、まるっきりの一軒家ではない。同じ敷地内に築100年以上ある母屋があつてトオルの両親が住んでいる。

「ひとりじゃさみしかろう、晩御飯食べにおいで、ここに寝においで」というお誘いがよくある。

トオルが宿直のたびに言われるが愛する彼の両親とはいえまだまだ一緒にいると気疲れがするのだ。私は1人でいるのは全然平気。というか気楽。わかってほしい。

それで「まだ新居に持ってきた荷物が片付いていませんので……」と丁重にお断りして1人でごろ寝を決め込む。枕元にはポテトチップとココアと大好きな本を2、3冊。あゝ極楽。

テレビもつけっぱなし。読書も佳境に入っていたところだ。

チリーン……

また音がしてはつとする。

時刻をみるとまだ9時だ。ここの通りには街灯が2本しかない。実家近くの駅前の夜とは比べようもなく真っ暗である。

窓からそつと覗いてみたが無論玄関のポーチには誰もいない。自分自身の顔とテレビのちらちらする画面が映っていただけだ。

新居は国道からはずれた1本道で裏はすぐ山である。

誰かが鈴を鳴らしている、と思ったが気のせいだろう。本に顔を戻す。

チリーン・・

自分の頭はどこかで耳をすませていたと見える。自分でもあきれぐらい機敏に動き、電話台においている大きめの懐中電灯を握りしめた。

鈴の音は大きくはない。誰かがかすかに、遠慮がちに鈴を鳴らした感じた。

私は玄関のドアのカギを閉め忘れているのに気がついた。閉めようと部屋から出たら、チリーン。また鳴った！怖かったが思い切つてドアを開けた。

すると・・。そこには息をのむような星空が見えた。

星でいっぱい！

いっぱい！

いっぱいだーっ！

「満点の星」というのはこういうことかと納得するような星空だった。

わああ・・、

私は庭の真ん中まで出て空を仰ぐ。

口が自然と大きく開いて息が白く星空に向かって高くあがっていく。

誠にすごいとしていいようなない迫力ある眺めだった。

すごい、すごいすごい。

すごい！

私は空を仰いだまま、身体をぐるぐると回転させる。

そうすると自分も星空の中を漂っているような気分になれる。

私は星や星座に詳しくはない。

けれどその美しさには十分すぎるほど感応できる。

とても幸せだった。

首が疲れてぐぎぐぎっといいだすまでじっと立ちつくしていた。

それから割れに却って玄関の方を向く。そろそろ部屋に戻ろう。

身体が冷えてきた。そして戸締りを厳重にしなくては。私は我に返った。

玄関に入る前にもう一度夜空を仰ぐ。

だが、何ということだろう。空は曇って星が数えるほどしかなく、鈍い輝きをしている。

あの「満点の星」は一瞬のことだったのだ。私はがっかりしてドアに鍵をかけた。

きっとあの鈴の音は今星が綺麗だから身においで、と誰かが知らせに来てくれたのだ。鈴の音はその夜はもう聞こえることはなかった。

私はかみさいの主みたいな存在の何かが私へのあいさつがてらに星空を見せてくれたと思う。

## 第2話・私の新居

再び自己紹介。

私はモエ。夫はトオル。

前にも書いたがイラストの趣味を通じての恋愛結婚だ。でもまさか自分がこんな過疎の村に嫁ぐとは思わなかった。私から見ればかみさいは小さな村の山奥の当然過疎のさびれまくった田舎である。

私は都会生まれの都会育ち。両親に可愛いがられて大きくなった。1人娘だったし。

一方、トオルは高卒で農家の長男。弟のジロウさんがいるが、東京に出たきり帰ってこない。母屋にはトオルの年老いた両親だけがいる。

もし見合い結婚であればトオルは釣書の段階でまず間違いなく断られる男に違いない。トオルの容貌は置いという見合いと言うのはいわば打算あつてのことだから。

だって1、過疎の村在住、2、農家、3、長男、4、じじばばつきセット。

以上、誰もが嫌う条件だ。

もちろん私だって最初からそんな見合い話が来たら話の段階で即お断りだ。

お見合いするならお金持ちで気立てが良くて当然別居で年に最低1回は海外旅行に連れて行ってほしい。そういう人でないと嫌だ。

そんなごく普通の計算高さを持っているごく普通の女の私がトオルのところにお嫁にきたのはひたすらトオルの情熱だ。

「ぼくのところにきたら、きてくれたら、同居なんかしない。家は新しく建てる。ちゃんと君専用のアトリエもつける。農家の仕事を手伝えとか絶対に言わない。いつでも君の味方だ。

だからとにかくぼくのそばにいてくれたまえ……。

ふふ……



我ながらすごく惚れられたものである。

私も年だし、こんなに自分のことを好きになってくれる人はトオル以外には今後もう出てこないのことはないだろうか……。また彼はまだ迷っている私にこんな殺し文句を言ったのだ。

「きつと幸せにする。大自然の中で2人で仲良く、暮らそうよ」

でも私の両親はこの結婚に大反対だった。農家？苦勞するぞ。くわも握れないような女の子にどうやって農業ができる？農家の嫁が務まるはずがない。手伝いができなかったらできないで近所がどう思つか田舎の人なら気にされるのではないか、などなど。

トオルは私の両親を説得すべく何度も実家に来てくれた。最後には両親もトオルが気に入るまあこの人ならば、ということで折れてくれた。そうして晴れて夫婦になれたわけ。

で、今いる新居は母屋の敷地内にある。

お屋敷ではない。小さなかわいい建物だ。母屋が広すぎるし、今のところこれで十分というところか。

新居の裏手には彼の家の山がある。そのふもとはずらりと彼の先祖の墓が並んでいてパノラマ状態だ。

北側の窓を開けるとまずこのお墓達が目につく。ご先祖様方に見張られているようで嫌だなあ、と思う。だから北側の窓は常時閉めっぱなしだ。トオルは平気なようだが、お墓を見て暮らすのはどうしても慣れない。

だって自分には見えなくとも、あちらのお墓で眠る方々が自分たちを見ているに違いないとどうしても想像力が豊かになってしまふ。しかもつい最近まで土葬だというし。骨と溶けた肉塊が確実にあなたのお墓に埋まっているのだ。何十年かたったら自分もお墓に並び、あの中に入るのか？と思うとどうして嫌だ。きつとあちらの方々ではこの心のうちが見えるに違いない。罰当たりな嫁だと思われるているかもしれない。

でも土葬が嫌かといえば火葬も嫌。まだ死にたくない。そんなことをいっても、どうしようもないけれど。

私は靈魂の存在を信じている。これから書くのはかみさいのこと  
だけど、たくさん書くことはある。

ただ1つ言っておくのは私は靈能者ではない。幽霊もはっきりと  
見たことはない。

それだけ。

ぞつとする話はここにはない。（怖い話は怖いです。自分は怖が  
りです。）

ゆっくりとお菓子でも食べながら読める話を書きますのでよろし  
くね。

### 第3話・ホタルその1

5月になりました。ここにきて1ヶ月経ちました。

4月の結婚式、ついでハネムーン、荷物の整理・・・。

何やらばたばたして暮らしていましたが、ようやく落ち着いたかなあ、と思うこのごろ。

ある夜、トオルが「そろそろホタルが出てくるころだよ、散歩に行こう」と誘ってくれた。雪がようやく消えたと言っても夜はまだ寒い。でもホタルと聞いて私はぜひ見たいと思った。

ホタルはこの年になるまで実物は1回も見ることがないので。

映画やアニメでホタルはどんなものかはわかっている。たいていが幻想的なシーンに効果的に使われている。自分でもホタルのイラストを描いたこともある。

もっともこの場合は現物はなく百科事典を見て描いたけれど。

時刻は夜の9時。

私達はオーバーを着込み裏口から出て田んぼのあぜ道を歩く。すぐそこには先祖様たちのお墓がある。そこを通り山に分け入る細道を歩く。街灯なんかない。真っ暗闇だ。トオルの持っている懐中電灯を頼りに歩く。カエルがそこらでいたるところでゲコゲコ鳴いている。

闇に慣れると遠目に家並みの明かりになじんで田んぼの光景もぼんやりとわかってくる。都会育ちの私には珍しい景色だ。

懐古趣味はないつもりだがなんだかなつかしみがある。

車の往来を気にせず舗装されていない込みとをゆっくりと歩く。それだけなのに気分がよい。

カエルを踏みつぶしたくなかったので歩くのも慎重になる。懐中電灯は一応会った方がいだろうが月明かりで十分カエルのいるところがわかる。

そのうえ大きくて暖かいトオルの手が私の手をしっかりと握って

くれる。幸せってこういうことかなあ・・・。

「ホタル、なかなか出ないね」

「まだ出始めだからね。これから嫌というほど見れるよ」

トオルは昔話を始めた。

・・・ぼくが小さかった頃、蛍はもうそこらじゅうにいたよ。そりやもう、うじゃうじゃと。

電灯よりも明るいくらいホタルの光は力強い。

夜になると透明のガラス瓶に濡らしたヨモギの葉を入れておく、その中へホタルを誘いこんでギューギュー詰めておく。

ホタル入りのガラス瓶は電灯の替わりになる。

当時母屋のお風呂は外にあったから風呂桶の横にそのガラス瓶を置いて身体を洗ったものだ。

そんな話をしていると、遠くに点滅するものがあつた。

ホタルだっ！

本物のホタル、の光。

私は感動したなあ。

「あつ見て！あそこにも、あ、ここにもいる！」

トオルは「あまり大きな声をだすものじゃない」とたしなめる。いずれのホタルも星のまたたきよりもかすかな点滅だったが私はうれしかった。2人でその場所を動かず、蛍の光に見入る。

トオルは教えてくれた。あれほどいたホタルがどうして壊滅したのか。

「ぼくが中学生のころに用水路をコンクリートで底を固めたんだ。そうするとまっすぐに水が流れるようになるのはいいけれど、ついでにホタルの子供のニナも流されてしまふんだ。

昔はこの用水路も人間の手で水路を作ったからぐねぐねと曲がっている。そうするとニナが生息しやすいんだ・・・」

「ふうん・・・」

「モエから見ればかみさいはまだまだ田舎だろう。でも道がアスファルトになっているし、少し歩けば国道に出て町へ行きやすく便利

になった。ぼくから見たらここはもう田舎じゃない。ホタルにとっ  
ては生きにくいんだ。ホタル以外も生きにくくなっている。人間に  
は便利になったけれど、蛭は嘆いていると思うよ」

私は言葉なくトオルの小さかったころを想像する。

ホタルでいっぱいだった昔の光景を想像しつつ帰途についた。

## 第4話・ホタルその2

またまた今夜のトオルは宿直にあたって不在だ。宿直の夜私はトオルのためにお弁当を2個作らないといけない。

夕食用と夜食用だ。そのうち1個は必ず焼きそばにせよ、との仰せ。

義母も「昔からあの子は焼きそばが好きでなあ。だからこれからもそうしてやって」とか言うし。「ま、いいか」と作ってやる。

それとイカのくんせいとお茶と缶ビール1本。お酒は少しなら黙認されているらしい。

はいはいはい。わかりましたよ。希望どおりにいたしましょ。と全部言う通りにしてやった。

宿直は夜の6時から翌朝の9時までだ。

お弁当の話をさせてもらうけれど彼は絶対のご飯党でパンは「おやつ」だと信じている。しかも外食よりもお弁当を好む。村では外食できる場所は3か所しかないからだ。国民宿舎と国道沿いのお寿司屋さんとバス停の前の喫茶店だけ。夜なんか営業しない。夕方になると閉まってしまふ。必然的に外食できない環境なのだ。

また彼は生粋の農家育ちで両親が作るお米がこの世で一番おいしいと信じている。

だから私は彼のためにしょっちゅうご飯を作っているような気がする。1つ作り終えたらこの次は何にしようかとか、料理の本をめくるし、洗濯に掃除。専業主婦でも結構忙しい。

たまにはピザの宅配でも頼みたいがこんな田舎まで届けにきてくれない。（配達圏外だ）出前もない。困る。

でもすぐに慣れるだろう。そうでなければやっていけない。

買い物にも困る不便さは結婚前には想像しなかった。現実には厳しいが世の中には「お取り寄せ」というものがあり、やや割高になるがパソコンや通販雑誌をめぐって珍しいおやつや食べ物を頼んだり

してしのいでいる。（パソコンがなければマジつらかったかも・・・）

さてトオルの話に戻そう。トオルは宿直に備えてその夜は早めに帰宅。6時の再出勤に間に合わせるべくざっとお風呂に入る。それからパジャマに着替えてお弁当を持ってあわただしく家を去る。車に乗って夕暮れの道を出勤。

パジャマ姿のままで宿直するなんて変な職場だ。ま、いいか。

残された私は今夜は1人！夜の時間はたっぷりある。雑誌をゆったりとした気分で読む。イラストの仕事にも取り掛かる。筆はすみ気がつくとも12時をまわっていた。

シャワーを浴び、寝しなにホタルでも見ようと思いついた。まだ肌寒いので毛糸の上着をはおって行くことにした。

あいにくと月明かりもなく懐中電灯を頼りにして歩く。だが、今夜はいない。ホタルが1匹もないのだ。

あら、ホタルさんはもう寝てしまったのかな・・・？がっかりしたあれから彼と何度かホタル見物に行ったがどこを向いてもホタルの光があつたのに。乱舞というほどの光ではないがしみじみと観れるよい光だったのに。おかしいなあ。

風が強くて寒い。そのせいかもしれない。

私はお墓に顔を向けないように横を向いて帰ろうとした。畑のビニールハウスが夜目にも白く浮かんで見える。そこをぐるりとまわると私の新居だ。

長いハウスの畦道を歩くと自分の影が細長くゆらゆらと揺らいでついてくる。私はそっと自分の腕をあげてみる。すると影の腕もすっと上にのびる。本物よりも細く長く。

おもしろくなって自分の手足を上げたり下げたりして踊る。そのたびに影も踊る。一通り遊ぶと息をはずませて新居に戻った。

やあだ、私ったら。小さな子供みたいだったかも。鍵をがちゃつと下ろした瞬間、私の身体が凍りついた。

今晚は月も星も出ていない。ビニールハウスには電気はひいてい

ない。なのに、そこだけがどうして明るくて私の影が映っていたのか？

どうしてかしら？

どうして・・・。

あまり深く考えたくないことだった。すぐ近くにはお墓があったのに、私は浮かれて踊っていたのだ。家の中に入っても懐中電灯はつけたままだ。それに気づいてあわててスイッチを切る。

怖くなってきた。

時計を見るともう2時だ。うーん、草木も眠る丑三つ時だ。

私はさっさとパジャマに着替えて部屋の電気を煌々とつけたまま布団をかぶって音楽をかけて・・・。

そうして無理やり眠りについた。



## 第5話・お風呂

私達は新婚である。知り合ってから結婚に至るまでに期間は長かった。そのせいか友情の延長みたいな恋愛？結婚である。

でも新婚らしく？お風呂だけは一緒に入る。

ところで先週の日曜日の話。

起きると9時半をまわっていた。私もタオルも日曜日は朝寝坊だ。朝兼昼ごはんを食べた後、寒いからお風呂にでも入ろうかってここでお湯をためて一緒に入った。

ちよっとお風呂の位置を説明しないとわからないかもしれない。新居の小さな玄関を入れて右手すぐがお風呂場である。着替えているところがあいにくと玄関と丸見えになる。よって一緒に入るときは玄関の力ギを必ず閉める。

一緒に朝風呂につかるのは狭いが気持ちよかった。小さな贅沢窓からは朝日がさんさんと入ってくる。さわやか。

ところが、折悪く姑・・・義母が新居にやってきたのだ。

ピンポンとチャイムを鳴らすなり、ドアをがちゃがちゃして開けようとしている。私達は風呂の中でしーんと押し黙った。

そういえば義母は朝ののら仕事が一段落するとよくこの時間に何か野菜を持って訪ねてくることが多い。うかつだった。

義母はタオルの母で私の姑になる。私はいとお姑さんに当たったと思う。というのは友人で姑さんとうまくいってなくて悩む人が多いからだ。

ものすごい根性の曲がったいじわるなお姑さんにあたったらいくら愛する夫の母親といえども顔も見たくなくなってしまう。私の姑はそういう人ではなくてラッキーだとは思う。

ただ問題はしょっちゅう、私の新居に来たがることだ。それとものすごいおしゃべりさん。しかしいじわるでもケチでもない善良な人なので、そらまた来た！今度は何の野菜を持ってきたのだろうか、

すぐ帰ってくれるかな？と身構えるくらいですむとても良いお姑さんなのだ。

しかし2人きりでお風呂に入っているこの状況に入ってこられても困る。

ピンポン！またチャイムが鳴る。

「トオルッ。モエちゃーん」

義母の絶叫がよく聞こえた。私は湯船につかったままトオルにどうしようか、と目で尋ねた。トオルはぶんぶんと首を振る。無視しようと言っているのだ。そしてささやき声でばやいた。

「バアさんはどうせしようもない豆の煮つけでももってきたのだろう。こんな時間に来なくてもいいのになあ」

「トオル！モエちゃあーん！朝からどこかに出ていったのかいう」

叫ぶ義母の声。

ざっ、ざっ、ざっ・・・、

すぐ横の窓で砂利の上を歩く音が響いた。お風呂側の窓を通って裏手の車庫の方へ行ったのだ。車があるかないかの確認に行ったのだろう。

トオルが舌打ちをした。私は我慢できずに窓に手をかけて「ここにいます」と言おうとするとトオルが肩を掴んでひきおろした。

「無視無視。あきらめて母屋へ帰るだろう」

足音が車庫から玄関に戻ってきた。車があるからここにいるか、近くを散歩しているかわかったはずだ。

もう一度呼びかけてくるかと思ったが何も言わない。

・・・ざざざっ！

今度はお風呂のすぐ窓の下で足音が止まった。

私達は顔を見合わせた。お風呂場にいると見当をつけて耳をすませているのか？

私は義母は気性がさっぱりしている方だと思っていたのでしくく不在を確かめようとしたのが意外だった。

トオルは我慢できなかったらしく、湯船から上がってお風呂場の窓に手をかけてがらつと開けた。そして怒鳴ったのだ。

「ばばあっ！いい加減に・・・！」

トオルはどなり声を途中で詰まらせた。振り返って私に言う。

「誰もいない・・・」

「えっ」

トオルは変な顔をしている。私はぞくつとした。

湯船から伸びあがって窓の外を見る。ビニールハウスがすぐ近くに見える。その横にご先祖様方のお墓が並んでいるのが見える。そしてホタルを見に行く道筋と。その後ろは綺麗に植林された山だ。

しかし人の気配はない。

「トオル、早く窓を閉めて」

私達は気をそがれてそそくさとお風呂から上がった。

その後トオルは母屋に行つて義母を問い詰めたらしい。義母は確かにおかずを持って新居には行つたが返事なかったのですぐに戻つたという。車庫にまで確かめには行つてないと言ひ張つたらしい。彼が怒つて「うそつけ！新居をうるうるとしていたくせに！」と言つたが本当だという。

だとしたらあの砂利を踏む足音は一体誰のものだったのか。

結局それはわからずじまいだった。

義母がウソをついたのかどうかはわからない。でもウソをつくような人ではないと思う。足音の件はこれ以上考えても解決しないし無駄なので考えないことにした。

## 第6話・公民館

今月から社交ダンスを始めた。

実は前々から一度はやってみたいと思っていたのだ。

裾の長いドレスを翻してあでやかに優雅に舞い踊る・・・。

それがなんとこの過疎の村で習えるとは思わなかった。が、ちゃんとやっているのだ。

「村民カルチャーセンター」というのがあり、格安でお茶やお花、絵画教室で学べるのだ。これを知ったときはうれしかった。

かくしてその中の1つ、社交ダンスがあり迷うことなく受講することにした。これは隔週の木曜日の夜にだけある。月2回とはいえうれしいことだ。値段も安いし。場所は公民館にて。

会員は全員で8人の在籍があるらしいが実際に通っているのはいつも3人ぐらいだという。私を入れて4人か。こじんまりとして先生にじっくりと教えてもらえるだろう。楽しみだ。

トオルからもらった情報によると通っている人たちは私よりもずっと年上のおじさん、おばさんらしいがあちらも私が通うのを楽しみにしてくださっているらしい。

パートナーは当然トオル、と言いたいが、トオルときたらダンスや踊りなんてものは死んでも嫌だという。

何度頼んでもダメだったので私はとうとうあきらめた。彼と一緒になら家でも一緒に練習できていいと思ったのに。ブツブツ・・・。

先生は県外の町中から車で1時間弱かけて教えに来られているそうだ。50歳ぐらいの男性の先生で社交ダンスを教えて食べているのではなく趣味が高じてダンス教師の資格を持ったらしい。本職は別にあるという。

先輩生徒達もこの日は女性ばかりだった。明るくて素敵な方々ばかりだ。

さっそく足運びのレッスンから入る。スロースロー、クイックク

イック・・・スロースロー、ターン！

クイック、クイック、スロースロー・・・。

それはもう丁寧に教えていただいた。みなさん長く続けておられる方々ばかりなのに辛抱強く私に時間を割いて教えてくださった。

はじめてやるダンスの足運びはなじみなく優雅さには程遠い。が楽しかった。

ついつい視線が床を向いてしまいがやっていく都度上達していくと信じた。

社交ダンスのレッスンは退屈しかけた村の生活にちよっぴり張りができたようだった。

こうして3回ほどレッスンを続けた時だ。その日は早めに公民館に入って自己レッスンをしようとしたのだ。いつもより30分は早く着いた。案の定誰も来ていない。鍵は開いていた。誰もいないということとは、大きな鏡は独り占めできて、人目を気にせず練習できるということだ。

私はダンスシューズに履き替えて予習復習をする。早くほかのメンバーに追いついてステップを軽やかに踏めるようになりたい。

まわりはもう夕暮れになっていたから私は先に入口にある電機のスイッチを入れる。電気が付いたとたんばちん、と何かをたたくような音がしたのでびっくりする。一瞬電気がショートしたのかと思った。でも気のせいだったのだろう。耳を澄ませても何の音もしない。

わずかに表の国道を走る大型トラックが起こす騒音が聞こえるだけだ。

私は広間にはいり、鏡の扉を開けてステップを踏んだ。

スロー、スロー、クイック、クイック。

スロースロー・・・

同じステップを何度も繰り返してターン。向きを変えるときには身体がぐらつかないように気をつける。ヒールが床に反響して良い音がした。ロングスカートをはいているので裾を翻すたびに自分の

姿を見るととても上手に踊っているように見えてうれしい。

ターンが3回続けて決まったときうれしくなって自分で自分を拍手した。短く景気よく。

パチパチパチ！

えっ！と思ったのはその時だ。

音が反響して大きく聞こえるのはよい。しかし拍手が自分で打つたのよりも2、3回余分に聞こえたのだ。もちろん数えたわけではない。でもここにいるのは自分だけなのに、確かに自分ひとりだけなのに拍手が余分にあった。

明るいはずの公民館のフロアが急に翳って見えた。気のせい、気のせい、だ。

自分によく言い聞かせてレッスンをやめた。それからトイレに行った。時計を見るとレッスン開始10分前だ。そろそろみんなが来るころだ。

公民館の女子トイレは個室が3つある。が1つは使用禁止で2つしか使えない。それは知っている。だけど今日にかぎってそのうちの1つが使用中だ。ひっきりなしに水がざあざあ流れる音がする。誰かいるのだろうか。

「誰？Mさんかな？Kさんかな」

私は声をかけたが返事がない。水の流れる音は変わらない。多分壊れてしまったのだろう。

でも何で戸が閉まって鍵のところが使用中を示す赤い色をしているのだろう？私は怖くなってトイレを使う気なくなってしまう。外に出て他のメンバーが来るまで待っていた。結局この件は誰にも言えなかった。

村の新入りだし変なことに騒いでバカにされるのも嫌だし。

ただトイレにはつきそってもらった。例のドアは閉まったままトイレの流す音は止まっていた、とだけ言うておこう。

私は入口近くのトイレを使ったがもうこれきりでこのトイレは2度と使うまいと決めた。社交ダンスは楽しいが今後1人で自己レ

ッスンすることはないだろう。以後のレッスンは開始ぎりぎりに来て参加することに決めた。

この話はトオルだけに教えた。

トオルも気のせいだろうといったがああたりは昔天狗がいたらしいよ、とだけ言う。でも天狗じゃないような気がするなあ・・・。  
けどちょっとこの辺って怖いかも・・・。と思った。それだけ・・・。

## 第7話・なまめすじ

たとえば、わたしは役場に住民票なんかを取りに行くとする。郵便局に用があるとする。JA農協に貯金を出しに行くとする。

役場も郵便局もJAもみんな国道沿いの交差点にかたまつて建っているので一度に用事を済ませるときには便利だ。

この新居からあちらへ行くには2つのルートがある。近周りと遠回りだ。

近道は川の上流の橋を渡って行く。

遠回りはその倍の時間がかかるがまわりに人家がないので、景色を楽しみながらの散歩コースになる。このコースは今の季節だと綺麗な桃色の花が咲いていたりする。トオルの小さなころから咲いていたという大きな木だ。名前はわからない。

その小さな橋を渡ると国道に出れる。その橋の手前にはまた小さな変形した十字路があつてまたまた小さな祠というか石塔が建っている。ときおり誰かが花やお菓子をたむけていていつも小奇麗に掃除もされている。

その日の用事は郵便ポストに手紙を出しに行くだけだ。急ぎでもないので遠回りコースを選ぶ。もう夕暮れだが山にオレンジ色の霞がかかり眺めを楽しみつつ散歩した。

それで何気なく例の石塔を見てみたのだ。いつもは足を止めないのに、その時にかぎって石塔に何が書かれているか足を止めて読んでみた。

相当に古いらしく字全体がかすれて読みづらい。かろうじて「三界万霊」と読めた。下の霊という字も旧字体なのだが何となくは読める。けれども意味がわからない。そもそも三界って何だろう。

交通事故現場によく建てられているお地藏さまとはまた違った感じだ。そこらあたりは本当に人家がなく見渡す限りの田んぼである。まだ稲は植えられていなくて閑散としている。



わたしはそこにじつとたたずんでいたと思う。

急に鳥の鋭い泣き声がしてはっと我に返った。夕暮れがすすんでまわりはいつのまにかオレンジ色の闇になっていた。

あんなところでなぜ立ち止っていたのかわからない。我ながら変だった。時計を持っていなかったのだのくらい立っていたのかもわからない。でも今からポストに入れに行っても家に戻れば夕暮れは終わって真っ暗になってしまっただろう。真っ暗な道を歩くのはまだ嫌で私は引き返すことにした。葉書を入れに行くには明日でもいいのだ。でも私ったらなぜ、あんなところで立っていたのか・・・？夕食時にトオルにこの話をしてみたら意外な話をしてくれた。

あのあたりは「なめすじ」というそうだ。地名ではなく俗称らしい。人によつては「なめらすじ」ともいうらしい。

この名称は村の何箇所かにあり、何となく気味の悪い場所をさすそうだ。私はえーっと思った。

「あのな、別にお化けが出るわけではない。ただ夕暮れになると何となく気味が悪い。その上、その場所を通った時にかぎって下駄の鼻緒が切れやすいとか、転びやすい・・・らしい」

「夕暮れ・・・嫌だ。じゃ、私はあの石塔に呼ばれたのかなあ」

「俺だつて信じちゃいないさ。モエの気のせいだとは思ふよ。ただあそこを通った時に車のエンジンがいきなり切れてあわてたことがあった。そのくらいかな、それだつて偶然だろう。気にするな」

「うん・・・」

都会育ちに私にとってこの村は街灯がなく夜は真っ暗。ましてやあのあたりは人家がないから真っ暗闇の、闇の中、のはずだ。

「で、トオル。三界万霊って何？」

「ぼくもよくは知らないけれど、どこの世界にでもいるすべての霊を、つまり万霊を慰めるという意味だろうなあ」

気味が悪かった。私は夕暮れから夜にかけては今度遠回りコースの散歩はしないだろう。この辺は昔の気味悪さも代々伝えられてきたに違いない。

今日の私はそれを「継承」したに違いない。

## 第8話・ウゲイス

今度は村唯一の神社の話。

村には実はお寺がない。昔はあったのかもしれないが今はない。

村の真ん中に神社が1つだけ。

新居から遠回りして国道に出て少し歩くと右手に鳥居がある。国道から見えない位置にあるので隠れ神社と言った風情だ。

鳥居をくぐり55段ある石の階段をゆつくりと登り切ると小さなお宮さんが見える。

経歴自体は大変古いらしく昔宮総代（神社の氏子の代表のこと）をしていた義父に聞いてみると何と室町時代から連綿と続く由緒正しい神社だそうだ。

そう聞いてある日私は散歩を兼ねて探検に行ってみた。

苔むした石の階段を上ると雑種の犬みたいな狒犬が出迎えてくれる。キツネでもなく獅子でもない、ユーモラスな表情をしたかわい犬？だ。

中門を通り抜けると大きな杉の木をバックにいかにも古いよ、といった感じのお宮さんがある。大きな神社のように神主やお守りを授けてくれる巫女さんもない。全くの無人であるが鳥の鳴き声が迎えてくれた。

小高い所にあるのでそこから国道の一部が見え大型トレーラーが通ったりするのがわかる。トラックが通り過ぎるとあとは田舎の国道だ。何も通らないところは、のどかで静かで気に入った。

夏でも避暑になるぐらいに肌寒いこともあり春の鶯がまだ鳴いていたりする。

ホー、ホケキヨッ！

ではなくて・・・

ホーホケキヨッ、ピヨ！

ん？「ピヨ」が余計である。

私は上を眺めた。鶯がどこで鳴いているのか確認しようとしたのだ。でも鶯の方が姿を見せてくれない。

ホー、ホケキヨッ。ピヨ！

この鳴き声を2、3回聞いただろうか。

この話をトオルのみならず母屋の義父母にしたが誰も信じてくれない。

「いくらなんでもピヨはないだろう。鶯は全国一律、ホーホケキヨだろ」

だって。

聞いたのは確かなのに。

でもまあいいか。とにかくにも私は神社ののどかな雰囲気は大好きになった。狛犬はかわいいし。

## 第9話・神隠し

「神隠し」

知っている人は知っている。

ある日忽然と子供がいなくなる。家族や近所の人の必死な搜索にもかかわらず、どこを探してもいない。しかし数日後には子供がひよっこり帰ってくる。どこへ行っていたのか問い詰めても要領をえない。天狗に連れられて、空を飛んだとか言う。

あちこちの地方で聞くような話だ。全国各地の民話仕立てになっているのだろう。だけど我がトオルは真顔でここでも「神隠し」はあるという。トオルがそんなことを言い出した時は意外に思った。

「だってぼく、神隠しにあったことがあるんだ」

「うそおつ！絶対うそおつ」

私は絶叫したが、当然だと思う。

「いや、神隠しにあったのは正確にはぼくではなくて、ぼくの三輪車だったけどね」

「三輪車！一体いつの話なの？」

トオルは重々しく言う。

「そうだ、三輪車だ。ぼくが4歳かそこらの話だよ」

聞けば20年ほど前の話だ。

幼かったトオルは自分の庭で三輪車を近所の友達を乗り回していたが、何かの拍子に隅に置いたという。ほんの少し置いただけなのに、なくなってしまったのだ。トオルは友達と一緒に探したが三輪車は見つからなかった。

「誰かが乗っていったのじゃないの」

「結論から言うと三輪車は4日後に戻ってきた。村はずれに住む親せきのおじさんが持ってきてくれた。ぼくの名前があったから、困っているだろうと、」

「やっぱり。誰かが乗りまわして捨てたのでしょ」

「4日後だよ。しかも見つかったのが家から遠く離れたお墓の中だったのさ」

「えっ」

「当時まだ生きていたおじいちゃんと言ったよ。三輪車は神隠しにあっただろうって」

「じゃあ、天狗か何かが三輪車を乗り回して・・乗り捨てたっていうわけ・・？」

「わからん。今もって不可解だろう」

「ふうん、」

トオルは晩酌のお酒をなめなめ言った。

「案外、三輪車を隠したのは親父の芝居だったかもしれないけれどね。親戚のおじとぐるになってさあ・・」

確かに小さな子供にとっては時間の感覚はあいまいなものだし、三輪車を粗末にするなど怒られたこともあるし、とトオルはつぶやく。

でも友達と一緒に泣きながら探して回ったのは事実だし、家族総出で探したらしい。

もちろんトオルのおじいちゃんやお父さんも一緒に探しただろう。私は義父の実直な顔を思い出した。あの人はジョークでもそんなことはしなさそうに見えるけれど・・。これまた真相不明な話。

が、私は天狗の子供がトオルの三輪車を羨ましく思っただけで行ったと想像しちゃった。童話っぽくてかわいい話だと思う。

ただ発見された場所がお墓っていうのがね・・、ちよつとコワイ。

## 第10話・ラブホテルにて

これは厳密に言って村内の話ではない。村内にはコンビニもないのに、ラブホテルなんてできようがないのだ。隣の某市内での話。ここでちょっと変なことがあったのでぜひ書いてみたい。

先日私達は友人に会ったのだが帰りが遅くなったうえものすごい雷雨にあった。車に雷が落ちるかというひどいものだった。時刻は真夜中。

市内から新居に戻るまでいくつかの山を越えないといけない。運転するにも雨がひどすぎて前がよく見えない。

「こりゃマジで危ないよ」

「うん、じゃあどこかに入るか。幸い明日は仕事が休みだし」というわけで手近なラブホテルに入った。

そこに入ったのはもちろんはじめてだったが感じのよいところだった。部屋に入ると激しい雷雨の音から解放されて静かになりほっとした。

夜が更けていたのと何やかやと疲れていたのですこともせずお風呂に入った後ぐっすりと寝てしまった。

なんだか新婚らしくもないが結婚してしまえばこんなものかもしれない。

そして私は何かの気配で目が覚めた。ライトは最小限に光源を絞っている。ただどやけにまぶしく感じたのだ。隣にいるタオルはぐっすりと寝入っていて身動きもしない。そのすぐそばに女が立っている。

私はああ、そこに女の人があるなあって思った。夢うつつだった。泥棒だとか、幽霊とかは全然思わなかった。それぐらい自然な感じだった。今となっては不思議だけど騒ぎもしない。

女の髪は長く顔はよく見えない。白いドレスを着ていたように思

う。

その女は1枚の紙切れを持っている。しかもそれを私に見えるようにかざしている。

私は暗いはずの部屋の中でそこに書かれていたものを見た。2、3行に分かれて書かれていたものは数字だった。

17、34、41、

69・71、86、

89・・・

どうしてはつきりと読めたのかしかも覚えていられるのかよくわからない。私が見終えるとその女は入口と反対方向の壁に向かい歩いて消えた。

私の視界から消えたとたんにトオルが「ううん、」とうなって薄眼を開けた。

「トオル！」

私は小さな声で叫んだ。

「今、あんたのそばに女の人が、いた、のよ！」

彼の返事は思いもかけないものだった。

「ああ、見たのか。茶色のドレスを着た髪の毛の長いやせた女性だろ」

「・・・白いドレスだったけど・・・」

「あの人、ぼくの守護霊なんだ。多分。ぼくも時々見かけるよ」

「ええええっ！守護霊？あの、変なメモを持っていて中身を見せてくれた。数字ばかりだったけど」

「数字？どんなの」

私は覚えている数字を教えた。2人とも眠気なんかどこかにいつてふっとんでいる。

「うーん、思い当たらないよ。でも71なんかはぼくの祖父が亡くなった年齢だけど？」

「そうじゃないような気がする・・・」

「うん、ぼくも・・・なんだろう？」

彼がこうして落ち着いていたからこそ私は怖くなかったのだ。こ



の話はこれで終わる。

結局あの数字は何のために私に見せに来たのかはわからない。トオルにもわからなかった。

例の女は何かの拍子に夢に出てくることがあるそうだ。ならば、どうして彼女は仕方なしに入ったラブホテルでしかも、私の前に現れたのか？

トオルに言わせればこうだ。

「彼女はきつと君に挨拶したかったのだ」

でもそれきり私は彼女には会わない。彼女の方で気がすんだのだろうか。

私にはせつかくのとおきの？数字を見せても理解しなかったのがっかりしたのかもしれない。

トオルの方は夢の中で彼女に会っても、ああ、また会ったと思うくらいで彼女の方は何もしないし、しゃべらないそうだ。

## 第11話・山登り

「さんがじょうさん」と呼ばれています。

新居からちよつと歩くと「バードライン」という登山コースの山道になる。

日曜日のある日、この山を登ってみました。もちろんトオルと2人で。

山自体の高さはそんなにない。3時間もあれば余裕で登り一服し下山できるらしい。昔は途中の山腹で牛を放牧していたという。そういわれてみれば広々とした草場があった。現在は牛はいないかわりに春先でもススキの穂で満杯だ。

この登山は土地っこのトオルには楽々だったが、普段山に慣れていない私にとつてはきついコースだった。

「もつとさつさと歩けんのか」とトオルにあきられつつ、がんばって登りました。

昨日の雨が少し残っていて、滑りやすいところはトオルが手をひいてくれる。大きな岩がごろごろしているところもあり、縄でよじ登るところもある。だが道に迷うことはない。登山コースとして整備されている。

「この山は県内の百名山の1つだよ」

頂上に登り切ると村が一望できる。岩だらけでトイレも売店もない。だけど快晴で風も程よくなびいていて、とても気分がよい。

「モエ、この岩の下をおりて、そこを覗いてみてご覧」

ごわごわと下りてみると岩の陰に隠れるようにして、小さな石仏が見えた。本当に小さな石仏だ。風雪に晒されたせいか表情もはつきりしない。素朴で朴訥な感じだ。

仏様の足元にはおさい銭のつもりから円硬貨がいくつか押し込まれている。みんなさびていた。トオルが楽しそうに言う。

「この山はな、天狗様の遊び場だと言われてきたそうだ。そこに石

片を敷き詰めたような場所があるだろう。天狗様の土俵と言われているんだよ」

亡くなったトオルのおじいちゃんが昔話に教えてくれたそうだ。

「土俵か。相撲が好きな天狗だったのね」

「そうだよ。天狗と鬼が相撲を取っていて鬼の方が負けたんだ。で、腹をたてた鬼がこの岩を川に向かって投げ飛ばしたという伝説もある」

天狗と鬼の相撲！昔の誰かが見たのだろうか。そして民話として語り継がれていったのだろうか。

頂上から見える村の光景は隠れ里と言ってもよいぐらいだ。そう、天狗から見れば神隠しも容易であっただろう。

帰りはもちろん下りだったので楽だった。

「今度は散歩がてらに1人で行ってみようかな」

「やめた方がいい。これからはマムシがでくる季節だし」

トオルは脅かす。

「日陰になる山道はマムシにとっては冷たくて気持ちの悪い道だ。お腹を冷やすために出てくるよ」

言ってるそばから小さな蛇が出てきた。トオルは手近にあった杖をとってつついて殺す。

「あんな小さな蛇を殺すなんて」

「バカ、あれがマムシだ。都会育ちはこれだから困る。見つけ次第殺すものだ」

トオルは真剣だった。

「モエ、絶対、お前ひとりでこの山道を行くな、危ないから」

私は返す言葉なく黙ってうなづいた。

## 第12話・牛の話

近くに3頭の牛を飼っている家がある。このうちの1頭が、子牛を産んだ。

「見に来るかい？」

そこのおじさんが誘ってくださったので、私は喜んでお邪魔した。子牛はメスだったそうだ。その子牛も大きくなったらまた子牛を産むだろう。そしたらまた牛が売れる。おじさんも喜んでいた。

昔は村も牛の飼育が盛んだったそうだ。今は重労働なのと過疎がすすんだせいで、わずかししか飼育されていない。現に母屋だって昔飼っていた名残の牛舎がある。今は物置小屋だけだ。

ここで生まれた子牛は子牛を売る市がたつと売られていく。神戸や松阪に連れられて、神戸牛や松阪牛になる。高いけれどおいしい牛肉になるのだ。

子牛の目は美しかった。いずれ肉牛になる運命も知らず、つぶらな目で私を見つめる。大きくて黒い艶がある。飽かずに見る私を親牛がいぶかるようにして、子牛を隅においやって隠した。

昨日産まれたばかりという子牛はまだ足元がおぼつかないが、それでも健気に立っている。私は親子牛に見とれていた。

不安げだった親牛も私が害をなさぬ人間だと判断してくれたのか、反芻を始めた。子牛はそのまま隅にじつと立っている。

天井には5、6個のツバメの巣があつてこれまた子ツバメがぴいぴい鳴いていた。親鳥がひっきりなしに牛舎の窓を歩きかってエサを運んでいる。大層にぎやかな光景だった。

私はこの話を夜母屋の義父母に話した。

母屋でも牛の話題になると昔飼っていたこともあり、思い出話がつきない。義母が一番忘れられないという話を教えてくれた。

「あれは子牛を売りに行く前の晩だったけん、」

（・・・さあさあ、この家にいるのも今晚限りじゃ、そう思つて子

牛の好物ばかりを運んで食わせてやった。それから子牛の背を撫でてやったよ。やさしく話しかけてやったよ・・・)

「・・・お前がこの家にいるのも今宵限りじゃのう・・・。しっかりと食べんさいよう、」

・・・すると当の子牛がピタと食べるのをやめ、わたしの顔を見るんじゃあ。それから黙って牛舎の隅に引っ込んでしもうた。次の朝、その子牛をトラックで積むとなあ、人間のように涙を流していてなあ、切なかった。かわいそうでなあ。でも仕方ないよ。人間に食べられるために生まれてきたけん・・・。

牛は人間の言葉がわかるんだなあ・・・。

義父も言う。

「牛は賢いよ」

さんがじよう

三ヶ上山で夏の間、放牧していたころの昔話。

秋になると飼い主が迎えにくる。牛は主の声をちゃんと聞き分けて飼い主の元へ行く。そして大人しく下山していく。

迎えが遅れると勝手に山を下りてくる。自分の飼い主の家を探し当て、牛舎の自分のいた場所まで自分だけで帰ってくる。

牛は、低能、鈍くさい、というイメージがあるが、走ると速いし、競う本能もちゃんとある。

義父も義母も口を揃えてきつぱりと言う。

「牛は賢い生き物じゃ」

そこには長年飼育に携わっていた人間の経験から来る重みと真実があった。

牛ってかわいいなあと思った。

### 第13話・人形峠その1

国道途中に「人形峠トンネル」がある。

トンネル中半ばに県境を示す標識がある。

私の住んでいる村側からこのトンネルに入ると入り口は大きくカーブしているし、夜になると明かりが少ないせいか何となく不気味ではある。実際幽霊話もあるらしい。夜中にトンネルを抜けようとすると母子の幽霊がでるらしい……。それも納得できる不気味さがある。

土地つこのトオルによれば確かにトンネル内で自動車事故が起ったことがある。だが母子の幽霊に会ったという人には会ったことがない、らしい。

「あれはただの噂だよ」

幽霊が出るかどうかの真偽は別として「人形峠」という名称自体がかなり変わっている。由来はやはり昔話から。しかも2つある。

1つ目。この峠にはお化けがいて旅人を困らせていた。そこへ頭の良い人形使いがやってきて「化け比べ」というものをしようではないかとお化けに提案した。負けると食べられてしまうので人形使いも必死だった。そのお化けは99種の生き物に化けたが幸い人形使いは1000体の人形を持っていたので1000種の生き物に化けることができた……。というわけでお化けに勝った。負けたお化けは驚く。そして潔くここの領分はお前に譲るといつてどこへともなく姿を消した。それ以来この地には「人形峠」という地名がついた。

2つ目。ハチのお化けがこの峠にいた。峠を越える旅人の生き血をすする、どうしようもないハチだったらしい。旅人も村人も困っていたのを見かねてある僧侶が峠に木の人形を置いていった。3日

後に様子を見に行ったらハチのお化けは人形を人間と間違えて懸命に生き血をすすろうとしたらしい。が、とうとうかなわずキバを抜かれて死んでしまっていた。バカなハチのお化けである。それ以来この地は「人形峠」と言われて現在にいたる・・。

こういつた伝説にちなみ村のシンボルキャラクターは「ハチ」である。あの黄色と黒のしまを持つあのハチ。

昔話だと憎たらしいがこれはかわいらしいハチである。あれが旅人や村人を困らせたお化けのなれの果てである。

私はトオルに言った。

「シンボルにハチのキャラかあ。もうちょっと鳥とかお花とかかわいいものにしてもよかったのじゃないの？ハチの嫌いな人も多いよハチって刺されるイメージもあるしそれなのにキャラクターにしたのね。変わってるね」

村の土地つこのトオルはむきになって反論した。

「今のシンボルのハチはなあ、おいしい蜜をよこしてくれる良いハチなのさ。モエもハチミツは好きだろうが！」

しかしトオルはにやりと笑ってこうも言った。

「いいかい、ここはなあ、隠れ里らしく四方山に囲まれた土地だ。

昔話でも村に役立った生き物はない。人間に害なす、化け物やハチのお化けが主人公なのさ。そんな話しか残っていない。いかに自然が厳しかったかわかるうというものさ」

幽霊話と言い、人形峠には不気味な話が似つかわしい場所なのかもしれない。

……著者補足……

ここに書いた昔話には実はいくつかのバージョンがあります。人形遣いがお坊さんになったり、ただの旅人だったり。お化けもハチではなく蜘蛛だったりします。今回はその中で代表的なものを書いてみました。

## 第14話・人形峠その2

先に書いた人形峠にはもう1つ有名な話がある。明治になるかならぬかの時代の昔話だ。これはある母子共々行方不明になった事件から由来する。実際にあったらしいことだ。

旅をしていたある母親が子供をおんぶしているとその子供がいつのまにか人形になっていたという。驚いた母親が本物の子供を探す。山道をさまよっている間に道に迷って行き倒れになったという。

「子供が母親の知らぬ間に人形になる」というのが薄気味悪い話だ。事の真偽はともかくとして母子して行き倒れがでたのは真実あったらしく哀れんだ村人が母子地蔵像を建てて弔っている。

この地蔵は今でもあるが先に書いた人形峠の人形トンネルとは少し違う位置にある。（国道からはずれたへんぴな場所にあります。）ついでにそこへお参りすると虫歯の痛みも止まる、という霊験があるという。どうしてこの話に虫歯が出てくるのかはよくわからない。

「あそこへ行くには湿地帯を抜けないといけないしこの季節には虫が多いから、君1人では行けないよ」

別に行きたいわけではない、と私は言う。

トオルは真顔で話を続けた。

「山にはな、時々説明のつかない現象が起きるんだ。マジで言うよ。あの山に登ると変な磁場があるらしく方向感覚が鈍ってしまう。モエのような方向音痴は絶対に行くな。でないと例の母子のように行き倒れになるよ」

私は行かないよう、と返事した。



## 第15話・春のカエル

おたまじゃくしは幼稚園のころに見たきりだ。

ところがここでは見つけるのに困らない。村の畦道を歩いてひよいと水田をひと覗き。

すと、いるわいるわ。小さな黒いおたまじゃくしが。うじゃうじやという。

私は最初それが何かわからなかった。おたまじゃくしとわかったとたん、何となく懐かしくなつて歓声をあげてしまった。たまたまそばにいた義父に笑われてしまったくらいだ。

おりしもその前後、ひっきりなしに親がえるが「げこげこ」と鳴いている。夜通し鳴いているし、朝も昼も鳴いている。産卵の季節じゃけん、と義父は言う。

「たんぼに水を入れてやるとな、カエルが喜んでずっと鳴いて暮らすんじゃ」

なるほど。

おたまじゃくしの他にもあめんぼのような水田をすいすいと浮いて闊歩？している虫もいる。そのほかいろんな虫がそこらにいる。

私は虫には興味ないので名前を知ろうとも思わない。が、トオルは小さなころには水田から虫やカエルをつかまえては遊んでたらしい。

虫達を狙つてツバメもやってくる。食べ物に困らないからだろう。益鳥だと言つて村の人たちも大事にする。きっとツバメにとっては村の住み心地はよいに違いない。

さて私はたんぼの水をバケツにくんで5匹のおたまじゃくしをペットにした。彼らは人間は危ないものだとは本能的に知っているのだろうか。私が毎朝声をかけても一向になつかない。きっとなつくという知性もないのだろう。

おたまじゃくしは成長が早い。すぐに手足が生え、2本脚は4本脚になった。尻尾が短くなるともう立派なカエルになる。

ある朝、バケツの中のおたまじゃくし達が全部いなくなっていた。トオルは笑った。

「カエルになったとたんバケツからさつさと出て行ったのだろうよ」畦道を歩くと足元でぴょんぴょん跳ねるものがある。これが全部小さな艶々とした緑色のカエル！とてもかわいい。

これが大きすぎると不気味で怖いがでもこの頼りなく跳ねているだけの小さなカエルは本当にかわいい。

そうしているうちに彼らはまた成長してきて今度は新居の窓にへばりついているのだ。彼らは夜になるとどこからともなく窓にやってくる。部屋の明かりで虫が来るのをカエル達はちゃんと知っているのだ。

どうかすると2階の窓にまでへばりついている。ガラス窓越しにカエルを見るとどんなに小さなカエルでも10本の吸盤の力がとても強い。この吸盤で垂直になった自分の身体全部を支えきれなのだ。その上で虫がやってきたらそのままの姿勢でペロツと舌をだして一瞬で食べてしまう。

緑の背に白いお腹。大きな飛び出た目。最初はグロテスクでも同じ姿勢のまま我慢強く虫を待っている。これを毎晩見ていると自然と情もわいてくる。

かくてこの私も小さなカエルならば触れるようになった。触るとカエルは頼りなくぐにやぐにやして柔らかい。食用になるのもわかるような気がする。手から飛び出せないように両手で包んでもっと虫が来るところへ誘導してやったりもした。

そのうちもつと大きくなると雨上がりには道路にのそのそと這い上がってくる。国道だろうがそこはお構いなしだ。そういうカエルは車に轢かれてぺちゃんこになって死んでしまう。つぶれたカエルのお汁でそこらあたり独特の青臭い香りに満ちる。

カエルはたくさん兄弟姉妹がいても、カラスのえさにされるし

踏まれるし轢かれるし散々である。無事越冬しまた子孫を増やせるようになるまでに成長するのはほんの一握りだろう。これがカエルのエリートだということになる。だからひと組の夫婦カエルが数万の卵を産卵する。自然の厳しさがよくわかる。

カエルに言わせると人間が甘っちょろいんだよ、と啖呵を切るだろうか、それともその知性もないだろうか。

## 第16話・法印さん

「法印」と書いて、「ほういん」と読む。

聞きなれないが昔からある人間の職業の1つだ。

法印さんは村人の願いや要求に応じて祝詞をあげてやつたり、家の新築改築の時期のアドバイスをしたり占ったりする人のことをいう。

今もいる。ただし人数は少ない。

現に私が住んでいるこの新居も、法印さんに家相を見てもらったうえで棟上げの日取りや年周りを判断してもらったという。

トオルが言う。

「実はね、ぼくのひいひいおじいさんも法印の資格を持っていたんだ。鳥取県三朝町に三徳山みとくさんという修験道の山がある。そこで修行して法印の資格をもらったという。法印を名乗れる身分証明書みたいなものが今も古い母屋の蔵にあるはずだよ」

三徳山といえば頂上近くに役行者えんのぎょうじやが神通力で造ったというお堂があるので有名だ。投げ入れ堂といって国宝になっている。

トオルのひいひいひいさんは法印の資格を取ると母屋の敷地内に小さなお堂を建てた。そこで村人たちの相談ごとについてのやつたという。

「靈感も本当にあつたみたいだ。失せものの場所を当てたり、予言もできたらしい」

「へえ・・・、本当？」

「ああ、戦時中で家族の出征を心配する母親や新妻に赤紙（召集命令書）の来る時期を当てたり、君のところには赤紙は来ないぞと言したり、結構当てたらしいぞ」

「へえ、赤紙ねえ・・・」

ひいひいひいさんが建てたというお堂は今では跡形もない。が、靈感と言うかカンの鋭いところはほんのちょっぴりでもトオルに遺

伝しているではないか？だって電話が来るのを当てたりするから・・。

ひいひいじいさんの靈感は村人に重宝されたらしい。

それで儲かったのかは不明だが財産は何も残さなかったから儲け度外視だったのかもしれない。

その代わり祝詞を挙げたときに使用した人形や、お札、祭壇の一部、書きつけが残っている。それとホラ貝、修験道の装束・・。

それらはもうぼろぼろだがちゃんと蔵の中にあるという。

「ねえ、トオル。あなたひいひいじいさんの後をついで法印になつてみたら？」

「うーん、確かに本気でやってみないか、と誘われたことがある。

でもぼく修験道って厳しいし修行が面倒だし断ったよ」

もったいない、でもつらい修業をしなければならぬ法印は、お気楽主義のトオルには無理だろう。これでいいのかも。

## 第17話・夜の高原にて

早いもので7月も半ばに入った。この村でも汗ばむ季節になった。風もあるので暑すぎるということはあまりないが私は虫が嫌いです。なのに風と共に小さな羽虫やカメムシがやってくる！私は声を大にして叫ぶ。

「カメムシがイヤッ！！」

涼しい風が吹いてきて湿気がないのでゴキはいないがカメムシがいるのだ。

実家でよく見かけた小さな黒いカメムシではなくこちらのは大きい。これが洗濯ものにもくっついてくるので許せない。しかし追い払おうとすると黄色のひどく臭い液体を吐き出して逃げていく。不気味な模様のある外見もあってさわることもできない。まったく嫌な害虫なんだろう！

義母は慣れたものでカメムシだろうがなんでも頓着なく虫を見かけると手で払い足で踏みつぶす。私には到底できない芸当だ。村の人は虫に慣れているからできるのだろうか。

「モエちゃん、何で殺せんのじゃあ、うん？」

「・・・虫、嫌いなんですけど」

と返事しただけでびっくりされた。その時はちよっぴり気を悪くしちゃった。いや、私が一番悪いのだけど。（いやいや、カメムシの存在が一番悪い）

それはそうと7月になると新居周辺ではホタルを見かけなくなつた。（ホタルは許せる存在なのである）ホタルだって一応虫だが心なごませる光をだすので許せる。一応世間的には稀なる存在だしがんばって生きていけ、と励ます気にもなる。

「ホタルが見たい。カメムシばかり見るのもイヤ」

ある晩トオルに愚痴るとトオルは言った。

「じゃあ恩原高原途中の清流にまだホタルがいるはずだから今から

見に行こうか」

私は喜んだ。夜のドライブって本当に結婚以来ではないだろうか。時計を見ると10時をまわっていたが喜んで車に乗った。

車道はもう誰もいないと思いきや、案外すれ違うものだ。長距離トラックも多いが普通車も多い。国道から村道に入ってもまだすれ違う。

「恩原高原でキャンピングしてご飯を造って自然に親しむ。それから泊らないで帰る人も多いんだ」

「ふうん」

村道からまだ脇にそれると整備されていない川がある。その川沿いに車を止める。トオルお勧めの現地民しか知らない「ホテルスポット」だ。車から降りると結構標高が高いらしく山の冷氣と寒気が襲った。人家も街灯もない。霧もわいている。街灯がないから真っ暗だ。

トオルは懐中電灯を持ってきた。ガードレール越しに下の川を見る、と手招きをした。私はトオルに従った。何かが点滅しながら動いている。ホテルだった。しかも新居で見るよりもずっと大きな光りだった。

「あれはゲンジボタルの光だ。普通のホテルよりもずっと大きいのさ」

ゲンジボタルはぴかぴかと点滅していた。私達は黙ってホテルの光を見ていた。

ホテルはオス、メスお互いを呼び合う。子孫を作るために、あんなに一生懸命おしりを光らせているのだ。これは断じて人間の鑑賞に耐えうるためではない。健気で私は感動した。

「このあたりも川と道路の整備もすすめるそうだ。今でさえ、数は少なくなっているのに整備がすすめばもっともっと少なくなっていくだろう」

トオルはつぶやく。私達は放心したようにホテルの光を見続けた。

と、いきなりトオルののどから「ごくつ」とつばを飲み込む？ような音がした。やけに大きく響いたので私はトオルを振り返って見上げる。トオルは山の上を見ている。私も目線を追ったが思わず息をのんだ。目の前にぼーとした、大きな光りの「わっか」が出ているのだ。「わっか」は、しかも、移動している。

「何、アレ？」

聞く間もなく、山の上から猛スピードで車が下りてきた。「わっか」の間を上手にくぐって通り過ぎて行った。

「何だ。薄い霧が車のライトに反射していたんだ。ここのカーブはきついので、光が移動して見えたんだ。びっくりしたよ・・・」

トオルはバツが悪そうにつぶやく。

「高原から下りてきたのね、これから家に帰るとしてももう遅いし、いっそ泊ればいいのにねえ、」

私が無気なくそういうとトオルは私の手をつかんで車に誘導してくれた。

「霧がひどくなってきて少し寒い。ぼく達も帰ろう」

言われてみれば本当に寒い。ノースリーブのシャツを着ていた私の肌に鳥肌がたっている。と、また山上から1台の車が下りてきた。どうってことのない普通車だ。霧が作った「わっか」とくぐる。

私達も多分その「わっか」をくぐったのだろう。霧が濃くなってきた。ちょうどよいときに切り挙げて帰宅したに違いない。

新居に帰るともう0時をまわっていた。短い時間だと思っていたが結構時間が立っていた。シャワーを浴びてパジャマに着替えたトオルは人心地がついたようだ。はあっとため息をつく。

「モエ、あそこは高原につながる道路のわき道なんだ。でもな、高原にはつながっていない。というのは今工事のため行き止まりのはずなんだ」

私はびっくりした。

「じゃあ、あの2台の車はどこから来たの？」

「知らない。道に迷った車かも・・・」



「まあ」

私達は無言になった。そして私はちょっぴり夜の山って怖いな、  
と思ったのだ。

## 第18話・村の湖

村の湖すなわち恩原湖、これはダム建設のために作られた人造湖だ。

今日は晴天なのでそこへドライブに行った。私が運転してトオルは助手席でビールを飲んでいる。独身時代は運転免許を持つてはいてもペーパードライバーだったけれど村での生活は車がないととても不便だ。

よって村の道と運転技術を覚えるためにこうして時々特訓してもらっている。

人造湖とはいっても自然にできたものと区別がつかない。とても広くてあっさりとした感じの湖だ。あっさりという言葉を使うのは観光地化が全然されていないからです。

湖の周りには葦がそよぎ、クマ笹が囲んでいる。

「昔はわかさが取れた。小さい頃はよくおやじと釣りに行ったよ。でも今はもうダメだ」

トオルはビールをのみながら言う。

「どうして」

「どこかのバカがブラックバスを放した。あれは繁殖力が強い。たちまちわかさは全滅だ。もう釣りにいってもブラックバスしか釣れないよ」

わたしは釣りのことはよくわからない。トオルはわかりやすく教えてくれた。

「ブラックバスは日本の魚ではない。キャンチ、アンド、リリース・。釣って楽しむ魚だな。わかさぎのようにおいしくもないし」

「はは、トオルは釣って食べられる、おいしい魚が好きなのね。でもブラックバスも工夫次第でおいしく食べられるでしょう」

「こうすればおいしいですよ、というのはあるにはあるけどね。だが元からいた天然もののわかさぎのうまさにはかなうもんか。故意

にブラックバスを放したヤツは大罪だ」

トオルはブラックバスが嫌いなのだ。思うだけで腹がたつらしい。魚釣りには変わりがないのに、どうしてなんだろう。トオルは声を張り上げた。

「ブラックバスは魚じゃないよ。本当に一番最初に放したヤツを殴りたい」

「持ち込んだ人はどこからともなく生きた魚持参でやってきたのねえ・・・で、放した人は見つかったの？」

「見つかるわけないだろう」

「ふーん」

魚の話はよくわからない。私は景色を楽しむことにして車を止めて湖のそばに林立している白樺に目をやった。

見事な白樺だ。青い山に真つ白な木々の取り合わせ、イラストにしても映えるだろう。白樺林と言つと軽井沢や蓼科高原が有名だが恩原湖の白樺林もなかなかのものだ。

でもまわりには何も無い。林と湖だけ。観光地っぽくないだけに風景に興味がない人にはおもしろくないだろう。

どこかでヒバリが鳴いている。バードウォッチング用の小道は整備されている。小さいけれど駐車場やトイレもちゃんとある。

村の方だつて遠くから来てくれる（数少ない）観光客のためにいろいろしているみたいだ。

## 第19話・葬式その1

義母が新居にやってきてパックに詰められた赤飯をくれた。結構量があつてずっしりと重い。

「2パックもらったけん、1つあげよう。食べんしゃい」

赤飯はトオルも私も好物だ。喜んでいただいた。

「このお赤飯、どこかの家のお祝い事でもらわれたのですか」

「祝い事？違う、違う。葬式じゃ」

「・・・葬式でお赤飯を炊くのですか？」

私は驚いた。私だって昔のしきたりはよくはわかっていないがそれでも祝儀は赤飯、不祝儀は黒豆の入った白いご飯を炊くものだと思っていた。義母は笑った。

「ここらあたりは葬式がでたら、赤飯を炊くのじゃあ」

その晩その赤飯を食べながら話をしたらトオルもおかしそうに笑った。

「その葬式は本村からちよつと離れた家のおばあちゃんのだろう。

もち米は常会の人を持ち寄って炊くんだよ。そしてみんなに配るのさ。この村はどこでもそうだから。我が家でも神道ということもあり、葬式はおめでたいという考えもあるからね」

「葬式がおめでたいの？」

「モエの実家は仏式だから知らないのも無理はない。神道の家はね、死ぬということは神様になるということだからめでたいんだよ。だからお赤飯」

「ふうん・・・」

「戒名だつてたとえばぼくが死ぬとトオルノミコト、君が死ぬとモエノミコト。ミコトっていうのは命と書く。ね、簡単だろう」

トオルは仏式のややこしい供養のしきたりや戒名をつけてもらうのにお金がかかるのに批判的だ。

村の葬式の話に戻るが自分の家から見える範囲内で死人が出たら

つきあいがあつてもなくても、お供えをする。また喪中の家族は何もせず隣組にあたる「常会」のメンバーが知らせて回ったりお供え物の管理を一切仕切る。その他いろいろなしきたりがあるらしい。「モエは村に慣れていないし、葬式の手伝いも未経験だけどいずれ順番は来る。教えてもらわないと困るだろう。ぼくのお母さんもそう言つてたよ」

「そうねえ・・・」

今更ながら私は思い知る。葬式の手伝いはしないといけない。その土地のしきたりに従つて手伝う。お嫁に行つて嫁入り先の家になじんで、その土地になじむつてそういうことか。ふと思つた。

お赤飯はおいしかった。いずれは私も炊く人、焚いてもらう人になるのだろう。

もう1つ葬式にちなんでおかしかつた話。これは実際にあつた話。死人に猫を絶対に近寄らせてはいけない。これは村の絶対のタブー。

その風習を忘れた、ある家での話。うっかり飼い猫を死人が安置されているところに近寄らせたらしい。するとお悔やみのために集まつた村人たちの目の前で死人が動いたという。

「動いたんだ、本当に」

「トオル、本当に、見たの？」

「いや、見たのはぼくのひいじいさんだ」

「なーんだ。大昔の話じゃんか・・・」

「昔でも実際にあつたんだ。だから絶対のタブーだつて」

「ふうん・・・」

「だから猫を飼っている家で葬式があつたら、蔵に閉じ込めておかねばならない」

・・・猫つてそんなに不思議な力があるのだろうか・・・。

## 第20話・葬式その2

そうして1カ月もたたないうちにまた母屋の義母が葬式が出た、と知らせに来てくれた。しかもこの常会の家のひとだという。常会と言うのは昔で言う隣組のことだ。私の家では母屋とひつくるめて8軒ある。1軒ごと離れて建っているので実家の隣組のように密集地帯の上での話ではないので近所さんと言う認識はない。

でもトオルや母屋の義父母には近所と言う認識があり、その微妙な？感覚にずれを感じることもある。

「どなたの葬式ですか」

「ここから3番目に離れた家のおじいさんじゃ」

「私はその人とは面識がないですけど・・・あつ結婚後のあいさつ回りのときに会ったことがあるかも」

「で、モエちゃん。あんたも村の一員じゃけえ、葬式手伝いに行きんしゃい」

「・・・えっ」

そういえば結婚後専業主婦兼イラストレーターで確かに村の人たちのおつきあいはまだあまりない。同じぐらいの年の人とも会わない。みんなよく知らない人ばかりだ。その中での手伝い・・・聞けば女性は2日間ぶつとおしで手伝わないといけないという。義母はなんでもないことのようにさりと言う。

「大丈夫じゃけん。みんな昔からこうしてやってきたけん。ただ昔のようにやかましいことはない。モエちゃんが来る3年前ほどからここには地区公民館というのができたけえ、そこで葬式の手伝いをするけえ。あんたはそこへ行きやあええ」

イラストの締め切りもあるが手伝うもんじゃと信じ切っている義母の前では断れない。葬式と言うのはいきなり前触れなしにくるものというのも私も理解しているから「わかりました」と言った。

そして黒い服と黒いエプロンを探し出して布巾を持って地区公民

館に出向く。すでに何人かの主婦やおばあさんたちが台所で忙しうに働いていた。

その中で一番近い隣の家の（といっても離れているけど）おばさんがいたので挨拶する。おばさんはにっこりと笑って「ああ、あんた初めての手伝いだからおいおい覚えていけばいい。まずはこれ見て」

メモをくれた。

1日目の昼、つまり今日のお昼ご飯の準備60人分、夕食60人分。明日の葬式後の昼食80人分に葬式用赤飯の準備120食分！！

おばさんはこともなげに言った。

「みんな得手分けしてしないと。メニューはもう決めてある。悪いけどあんたは若いし力があるじやろう。Nさんとこの若嫁さんと一緒に机と座布団を並べといってくれるかあ」

私はもちろん「わかりました」と返事する。村の決まりとしきたりがあるのはどこでも一緒だし私はまだ初心者だから言われるままに行動するしか役立たないことは承知しています。つとめて明るく笑顔で動こうと思う。

公民館とはいえ狭い台所での会話だ。10人ほどの女性がひしめきあつて食事の材料を前に刻んだり湯がいたり食器を用意したりしている。そこへ一番肥った70代初め位の方が大きな声で私に聞こえるように言った。

「今の若い嫁さんはええなあ。昔はこの公民館もなかったからこんな楽じゃなかった。葬式出す家の台所を借りてしたもんじゃ。朝5時に起きてお米といで炊いたもんじゃ、火もイチから起こして大変じゃった。ほんに今は楽していい恰好していい気なもんじゃ」

とたんにがやがや騒がしかった狭い台所の空気が冷えてしんとした。その人は口を歪めて私の顔を睨みつけている。何が気に入らないのだろうか？私はどう言っているのかとまどっていると1人の女性が来てニコニコしながら私の腕をとった。

「モエさんといったかな。私Nです。こっちに納屋があるから折り

たたみの机とか出していこう」  
と連れて行ってくれた。

納屋で忙しく机を準備し公民館の広間に並べ机の上を拭き、押し入れからざぶとんを出す。それも並べておく。途中にさっきのいじわるな年配の人がやってきて「座布団の上下がばらばらじゃ、直しんさい。ほんまに何も知らん子じやのう」とか言う。

座布団に上下があるなんて私は知らなかったが言われてみると微妙に縦横のサイズが違う。「わかりました」と素直に直す。

あとでNさんは納屋で二人きりになるとにつこり笑って言った。

「さっきの人ね、ああいうのが村姑むらひめっていうのよ。今日明日ずっと一緒に葬式の手伝いで顔を会わせなきゃいけないけれど、何言われても気にしないように」

「むらじゅうとめ・・・」

「そう。私はあなたよりも年上だけど同じ20代のお嫁さんって私達だけだしね。あとは年配の人やおばあさんでしょ。この村で生まれて生きて養子をとった人も多いの。お嫁に来た人だってここで何十年も生きていて村から出たことのない人が多いわよ。実は私も県外からお嫁に来たの。たいていは朴訥でいい人なんだけど1人だけ、若い嫁さんを指導？と称して葬式や会合や村掃除で顔合わすたびに嫌み言うのが趣味の人がいるけど気にしないように。」

さっきのおばさんのことだ。Nさんは重ねて言った。よほどさっきのおばさんには嫌な目にあっただろう。あとから納屋に物を取りに来た50歳代の人も私を氣遣って「私もあの人に嫌われている方じゃ。この年じゃけどあの人から見たら若い嫁さんになるの。今だに何も知らん人よばわりされています。モエさん、あなた腹立つだろうけど毎日顔をあわせるわけではないので気にしないように」と言った。

（この人に関しては後に同じような話をいくつか聞くことになる。  
後進への指導は温かい気持ちで教えて差し上げるのと何も知らない



のね！といじわるな気持ちで話すのとは顔つきからして違う。普段の行動もモノをいう。この人はそれ以外に立場の弱い呆けがすんだ老人や足腰が弱った人をいじめたり、カラオケ同好会の雰囲気や区長さん夫婦にはすごいおべっかを使うらしい。相手を見て態度変えるんだ。まわりの人は田舎で朴訥な人柄の人が多いので閉口しつつも黙っている。かつ嫌いな人のことは仲良しに嘘八百の悪口を吹き込むらしい。そういう悪口に信じ込んで仲良くして入る人もいる。ちなみに我が家ではある別のこともされて警察沙汰にしました。はあと）

こんな嫌な人がいたので筆が変な方向へ進んでしまった。

葬式メニューは昼豆腐とわかめの味噌汁、サバのから揚げ、付け合わせの煮野菜、ご飯、お茶。その合間合間に葬式を出す家の手伝いをする人の差し入れと称しておにぎりや漬物（漬物だけは各家持ち寄りで）を用意。もちろんお茶も。そして食器や割り箸の宅配。結構忙しい。

昼食は手伝いの人たちがめいめい公民館に立ち寄って食べて行かれるが食器を片づけ洗いつつ夕食の準備をする。お酒の用意も昼間から飲む人のため（！）にも用意しないといけない。全部そういう業者まかせにせず近所の常会がするのだ。全部。

常会以外の人もお互いが大変なのはわかってるので入れ替わり立ち替わりエプロン持参で手伝いに来られる。基本手伝いのメインは常会のメンバーになるので台所に常時詰めていないといけない。ただNさんだけは小さいお子さんがいるのでお乳をやりには時々は帰らせてもらっていた。

それなのに例の人はNさんにも「帰ってくるのが遅い」と言ったりした。自分は忙中閑有でお茶を飲んだりお菓子を食べていたくせに。ずっと立ち働いている感覚らしい。またその人よりもずっと年上の常会のおばあちゃん（いい人）にあんたは物忘れがひどいから

こっちは苦勞する。足ひつぱらんといてくれとか言った。そのおばあちゃんはまだ素直な人で「そうじゃ、確かに物忘れがひどくなつて、許してつかあさい」とか言う。かわいそうだった。

Nさんは子供がなかなか離してくれなくて、と言つて遅くなつたことに（それでも30分ぐらいだ）謝つていたが常会の人たちはそのおばさん以外は「いいのよ。大変ねえ。大丈夫だからさいさい（時々）家に歸つて抱っこしてやりんさい」と言つてあげてた。

そのおばさんの嫌み連発と行動以外は常会の人たちはとても温かくて仕事もしやすくて意外と楽に仕事できたことは言つておく。

夕食の片づけが終わつて新居に戻つたのは夜の10時過ぎだった。余つた食材を食卓に並べつつトオルに「女は大変だよ」と強調して言つた。

トオルも男手がいるので今日仕事を休んで手伝いにいつていた。公民館にも昼食、夕食と食事をしていたが一緒にしゃべる時間もなかった。明日も葬式本番なので仕事を休んで手伝いにいく。

母屋の義母も私を氣遣いいたわつてくれる。

「昔は確かにその人の言う通り大変じゃつた。特に冬場の葬式は雪かきからしないといけないから常会だけでは足りず地区総出の手伝いだったよ」と言う。

私はもう疲れてすぐに寝てしまった。（締め切りどうしよう）2日目の朝は公民館に5時集合で赤飯を炊かないといけない。公民館の力ギを持っている人は午前4時45分に開けにいかないといけないそうだ。大変だ！。

そして昼食を準備してそのあと片づけて食器も洗つて直して机もたたんで納屋に入れて座布団も全部押し入れに。掃除も後片付けもただ重たい机を折りたたんだりするのは葬式が終わつて男衆が来てくれてやつてくれたので最後は楽だった。男の人はみんな親切だった。若い嫁さんはお酌してまわりんさい、とか言われて正直おつくうでイヤだったけど、みなさん丁寧に接してくれて泥酔したりエッチなことをいう失礼なひとはいなかった。

死者とは1、2回しか面識がないので悼むというよりは葬式の手伝い（女は食事の手伝い）の大変さが身にしみた。2日目の葬式が全部終わると今度は葬式を出した家の人が葬式を手伝ってくれた人を家に呼んでもてなさないといけない。全員が疲れているのにすごい大変。なのに葬式を出した家の奥さんは大して役立たなかった私にも「ありがとうございます」と頭を下げてくれた。

田舎の葬式はお互いが手伝わないと成り立たない。都市部での直葬や孤独死なんて考えられないこの密度の濃さよ。驚くことばかりだったがいいい経験をしたと思うことにする。

葬式を出した家には詰めていなかったので葬式の進行や手順とかは全く知らない。男衆がやったのだろう。裏方も大変。だけど葬式を出さない家は今後もないし手伝いつつ、いつかは手伝ってもらう立場になるだろう。

だけど葬式後もこのつきあいがあり、今度は1週目、「いちふじゆう」2週目「にふじゆう」3週目「さんふじゆう」・・・と49日が過ぎるまで葬式を出した家に常会が集まって夕食を取るらしい。私はもうあのくそばあに会いたくなかったので義母に行ってもらうことにした。だけど夕食と言っても簡素化されて出来合いのお弁当のところが多い、とか3ふじゆう（・・・不自由の意味か？）まではするけどあとは49日まで省略可されつつあるらしい。

それでも昔ながらの風習は続いていてその煩雑さにはあ・・・つとため息をついてしまった。このため息は私にもこれができるのかしら、このしきたりに果たしてなじめるだろうか、とため息ではある。これがいまどきの若い嫁、と例のいやみくそばあに嫌みを言われる理由になるだろうか。

ただ常会の人間関係は例のおばさん以外はいい人だったことは重ねてここに書いておく。

## 第21話・あかちゃん

晴天の霹靂<sup>へきれき</sup>といってもよいことがおきた。

生理がこないのである。もしかしたら妊娠かもしれない。自己診断できるバーを買っておけばよかった、と後悔したが仕方がない。ここには薬局がないから。

「赤ちゃんができたかもしれないから、どこかの産婦人科に行きたい」

そう頼むとトオルは喜んでくれた。

「じゃ、産婦人科に行こう。明日有給を取るから一緒に行こう」

私達はもう赤ちゃんがお腹の中にいる気分でした。

でも母屋の義父母、実家の両親にはつきりと確定するまで内緒にしておこう。そう、今夜だけだ。多分赤ちゃんはこの私のお腹の中にいるはずだ。明日の診断がつけば言おう。きっと初孫の誕生を喜んでもらえるだろう。

残念ながら村内には産婦人科はない。新居から一番近いところでも、車で1時間はゆうにかかる場所にある。パソコンで医療情報をピックアップして行き先を決める。

あくる朝、もちろん初診で行った産科の病院にて。診断は思いがけないものだった。

「赤ちゃんは確かにお腹にいますが・・・動かない。これはもう死んでいますね」

「えっ、」

「すぐに処置した方がいいですね。赤ちゃんを子宮から取り出さないと母体に影響が出ますから、いいですね」

「処置」と言われて傷ついた。赤ちゃんはいた。でもまさかお腹の中で死んでいたなんて。

私達の赤ちゃんは8週。約3カ月。死因は不明。その場で子宮の

口を広げておく処置をされてその後取り出す処置をするまでしばらく待合室で待たされる。

トオルは辛抱強く待っていてくれた。診察室から出てきた私の顔を見てわかったのだろう。私は知らずに涙を流していた。

診察室の前で生後間もない赤ちゃんをおばあちゃんらしき年配の女性に抱かれている。乳児健診だろうか。真新しい産着で大切そうに抱っこされている。そばに産んだ新米ママがにこにここと赤ちゃんを覗き込んでいる。もうすぐ出産です、と言わんばかりにお腹が膨らんでいる人もいる。

私もああなるはずだったのに。いつのまにか死んでいたなんて！自分の配慮が足らなかつたのか。生理周期にも無頓着で、長距離の運転もしたし、お酒も飲んだ。辛いものも食べた。登山もした。義父の軽トラに乗ってがたがたと揺れる山道も行った。

あれもこれもみんな、赤ちゃんに悪かつたのだろう。

私は声も出さずに涙を流している。トオルがそつとハンカチを出して顔をふいてくれた。私達は目立たぬように待合室の隅でひっそりと座っていた。

ごめんね、ごめんね

ごめんね、ごめんね・・・

頃合の時間に私は処置室に呼ばれ、医師に赤ちゃんを取り出してもらう。

「しばらく休んでから帰りなさい。経過を見るから翌日と7日後に2回こちらに来てください」

「はい、わかりました」

もらった領収書には「子宮内容物除去手術料」とはっきり書いてあって私はまた泣きそうになった。

病院を出るともう夕暮れだった。朝はあんなにはりきつていったのに、うそのようだった。でもうそじゃない。お腹の鈍痛が現実を語る。

その晩私は早々に床についた。そして夢を見る。

赤ちゃんが、いや、赤ちゃんとも呼べない小さな生き物が私の横で寝ている。でも私の赤ちゃんということががつきりわかる。私は声をかけた。

「私のお腹じゃ、嫌だったのね？私の子供になりたくなかったのね？私の知らないうちに私のお腹の中にいて、私の知らないうちに、あなたは死んでしまった・・・」

するとその赤ちゃんらしきものは、私の心の中に話しかけてきた。「いいえ、お母さん・・・それは違います。ぼくはもともと身体が弱いのです。お腹の中で育たない子だったのです。誰が悪いわけでもないで悲しまないで。この次は大丈夫でしょう」

いきなり私の耳元で風が吹いた。

「じゃ、連れていくぞ」

年老いてしわがれた老人の声だった。

次の朝、産婦人科に行く前に新居の裏にある先祖の墓参りをした。小さなお花をお供えして、赤ちゃんをよろしく、とお願いした。

だってあのしわがれた声はご先祖様だったと思うから。

私に水子ができてしまった。かわいそうな子だ。知らないうちに生命を受けて、親の知らないうちにお腹の中で去ってしまった。私はその子を「幻児」、げんじと命名した。

そう、幻の子供、という意味である。

あの晩私の耳元でささやいた「連れていくぞ」と言ったあのしわがれ声。

それは、今も耳に焼きついていて、とても夢をみたとは思えない。

## 第22話・運転

私は村に来る前まではペーパードライバーだった。が、買物するには不便なのでどうしても車を運転しないといけない。ここにきてからペーパーの名を返上すべくがんばっている。

ここで運転していいな、と思うのは、交通渋滞がないことだ。スキーの季節以外、村を通る国道はがらすきだ。たまに乱暴な長距離トラックや県外ナンバーの大型バイクもいるがそんなのはこっちがゆっくり走っていても、勝手に追い越しをかけて勝手にさつさとしてくれる。これが実家の近くの道路だったら、いつも混んでいてなかなか追い越しなんかかけられない。だからパッシングされまくりだ。おまけに不法駐車も多いから運転しにくいことこの上ないし。運転練習ならやはり村の道路が一番いい。そして今日は晴天なり！私は洗濯も終えて、なんとなくうきうきしていた。寒くもないし暑くもない。いい気分だ。そうだ、まだ行ったことのない森林公園にでも行ってみよう、と思い立つ。

簡単なサンドイッチを作りお茶を用意して車に乗り込む。公園への道は整備されているし、地図で見る限りそんな難所はない。1人でも大丈夫だろう。

しかし私は忘れていた、のだ。

「山の天気は変わりやすい」ということを！

山の中腹辺りまで行くと見る間に晴天が真っ暗になった。そしてザッパァー！という感じで大雨が降ってきた。真夏の夕立のようだ。しかも雷までも鳴りだした。

行きかう車なんかないし、フロントも雨で全く見えない。すぐ道路わきに駐車してしばらく様子を見ることにする。

前も見えない大雨。バックミラーでも後ろが見えない。おまけに後ろのガラスのワイパーの動かし方を忘れて動かすことができない。

車の操作も不慣れなまま、いい気になって運転していた自分を恥じた。

雷はだんだんとひどくなる。

光ったと思うと直後にバリバリ、ドーン！である。もしこの車に落雷してしまったら私はもう死ぬ。泣きそうになる。本当に怖いのである。

少し明るくなったのですぐにUターンして村の新居めがけて元来た道を引き返す。

すると、あら不思議。見る間にあたりは晴れ渡り、懐かしい国道に出た。

天気はもとの晴天に戻った。あまつさえ雨が降った形跡すらない。道路も乾いている。キツネにつつまれたような、とはこういうことだろうか。

とにかく無事に懐かしの新居に戻れた。

その晩のトオルに言わせると私は「山の神に追い返された」、らしい。そうか・・追い返されたのか。何が気に入らなかったのだろうか。拒絶された気分だった。

トオルは私が落ち込んだのを見ると「冗談だ、山の天気は変わりやすいから、気にするな。これから観光客も大勢くるし、今度はだいじょうぶだろう。今日だけ山の機嫌が悪かったのだろっ」と言う。残念だが今回はあきらめた。でも公園はともいいところらしいので今度はトオルに連れて行ってもらうことにした。（土地っこのトオルなら山の神も文句あるまい。）



## 第23話・イツキ

7月になってさすがにこの田舎にも夏がやってきた。それでも朝晩涼しい、というか寒いときもあるのはさすが、というべきか。

さて、イツキという木がある。今、それが1本、新居の前に転がっている。根っこは新聞紙で覆われて荒縄でしばられている。まだ40センチぐらいの小さな木だが、木には違いない。

イツキ・・斎と書くが白い花弁が清楚でやさしい印象を与える木だ。山帽子とも書く。この木は村のシンボルで温泉湯のマークにもなっている。この花は村のあちこちでみかける。

平作原へいさくはらというところに村指定のイツキの銘木がある。そこへ連れて行ってもらったことがある。お墓の真ん中にそりやあ大きな木があつて誇らしげに花をつけていた。

あたりは人家が間近になく、もちろん観光地でもない。だから心行くまで眺めたものだ。

その時に私があんまりイツキの木に感動し、自分達の新居にも植えようよ、と言いだしたものだからトオルがどこからか調達してくれたのだ。

それがこの1本。

大木には程遠いか細い木だがイツキの木に間違いはない。小さな2、3個の花をつけている。

「じきに大きくなるね、楽しみね」

私はご満悦だった。木の根元を縄でぐるぐる巻いたままだとかわいそう。この木の植える場所を早く決めてしまおう、といってその晩だけ玄関に転がしておいたのだ。

ところが。

ここから私の夢の話になる。そこで私は新居の玄関にいる。そして私は今日来たばかりのイツキの苗木に話しかけられるのだ。いや、

つぶやかれた、と喋っていいだろう。イツキの木は小さな声で私に何度も訴えるのだ。

「おふくへ、かえるけん・・・、おふくへ、かえるけん・・・」

セリフはこれだけで苗木はそればかり繰り返す。朝目覚めてからトオルに見た夢を訴える。トオルはこの夢の話の話を聞くと黙ってうなづいた。

「よし、元の場所に戻してやろう」

「なあに、あの苗木はもらいものじゃないの？どこから取ってきたの？」

トオルはまさか、というふう首をふった。そして私の顔を眺めた。

「モエ、お前すごいぞ。靈感もっているのかもしれないなあ」

「何？なんで」

「いや、実はな、あの苗木はMさんと言う家の敷地にあったものを譲ってもらったんだ。もとあった場所が、家の先祖代々のお墓がみわたせるところだったからなあ、帰りたいがったのかもなあ・・・すぐに戻してやろう」

「じゃあ、おふくってという人のお墓へ帰りたい、ということだったのね」

「いや、違う。Mさんの屋号が<おふく>っていうんだよ」

「へえええ・・・」

私はそういうしかなかった。偶然にしてもすごい話だ。苗木が元あった場所に帰りたいがるなんて・・・そんなことってあるのだろうか。私は玄関口に出て苗木を見たが、別にどうということもない普通のか細い木だ。

私はその根っこに水をかけて湿らせてやり、その細い幹と白い花を撫でてやった。

そのあと、トオルが苗木のいうとおり元に戻してやった。そういうことがあったので家の庭先にはイツキの木はまだない。



## 第24話・方言

方言。この辺りにも方言と言うものがある。

「これ、なげといて」

この言葉で一時私はどれほど混乱したか。これは「これを捨てておいてください」ということだ。

投げるのではなく捨てるのだ。同じ日本なのに、なんという言葉の違いだろう。

しかも年代によつてはいまだにわからない言葉を使う。語尾なんか速いし最初はケンカしているのか、と思った。それぐらい違う。昔は同じ村内でも、それぞれの集落で微妙に言葉遣いが違ったそう。ちよつと聞いたただけでああ、あその出身だな、と聞く人が聞けばわかつたらしい。大昔は冬などは大雪で自由に集落を行き来できなかったという事情もあるのだろう。

5分も行けば県外にでる。（鳥取県）車さえ持つてればトンネルを越えただけで行き来自由だが、昔は何日ばかりで峠を越えて行ったものだから言葉が通じない面もあったらしい。現在はないが峠手前に民宿もあった。写真は残っている。

同年代のトオルの言葉はともかく、義父母や近所のおばあさんが集まって早口で話されると本当に語尾がわからなくてとまどう。

だつて「けん」「けえ」「じゃけん」「じえけえ」「じゃー」「じゃあ」それぞれ語尾の上げ下げも微妙な言い回しがあるらしい。  
・・全くわからんこともある・・。

一番語尾にくつつくことが多い「ーけん」には多少は慣れたかもしれない。けれども私はまだまだ超初心者、慣れない地の言葉を使つてみようかと

「これをとつてきました」を「これをとつてましけん」といったら変だーと大笑いされたことがある。（「これをとつてきましたけん、」が正解らしい。）

まあ、無理をして方言を使う必要もないけれど、同じ日本人でこの差。不思議に思う。昔の各集落の閉ざされた環境に思いをはせる。このネットや車上等の時代に生まれてきてよかったと私は思う。

一方土地っこのトオルや義父はまた違う思いがあるらしく昔の言葉、消えてしまった方言もあり、懐かしまれる。また昔の言葉を使う人々が年齢順に亡くなられさみしいともいう。

消えゆくものが1つ2つこうして消えてゆき、新しい言葉もまた生まれていくのだろう。いつの日か、方言ということばも死語になるだろうか。

## 第25話・村内の滝

岩井滝にお参りすると、子宝に恵まれるそうだ。

そのわき水は百名水にも指定されているらしい。味もいい。知る人ぞ知るスポットだ。

夏に行くとき涼しい。観光地化はされてはいない。お店もお土産物屋さんもない。静かでそこがかえってよかったりする。

行き先は簡単に観光案内の地図を見ていけばよい。駐車場から少し山登りしないといけないのでハイヒールはおすすめできない。そして、ここは夏と秋しか行けない。岩井滝のあたりは冬はもちろん春先まで雪で埋もれて通行不能になるからである。

「子宝」の効果も知っている人は知っている。以前せつぱつまった人が、ぜひ子宝祈願に行きたい、お水をもらいたい、といって登ろうとしたそうである。だが時期が悪く冬場だ。今あそこは2メートルも雪が積もっていてたどり着けませんよ、だめですと。と土地の人が言っているのに無理やり行こうとしたそうだ。

心情を思えばわからなくもないが、本当に行かせてしまったらこの人は凍死してしまう！と必死で止めたそうだ。

ここは毎年7月の初めにお祭りがある。修験道の人が集まってお焚き上げをするのだ。去年トオルがそのお祭りの見学に行ったら偶然だろうけれど、不思議なことがあった。

お焚き上げが終わると最後に山伏さんが矢をつがえて四方から空に向けて、矢を放つ。その劇的瞬間をカメラでとらえようとトオルが身構えていたら、何と4本の矢のうち、1本がトオルのカメラのレンズに命中したそうだ。

一歩間違えたら顔や身体にささっているところだ。まわりの見物客も驚いたのはいうまでもない。トオルも血が凍る思いをしたが、山伏さんはトオルの顔をじっと見ておられたそうだ。たまたま近所の人も見ていて、その場でトオルにこんなことを言った。

「あんだ、これ、修験の神様がお前も修験したらどうや、といっているのではないかいな。でないと、こないにずばりと命中なんかせえへんぞ」

トオルは青くなった。その人はトオルのひいひいじいさんが法印をしていたのをちゃんとご存知なのだ。

「いやあ・・・、ぼくは修験道や法印とかなるガラと違いますし、」

やっとのことで答えた。一緒に行った友人はトオルに言った。

「お前、何かいいことあるかもしれんぞ」

\_\_\_\_\_

「で、いいことあったの？」

「別に。山伏とか修験道とか、ぼくはしんどいことは苦手だしなあ」

「で、大当たりをとった矢はどうしたの」

「欲しい人がいたので、その場であげたよ」

「持っていれば、それこそいいことあったかもしれないのに」

「ぼく、こわいよ、そんなの」

⌈  
•  
•  
•  
⌋

やっぱリトオルは厳しい修業を積まないといけない修験道や法印だのは無理だ。山の神様もきつとがっかりなさっただろう。

## 第26話・雷雨

8月に入った。盛夏だが夜になると山の中の家なので冷え込む。「ここはな、7月が一番暑くて、8月になるとだんだん涼しくなっていく」

トオルの言ったとおりだった。

さて、山の天気は変わりやすい。まだ義父のように山の様子を見て天気を読み取ることはいできない。だくどひどい雷雨が来る場合はわかるようになった。

というのは、虫の知らせがあるからである。本当に虫の知らせ！ 靈感ではない。言葉通りである。

新居の各窓には網戸がある。その網戸に避難してくるのが小さな羽虫たちなのだ。それもたくさんくる。裏が母屋の田畑なので、そこにいる羽虫達が皆押し寄せてくるのだ。

まわりには人家がないので、我が家が羽虫の避難小屋？になるのだ。当然網戸をしていても小さな羽虫だと余裕で通り抜けられるからきちんと窓を閉めておかないと悲惨なことになる。ぎゃーっという事態になる。（経験済み）

殺しても殺しても羽虫が次々と家の中に入ってくるこの恐怖、わかってもらえるだろうか。おかげでいかにずばらな私でも雨がふるとどんなに暑くとも網戸と窓だけはきちんと締め切るようになった。春には巨大力メムシ、夏は羽虫と蠅（大きいサイズで脚が白い蠅です。なぜかコダマと言われている。かまれると痛い。凶暴な蠅です。）秋も懲りずに巨大力メムシ復活するし、冬は虫がいなければ、雪だらけで寒いだけ。いいところなしの山の田舎暮らしだが、いたしかたない。

せめて朝夕の山のおいしい霊気と空気を吸い込んで日々の糧としてよう。

トオルは言う。



「羽虫だつて生きている。この家はな、去年まで畑だつたんだ。虫達を追い出したのはぼく達だ。もともとは彼らの生活場所だったんだからなあ。仕方ないよ」

仕方なくとも羽虫の避難小屋になるのは嫌だ。殺虫剤はよく効くがあとの死体の始末に困る。トオルはこうも言う。

「殺虫剤なんかまくな！雨があがれば自然に家を出て行ってくれるから」

そのとおりだ。虫も心得ているのだろうか、でも羽虫がわんわんうなっていた部屋の様子ときたら自分の気がおかしくなりそうだった。私は虫が嫌いだってば！だから、あんなのは二度とごめんである。

私は雨になれば雨戸を閉め、窓を堅く施錠する。これで正解だと思う。この田舎はゴキと名のつく虫はいないが、それでもやっぱり虫は許せない。

第27話・夏の力エル

夏になるとそこらあたりカエルだらけになる。これはすでに書いた。

田んぼからあがつて虫を食べにくる。我が家の窓にへばりついて。えさになる虫は食べきれないほどやってくる。カエルにとっては食べ放題のお店みたいなものだろう。私はカエルは歓迎する。だって虫が嫌いだから。

夜になると新居の明かりを頼りにいろいろな虫がやってくる。カ  
ブトムシ、クワガタムシ、カマキリ、バッタその他いろいろ。一番  
多いのがやはり羽虫かな。名も知らない羽虫たち。

新居の網戸や勝手口には、外側に段差があるのでまるでカエルのマンション状態だ。大体１段に２、３匹づついる。カエル達は羽虫を狙って待機するのだ。

私はだんだんカエルがかわいくなつた。考えてみればカエルのぬいぐるみやストラップ、カエルのキャラクター、カーミットも大好きだ。もともと好きになる余地はあつたのだらう。

私は夕方、のそのそとどこからともなく出現するカエルをそつと手のひらにのせて勝手口の段差に案内してやる。

「さあ、ここにいると、おいしい羽虫がやってくるよ。食べ放題だからね。ゆっくりしておいで」

トオルはあきれて言ったものだ。

「おい、あんまりカエルばかり同じ場所に寄せ集めない方がいいぞ」  
「どうして？」

「わかんないか、都会育ちじゃ無理ないかな」

「だから、どうして」

「よしじゃあ、とつぷりと夜がふけたら理由を教えてやる」

1	1
2	2
3	3
4	4
5	5
6	6
7	7
8	8
9	9
10	10
11	11
12	12
13	13
14	14
15	15
16	16
17	17
18	18
19	19
20	20
21	21
22	22
23	23
24	24
25	25
26	26
27	27
28	28
29	29
30	30
31	31
32	32
33	33
34	34
35	35
36	36
37	37
38	38
39	39
40	40
41	41
42	42
43	43
44	44
45	45
46	46
47	47
48	48
49	49
50	50
51	51
52	52
53	53
54	54
55	55
56	56
57	57
58	58
59	59
60	60
61	61
62	62
63	63
64	64
65	65
66	66
67	67
68	68
69	69
70	70
71	71
72	72
73	73
74	74
75	75
76	76
77	77
78	78
79	79
80	80
81	81
82	82
83	83
84	84
85	85
86	86
87	87
88	88
89	89
90	90
91	91
92	92
93	93
94	94
95	95
96	96
97	97
98	98
99	99
100	100

そうして夜の10時も回った頃、私達は勝手口を出て外から網戸を見た。普段はつけない勝手口の明かりもつけておいたので虫達で満員御礼だ。

カエルもいるいる。30匹はいたかな。

カエルのえさ取りは瞬間的でさっぱりしている。狙った虫は慎重にそして。すばやく！アツと思ったたらもう羽虫はカエルのお腹の中だ。大したもんである。獲物が近寄るまで辛抱強くして待っている様子はまるで忍者だ。

トオルは言う。

「ほら、この段。カエルが密集しているだろう。大きいカエルが1匹。小さいのが3匹。多いよこりゃ」

「でも、羽虫の方がもっと多いでしょ、えさの奪い合いをしなくてもいいはずよ」

「違うんだな、これが。まあ、見ているよ」

私は見た。大きいカエルは瞳が横になっていて眠たげだ。小さいかわいいアマガエルは小指の先ぐらいだ。きつとカエルになって間もないのだろう。おたまじゃくし時代のしっぽがなくなり、立派なカエルになつてはじめての遠征かもしれない。がんばれ、と思ったと、突然大きなカエルが敏捷に動いて小さいカエルを食べてしまったのだ！

「きゃー！カエルがカエルを食べた！大きなカエルが小さなカエルを・・・！」

「しっ、大きな声を出すな」

「・・・共食い？」

「そうだ。邪魔者は食っちゃまう。カエルは雑食性だからな、なんでも食いつくよ」

「でも、小さいカエルを・・・」

そう言っている間にその大きなカエルはまた小さなカエルを狙って食いつこうとした。今度は不成功だった。あわや、というところ

で小さなカエルが段々から下りたのだ。小さな水滴が夜目にも点々と落ちたのが見えた。カエルのおしっこだ。仲間に食べられそうになって、怖かったのだろう、きっと。

「わかっただろう、弱肉強食の世界だから。羽虫もカエルも同じだ。カエルばかり寄せ集めない方がいいよ」

「うん・・・」

私はそれでも大きなカエルが許せなくて、トオルに追っ払ってもらう。さわりたくもなかった。

トオルは大きなカエルに言い聞かせる。

「よしよし、お前。この女王様に嫌われたから、国外退去だ。別のところでたくましくえさを取って生きていけよ！」

## 第28話・沈黙の村

この田舎に住んでいるとする。

夜になる

何かの拍子に大声を出す

怒られる。

「モエ、君は地声が大きいよ。もっと小さな声が出せないか」

トオルが言う。この頃いつもだ。

「悪かったね！」

私は憤然として言い返す。何よ、声ぐらい誰に迷惑かけるというの？家なんか点在してるだけの田舎じゃん。隣の家にだって100mは離れている。これぐらい聞こえないよ！と何度かこのやりとりはした。

でも、今夜も寝ようとしたら私の寢床に大きなカナブンがいつのまにか入り込んでいるのだ！

ギャーーーーーッ！！！！

大声を思い切り出した。私はまたまたトオルに怒られる。

「虫イ、虫イー！」

早く取ってちょうだい！とばかりに叫んだ私、トオルは無然とした様子でも言う通りにしてくれた。

「モエ、君ねえ、山の中で暮らしているのだから虫ぐらい慣れたらどうだい？毎回毎回叫びたててさあ、しかも大声で！」

「だって怖いもん、虫、嫌いだもん！」

「大声を出すなってば！人に聞こえるじゃないか！」

「まわりに家ないじゃんか、大げさ！」

ケンカになっちゃった。

そういわれてみれば、先日の登山のときも「やつほー」と叫んだだけで怒られた。

「ふもとまで聞こえるような声を出すな」

庭の花火で「キヤー、キレイ」というのもダメだった。楽しくてキヤーキヤー言っていたら「ご近所に丸聞こえや！」とトオルにどなられた。

その時は義母までが唇に手をあて「しっ！」と言ったから私はすごくむくれたつけ。

実家では声が大きいか言われたことがないので私は驚くだけだ。そうそう昨日も遠くでトオルを見かけて「トオルーっ」と声をかけただけで、にらまれたつけ。

私はむらむらと怒りが湧き、腹が立ってきた。

「モエ、そう怒るなつて。ここは村全体がそうなんだよ。大きな声で話す人っていないだろう。変に大声を出すと何があったのかと思われてしまうさ」

確かにここは過疎の村で小さな子供もあまり見かけない。

静かな村・・大声はタブーなのか。静かな静かな過疎の村・・。

「大声を出す人間は人が笑うよ」

「人が笑うよ」このセリフは母屋の義母がよく言う。目立たず、でしゃばらず、が美德なのだ。本当に目立つことはタブーらしい。

「田舎だからね。目立つことはしない方がいい」

義母もトオルもどうしてだめなのか納得いく理由を言わない。私は要領を得ないままだ。

・・・こうして私も「村の静音システム」に自動的に組み込まれていくのであった・・・・・？

## 第29話・屋号

この村にも「婦人会」というものがある。私も会員になった。といつてもまだ会員なりたてだし、何をやらされるのかよくはわからない。ただ内心、面倒だなというのが本音だ。

ところで初めて知ったのだが、我が家にも屋号と言うものがあった。

「上の草山」

かみのくさやま、と読む。となりが「下の草山」、しものくさやま、田んぼ2つ隔てた前の家が「前草山」その奥が「数珠」だ。聞けば同じような名字が多いので婦人会のような会合では自然屋号で呼ばれることが多いそうだ。

なるほどフルネームで言い合うよりは、便利なものかもしれない。こちらは新居なので私は上の草山の「若」奥さん、となる。義母が上の草山の奥さんだ。義母はもう婦人科を退会してかわりにというか老人会に入っただので私はちょうど入れ替わりに新入りとして入ったことになる。

婦人会の会員としての最初の仕事は国道沿いにある花壇の草むしりだった。花いっぱい運動とやらで苗を植えたり花の世話や国道のゴミ拾いなどの奉仕活動をするらしい。そして秋まつりなどにはおもちについてあんこ入りのおもちやよもぎもちを丸めて販売するらしい。年によつてはうどんを販売もするらしい。なんて「婦人会」らしい活動なんだろう！

この草むしりだが、農家の人たちは慣れた様子で鎌を上手に使って、さくさくと雑草を刈って行く。私のようなへたくそは、軍手をはめた手で1本ずつ草をむしっていく。間違えて綺麗な花がついたのを根っこごとひっこ抜いてしまったりする。

私はちょうど同じ年頃の人があまりいなくて少々がっかりした。20代はほんと少ないらしい。義母に離すと「ああ、ああいう年頃

の子はちょうど妊娠しているか乳飲み子がいて家から出られんけんの」と言っただ。

「そうかあー」といったら義母はにこにこして「あんたも早う妊娠せんといけんのおー」と言っけてプレッシャーをかけられた。



### 第30話・モノ売り

このあたりにはコンビニもスーパーもない。そのせいか時々ここからワゴン車が何かを売りに来る。

定期的に来るのはパン屋さん、不定期には魚屋さん、焼き芋屋さん、わらび餅屋さんなど。特に魚屋さんは海に近い鳥取県からくるらしい。

トオルはどちらかというと肉よりも魚が好きなので、職場に魚屋さんがくると必ず自分の食べたい魚を買ってくる。夕食の支度をちゃんとしているのに、いきなりバ力でかいバイ貝や、あさり、ほたて貝、あじのでかいの、まぐろの切れ端などを「大量に」買ってくる。

「はい、今晚のおかずだよ！新鮮なうちに早く食べよう」とかいいうれしいが夕食準備の段取りが狂う。まあ、いいか。これらはトオルの小遣いで買ってくるから、家計も助かるし。

ところでネーブル屋さんが来た話をする。ある日、チャイムが鳴ったので、玄関にでたら中学生かな、と思うような童顔の顔の男の子がいた。出てきた私の顔を見てにつこり笑う。

「涙がでるほどおいしいーいネーブルを売っています。お1ついかがですか？」

かなりのイケメン、かわいい！私は「安いなら買う」とうけあうと、ワゴン車が新居の車庫までやってきた。

運転していたおじさんがニコニコ顔で後ろのドアを開ける。ネーブルが箱ごとたくさん積まれている。

「1箱丸ごと買ってくれたら安くするよ」

冗談じゃない、2人しかいないのに、ネーブル丸ごと1箱もいるもんか。私は首をふる。

「母屋の分とあわせて10個もあれば十分だわ」

とたんにおじさんは仏頂面になった。そして値段を早口で言う。

やだなあ、しかも、高い！

「えっ、こんなにするの？」

「ネーブルの産地からはるばるやってきたからガソリン代も入っているんじゃない！」

さっきの若い男の子はさっさとワゴン車の助手席に座っている。

ああ、あの子は客寄せパンダだったんだ。そうだ、ネーブル屋さんにしてはすごいイケメンだもん。

私はやられた、と思いつつ割高のネーブルを買った。ネーブルは確かに甘かったが、どこことなく買った時の悪い印象を一口食べるごとに思い出してしまう。

だから買った10個のうち9個は母屋にあげてしまった。

「もう絶対に行商のネーブルなんか買わない。もっと食べたかったら母屋にまだあるから食べに行つてね」

トオルはただ笑っていた。

「モエ、このあたりは宗教の勧誘も多いから気をつけな」

「新興宗教ならもう来たよ」

いわゆる新興宗教には興味がない。もちろん門前払いといきたいが、もし村人の関係者だとあととの交遊関係に響くらしいので、やんわりとお断りしないといけない。それを知ってか、彼らは「あ、そうですか」と簡単には引き下がってくれない。結構、難しいのだ。ハア・・・。

### 第31話・野菜とお米

トオルの仕事は村立の温泉のおっちゃんである。国民宿舎の風呂掃除や入場料を取ったりする。イラストだけでは食べていけないので、働くのは当然だ。

その上この新居のために建てたローンもたくさんある。私もイラストの仕事を在宅ではいるけれど、売れっ子というわけでもない。ここにきて明らかに仕事が減って悲しい。けど、仕方がない。

自作のイラスト集をかかえて会社巡りをして売り込んで注文を取るわけにはいかないからだ。ここには広告社、出版社、ミニコミ誌がないから。

母屋の義父、義母は専業農家なのでお米、野菜は無料でいただいている。したがって食費は浮いている。経済的には大変助かっている。

今は夏なのでキュウリ、なすび、とうもろこし、じゃがいも、たまねぎなどがもらえる。きぬさや、うり、おかのり、しいたけ、ずいき、小豆に大豆。本当に困らない。梅も取れる。みょうがも、もう少ししたら取れるといっていた。秋には栗や柿、なめこも取れる。ないのはレタスクらいだ。寒い地方なので、レタスの葉がうまく巻けなくて、くさってしまうらしい。

寒くなれば白菜や大根が売れるほど取れるらしい。漬物にするくらいあるし、助かる。助かりすぎる。

買うのはお豆腐、肉類、果物。昔は豆腐やこんにやくも炭まで作っていたというから、自給自足でOKだったのだ。（ちなみに母屋では水道ではなく、井戸水をくみ上げて使っている。水道料金無料、くみ上げに使う電気代だけ払う）

「助かりすぎる」といったのはひとえに、義父、義母の厚意である。特に義母。この人は嫁に来た時の母屋には大姑に、姑、行かず後家の小姑もいた。その上、嫁に行った家族が子供を引き連れて盆暮

れには帰省する。実家も大家族の農家であり、家計のやりくりなどは大変だったがよくわかって切りまわしていらしたようだ。

ただ今の季節一番よく採れるのがきゅうり。くれるのはうれしいのだけど、新居には私とトルしかないからせいぜい5本もあればいいのに、たくさんくれる。一度に20本強くれる。

買えばそれなりの値段はするから、うれしい。けど、いくらなんでも20本は多すぎる。くさすのもつたいないし。

この辺の人にあげようにも全員きゅうりを畑で作っている。あげられる人はいない。実家に送ってもいいが送料が高くつくし、近くのスーパーで安く買えるからいらないと。

きゅうりの料理のレパートリーを増やそうとがんばったが、すぐ（自分にとって）限界になった。それなのに、義母はきゅうりあげるよ、あげるよと持つてくる。私はまだある、と断った。

「どうしていらないう？くさるのが心配だったら、せつせと食べりゃあ、ええが。1日1人1食につき、1本たべりゃあええが。そしたら2人で1日6本、そしたら4日もすればなくなるじゃろ、きゅうりは栄養あるんでええええ」

「はあ・・・あ、ありがとうございます」

そうしてまた今朝、昨日もくれたなすびやきゅうりの存在を忘れて義母はきてまた言う。

「こないだあげたようりも、もつといいのが採れたから、食べてくれやあ。朝採りやけん、」

私はたまりかねてきっぱりと断った。すると黙って玄関の前に置いて行くようになった。今年は特にきゅうりが豊作らしい。

わたしはとうとうきゅうりを冷蔵庫にいれっぱなしにして、きゅうり水にしまった。なんと、きゅうりって冷蔵庫に入れすぎると、溶けて緑色の水になるのである！知らなかった。

なすびも冷蔵庫に入れっぱなしにするとしわしわになる。味も落ちる。

「どうして漬物にしない？もつたいない」

したよ！したけど、トオルが「まずい！お母さんが作ったものの方がいい！」と言ったんだ。くやしいけど漬物も義母が作った方が確かにおいしいし、義母だって自分の漬物が自慢だからせつせとくれるじゃんか！

結局、新居の冷蔵庫の中は八百屋さんができるほど野菜で満杯だ。私には野菜料理のレパートリーもそれほどないのでうれしいけど困るという。。。

「お義母さん、野菜はもういいよおおおおっ！！！」

・・・この話は怖くないですか？私はわがままですか・・・ごめんなさい。

### 第32話・家鳴り

家鳴り、やなりと読む。

古い木造の家にはよく鳴るといふ。木材が乾燥して割れる音らしい。亀裂が走る音らしい。私の実家がよく鳴った。

小さいときはこの音が怖かった。お化けや幽霊が鳴らす音だと思っていたのである。当時まだ生きていた私の祖母はよく言ったものだ。

「あれはタヌキが鳴らすんや。モエちゃんが、はよう寝んから、はよ寝ろ早く寝ろといつて鳴らすんや」

子供に早く寝てほしかったら、タヌキが怖い音なんか出さないはずである。だからこの話はおかしい。

しかし子供の頃の私はそれを信じていた。実際私の親も「早く寝ないと、タヌキが怒って、ぴしばしと家を鳴らすぞ」と言って寝かしつけたものだ。

それはまあいい。

問題は新しく建てたばかりのこの新居でも家鳴りがするのだ。

まだ新しいのに。しかも私が1人のときに限って。テレビが設置してある居間のある一角から、パチツという音が鳴る。

これが飛び上がるくらい大きな音に聞こえるときがある。

一体なぜ？

義父は言う。

「この辺は夜になると、キツネやタヌキがでるからなあ。きっとそれじゃ。もしかしたらサルかもしれんし」

キツネかタヌキかサル！

キツネとタヌキが農作物を食べにくるのはわかる。サルもたまに来るらしい。隣の山を越えてここまで遠征にくるのか。やっぱり田舎だなあ、と変に納得した。

しかし、どうして1人で入るときに鳴るのか？

・テレビのある一角から？

トオルは言う。

「実はテレビの置いてあるあたりはこの家の鬼門だ」

「こ、怖い！どうして怖がらすのよ！」

「お前が動物のしわざにしてはおかしいというからだ。動物じゃなかったら、人間か、元人間かのどちらかだろう」

「元人間・・・？」

「だから生きている人間なら、こないたずらはしない。そんなヒマなやつはこの村にはいない。すると、元人間つまり幽霊ってことさ！」

「怖い、ひどい、トオルのバカ！」

「バカとはなんだ、バカ」

「あんたが怖がらせるからよ」

とうとうケンカになってしまった。

ところが。

私が母屋に行って話しこんで夜遅くなったときだ。トオルが青い顔をして「お帰り」という。

「・・・どうかしたの？」

「いや、ぼく信じてなかったけど、本を読んでいたらテレビの方からタヌキ囃子が聞こえた」

でんでんでん、でこでん、でこりん、でんでんでん。

でこでんでこりん、でんでんでん・・・

テレビはサッカーの中継中だ。応援のエールにしては変だ。

トオルは最初、なんとという甘美な音だと聞き惚れていたという。

私が帰ってくる玄関の音で我にかえったらしい。

私達はこわごわと見慣れた居間に入った。テレビはサッカー中継のままだ。

「いきました！ゴールなるか、ゴールなるか！」

タヌキ囃子なんかとんでもない。テレビはそれ以外の音は鳴らなかった。

私達はテレビのボリウムをうんとあげてこの選手はどこへドラフトされとか、あしたの天気はどうとか、非常に無難な会話をした。

トオルが聞いたというタヌキ囃子は、その晩以降二度と聞こえなかった。

が・・、私はこの話を頭から否定するつもりはない。

家鳴り、タヌキ囃子、キツネ、幽霊・・人よりも自然が豊かすぎるこのあたりはなんでもありなのかも・・。



### 第33話・選挙

周銀の選挙の季節だ。同じ日に村会議員の選挙もある。

先週、尊重の選挙もあったが、これは現役の村長さんが無選挙で当選した。対抗馬がいなかったからである。居間の村長さんは人望あるので当面はこの人で大丈夫だろうということか。

さて、この村会議員。

この村では今回10人が議員になれる。今は市町村合併問題で揺れているがとにかく今回は10人。（合併になったら議員の数も変わる）現時点で村の人口は私を入れても1000人弱。有権者は900人。大体人気と言つか定評がある1人か2人に票がかたよる。だから最後の10番目に票を集めた10番目の村会議員さんは、最小だったの60票で当選できるそうだ！

たったの60票で議員！都会ではまず考えられないことだ。過疎の村なればこそ話だろう。

そして衆議院選挙。都会に住んでいるとうるさいくらい選挙カーがやってくるが、この変では静かだ。誰それに票を入れてやってくれ、とか後援会に入ってくれとか、行事につきあえとかはまったくない。

けっこう気楽なものかもしれない、というとトオルは首をふった。「いやあ、でも、田舎には田舎の選挙がある。しがらみというものがからみつくよ」

こういう話をしてくれた。

何年か前にある地区から2人立候補した。2人とも当落すれすれのラインだった。でも近所の人の票が集まれば当選できる。さあ、誰に入れるか、地区が2つに分かれてしまったという。

当時を振り返って義父も言う。

「それはもう古い話でトオルがこんまい頃の話じゃ。選挙日前日によ、夜中まで見張りがたつてのう」

「見張り？なんのために？」

「見張りは見張りじゃ。抜け駆けで内緒の話がきんように」

「・・・」

「ほれ、その四つ角のところに立つてのう」

義母も話に加わった。

「そうじゃ、あれはちよつとなあ、現金も飛び交っていたし、あれはやりすぎじゃった」

「現金・・・じゃ買収ですね」

「そうじゃ」

「母屋のトイレは外にあるじゃろ、こんまいトオルがトイレに行くときあそこに人が立つちよる、と怖がつてのう。最初わしらも泥棒かと思つたら違うんじゃ。近所の人があたりを見張っていたンじゃ」

「あたりを見張る？」

「近所の人が近所の人全体をな、お互いを監視して見張っていたんじゃ」

私にはいくら聞いても理解できない話だった。そんなに村会議員つていいものだろうか。

トオルは明快に答えてくれた。

「票も顔のうちだ。あの時はばくは小さかったけど、何かの利権がからんでいたのだろう。内緒話もできない頃だったそうだよ」

このあたりは人間関係が濃すぎるのだろうか。誰が誰に票を入れるとか事前にわかつていては選挙もおもしろくないだろう。しかも夜中の密談を心配するなんて・・・。

私は窓から見える山の光景を見た。

さきほど選挙の候補者の一人が我が家にやってきてトオルにあいさつをした。その場には私もいたのに、顔を向けず彼はトオルにだけ票をよろしく、といって帰って行った。その候補者は私は有権者じゃないと思っていたのか？

世帯主のトオルに挨拶しとけば私の票も取れると思ったのか、ならばそれは間違いだ。私はそのおじさんには票を入れないことにし

た。

トオルは「入れてやれよ。おやじと仲がいい人だし」といったが、ふん！と思った。

（著者注：合併前のお話です。現金が飛び交った話は大昔の話で時効です、念のため）

### 第34話・遠見

ここは大自然に囲まれた山の中である。

自然に親しんで暮らしている村人たちは心広くていい人ばかりである、というのは一応の建前。都会同様変わった人だっている。

人間である以上、いろいろな考え方もいろいろあつて時によっては争いも起こる。

「モエ、実家とはまた違うからね。郷に入れば郷に従えよ」

この意味が痛切にわかったのは、ずいぶんと後になってからだ。

先日私は近所からおすそわけをいただいたので、お返しにパンを焼いて持つて行った。新居から遠いけど歩いていける距離である。

ところが留守だった。でも玄関は開けっぱなしだ。不用心だとは思うが鍵をかけておく方が不用心という考え方もあるらしい。

すなわち、玄関が開いていると家人がすぐに帰宅するだろう。しかし、鍵がかかっていると遠出をシテイルに違いない。金目のモノがゆっくり物色できるぞ、泥棒ができるぞ！・・・という考え。

私はこの距離にもちゃんと鍵をかけて行ったけれども。

とにかくその家はお留守だったのだ。

それで帰ろうとしたら、その家の斜め前の人が窓越しに私をじつと見てた。会釈したら向こうも会釈を返したが、カーテン越しにこちらをうかがっているのを感じる。

私は背中を見せながら帰った。もう1軒の家もおなじように覗き見をしている。今は昼間だがこのあたりをパンを持ってつつかけで歩く女は珍しいのだろうか。確かに誰も歩いてはいないけれど。

帰ってからこの話を義母にしてみた。

「ここの村人は好奇心旺盛ではないの？私が何者が観察されてしまったなあ」

義母は首を振った。

「それはな、遠見をされたんじゃない、」

「遠見？」

遠見とは聞きなれないが、見慣れぬ客が来たらどういう人かそつと遠くで見守るという意味らしい。

なるほど俗に「田舎の人は閉鎖的、なかなか打ち解けない」と解釈される由縁だろうか。

いずれにしろ、私の身元もわかつているだろうに、じつと黙って見守らず「どうしたの？」そこは今留守だよん」と一言いえないのに。

義母は虫歯の痛みを抑えるために湿布薬をほつぺたに貼っている。この湿布薬は筋肉痛用だから見た目がすごくヘン。（時々こういうことをする人なのだ）

「こりゃ、結構歯の痛みにも、どえりゃあ、ええんでええ」  
「あ、そうですか・・・」

私はひそかにため息をついた。「遠見」は確かに変な習慣だ。遠見た人とは面識がある。なのでよけいに不思議だった。もっと仲良くなればまた変わるのだろうか。それはわからない。

### 第35話・ほうれん草

義父母は6月から10月ごろまでほうれん草を作って農協に出荷している。専用のビニルハウスは全部で4つ。規模は小さい方だが、結構小遣い程度にはなるといふ。

ほうれん草は朝の4時から5時ごろに摘み取られ、一定の重量になるように、小分けされてビニルにつつまれて出荷される。計量場所は母屋の納屋の中である。

ビニルには「恩原高原のほうれん草」のロゴが入り、こちらのシンボルである例のハチのイラストマークも印刷されている。ハチは愛想良く、ウインクしている。いつ見ても変なハチだ。（愛嬌はある。）このほうれん草はおいしいと思う。

当地は別にほうれん草の有名な特産地でもない。でも取れたてを湯がいて、醤油をつけて食べるとすごくおいしい。さつと煮るだけでも口の中であろけそう。

それは軽量ではめられた葉が小さい等の規格外のほうれん草は出荷されず私達家族で食べるものだ。

義父がくださるそれは、まだ泥がついている。保温のためのわらくずもついてくることもある。でもそんなの洗えば何でもない。わらくずや泥が少しでもついたまま出荷すると、購入者からクレームがつくらしい。農家も大変なのだ。丁寧に根元の泥をぬぐい、わらくずを取り、スケールにのせていく。大きい箱に詰められて小分けされたほうれん草が手際よくコンパクトに包装される。これらは村共同の保冷庫に置きにいて仲買人が来るのを待つ。ちゃんとシステム化されているのだ。

念入りに洗って、さつと湯がき、おひたしにしたり、卵とあえてサラダにしたり、リングと一緒にミキサーにかけるとおいしいドリンクにもなる。

こちらのほうれん草は気候が涼しいこともあり、とてもおいしい

と想ひ。

### 第36話・モノあげたい病

義母はとにかく気前がよろしい。けちんぼな姑にあたらなくてほんによかったと思う。

しかし・・・、しかしである。

ものにも限度があるし、人にモノをさしあげるのにも、ルールがあると思う。

私に野菜全般とお米をくださるのはうれしい。野菜は義父母の腕がいいこともあり、レタス以外なら（レタスは寒冷地のため葉がうまく巻かないらしい）大抵のものは作れる。しかも、このあたりでは珍しいゴーヤや、カラスウリ、クリカボチャなどちょっと変わったものも作ってくれるから飽きない。

スーパーにも売ってない（このへんでは流通していない）おかのりや、実食いえんどうまで作っている。売り物様でなく自分達で食べるためのものである。

おかのりは「<sup>おか</sup>陸で取れる海苔<sup>のり</sup>」、という意味らしい。これを油でいためると本当に「海苔」のにおいがする不思議な葉っぱである。海苔の海苔くささには負けるが海に遠いこの地では結構重用されていたのではないかしら。卵といためたものをタオルが好むのでお弁当によく入れてやる。

実食いえんどうは皮ごと食べられるえんどうまめ。なまって「みくいえんどまめ」という。みそ汁などの煮ものにすると柔らかくなつてこれもおいしい。もらいすぎて腐らすぐらいだ。もったいない。農協にでも売ればいいが、売るほどは作らないらしい。

さて、くれるのはうれしい。題名に「モノあげたい病」とつけたのはやっぱり度がすぎるから・・・。

ぜいたくな悩みだがくれすぎて困るのだ。

たとえば洋服。全然私の趣味でないブラウスをくれる。また嫁し



ゆうとめお揃いで着ましようよと、色違いの変なデザインのスカートもくれた……。

またエプロンが安かったと言つて5着一度にもらったこともある。私はエプロンをつけて料理はしないけど……。外で手伝いなどするときは必要かと思うが色違いで同デザインのエプロンなんか5着もいらない……。しかも変なキャラクターがポケットについている。

売れないとはいえイラストレーターのはしくれとしては絶対に着たくないデザインだ……。

いまどきの嫁が、姑とペアルックで歩いて誰が喜ぶのか？

化粧品も困る。訪問販売の化粧品を買わされてそれを私にくれる。今日もいただいた。品物は聞いたことのないメーカーの美容液。小さな瓶入りで5000円もしたそうだ。

義母は笑顔で「モエちゃんはまだまだ若いから。でも今からでも対策とつとかなないとすぐに老けてくるそうよ。それで買ってあげたの」

「ありがとうございます……」

私はひねくれものなんだろう……。か？一応は受け取るものの、あんまりうれしそうな顔をしないから、義母はちよつと不満らしい。義父に「一体あたし以外に、誰があんなに親切にしてくれるというの？」と愚痴つたらしい。

すぐに不満顔になつちゃう私も私だが、でもいらないものをもらつてもうれしくない。最近はやつとはつきり「いりません」と言えるようになった。

でないとどうも歯止めがきかないらしいのだ。お返しにパンか何かを焼いてもつていくとお礼にと何倍ものたくさん野菜をくれる。おかずもくれる。たくさん煮たから、おすそわけといって……。おかげでもらった野菜がなかなか減らない。

たまにおかずと作つて持つていくと別のおかずで倍の容量になつ

てかえつてくる。2人でも食べきれない。

一緒にダンスを習っている人から「あなたのお姑さんはやたらとモノくれるので有名」と教えてもらった。やっぱり。

嫁が来たので厚意の集中攻撃を受けているわけだ。でも嫁はあまりうれしそうに受け取ってくれない。義母にとってはかわいい子供に嫁が来たのはいいが、やさしい嫁と仲良く、というイメージは見事にくつがえされたわけだ。それを思うと申し訳ない。でもうれしいけど、困る。

「ありがためいわく」という言葉がしみじみと身に染みる。いや、いじめられるよりは何倍もマシなただけだ。

### 第37話・過疎っている

こちらは住民数1000人足らずの過疎の村である。

ちよつとメイン通り（といっても国道沿いのバス停のあたり）の農協と村役場にいつでもおじいちゃんおばあちゃんが目立つ。

若い人はあまり見かけない。見かけたらたいてい役場の人が森林組合の人。それが郵便局かダム工事関係者。これくらいである。

国道はスキーシーズン以外は渋滞なんかしない。すぐに誰が外に出て役場に行ったかわかるくらいだ。こういう村で暮らしていると日本は高齢社会だなあ、と思う。

若い人が少ない分、老人は元気である。重労働の田んぼや畑仕事を終えると今度は体育館でゲートボールやグラウンドゴルフでがんばる。

平日練習して休日は他の市町村の老人クラブに行って試合したりする。現に義父はグラウンドゴルフに夢中で個人優勝も団体優勝も経験している。ヒマな時には試合のスコアをスクラップしたものを時々見返したりしている。

さてメイン通りをちよつとあがれば国民宿舎がある。その隣が温泉場になる。過疎の村であり知られていないけどね。車で5分の人形峠を越えれば鳥取県で三朝温泉がある。そっちの方が知名度が圧倒的でみんなそっちへ行ってしまみたい。温泉街も小さいけどあるし、三徳山に投げ入れ<sup>みとくさん</sup>堂という国宝も近くにあるし。（こっちは国宝はありません・・・）

以前にも書いたが将来的に合併の話があるので賛否両論の講演会や討論会も頻繁に開かれている。先行き不透明な状態だ。

トオルも雇われているものの、合併されるとクビの可能性もある。農業をやれば良いというものの、普段からやっていないのに、食べたいのか？

お米も野菜もいざとなれば「なんとかなる」と思って母屋の義両

親に甘えている。

村がなくなつて他の市町村と一緒になると役場もなくなるという。小さいけれど診療所もあるのにどうなることやら。

心配はつきないが日常生活自体はゆつたりとのどかに時間が流れていく。

過疎の村であるがゆえに老人が元気だと思つたが、若い私達よりもずつと農作業で身体を鍛えているから重いコメ袋も持てるし、担げるし、わらも編める。古いこともよくご存じだ。昔猟をしていたから鉄砲を打てる人も多い。いろいろな話を教えてもらうのが楽しい。

万一のことがありライフラインが断たれてもここは大丈夫ではないか。完全な自給自足は無理でも自然にそつて生きている人が多いから。

今日はメイン通りの農協でトオルのお給料をおろした。顔はしつていられるけれど名前がうる覚えで分からない人があいさつしてくれた。そしてその名前のわからないままに世間話に応じる私。

自分が相手を知らなくても相手が自分のことをよく知っていらいしやることが多い。多分村の新入りというのが少ないので嫁入りに着た人つてある意味注目されていたのではないかしら。まあ次のお嫁さんかもしくは新しい家族がくるまでのことだろうけれど。

### 第38話・じっちゃん、ばっちゃん

こちらでは自分の子供は都会に出て残されたのは老人ばかりという家庭が多い。過疎と言われるところはどこでもそうだろうと思う。国道が村を分断しているせいかいわゆる限界集落とまではなっていないが。

老人でも身体が動く人は本当に元気だ。過酷な雪と寒さに長年慣れている人は身体も頑強なのだろう。

老人も多いが若い人がいる家庭は2世帯住宅にもなる。我が家もそのうちの1軒になるらしい。敷地内別居というか敷地内同居というか結婚時に小さな新居を建ててもらったから。

スープの冷めない距離がいいというのが我が家の場合はスープの煮えたぎる距離だ。こういう場合本当に円満な家庭であるのかな？と思うこともある。

たとえば私の場合。

しょっちゅう義母が何かの野菜をもってきて「モエちゃん」とくるし電話もかかるし（隣に住んでいるのに）おやつのお誘いも。要するに過干渉に感じてイラストを描くのに邪魔に感じるのだ。厚意は本当にありがたいのだけど……。しかも一人静かに絵を描きたいときに干渉してくる。

義母は大家族で育ち暮らしていたのでそのあたりがどうしても理解しづらいらしい。

「いつも1人じゃさびしかる」とかタオルが宿直のときは「一緒に寝てやろうつか」と言われたこともある。

私自身は核家族で育ち大勢の人にもまれて暮らしたことはない。だから義母の干渉にめんくらったし余計な御世話だと怒りに燃えたこともある。ただ悪気がないのが救いでケンカにいったことはない。

義母とお茶を飲んでいると村のしきたりの話になることが多いが

嫁姑の問題はどこでもあるらしく、どこそこの家はうまくいつている、いつていないの話も聞く。

実際義母の友人の一人はお嫁さんと仲がすごく悪くて完全な同居なのに孫を抱かせてもらえないそうだ。

私はそれはきつと姑さんの方がお嫁さんの妊娠中に何か嫌なことや傷つくことをしたのではないかと思うが、義母は友人としての立場でひどい嫁だと言う。

「・・・あの人もどえらくかわいそうだで。お嫁さんはあんなにやさしげでおとなしそうなのにの」

私はその人とはまだ面識がないので感想は言えない。あいつちもうたない。

「ところで、モエちゃんは私に孫を抱かせてくれるけんね？」

義母は真顔だ。「もちろんですよ」と私は笑顔で応じた。義母はこれを聞いたかったらしい。満足気な顔でちゅつとお茶をすすった。

1つ屋根で他人同士が義理とはいえ親子を名乗り暮らしている。

確かに毎日顔をあわせるのにケンカしていたら気分もよくないだろう。私はイラストの仕事に熱中したら本当に声をかけてほしくない。

この点、義母に対しては好きでも嫌いでもないが1つ屋根ではなく、別棟に新居を建ててもらったことにすごく感謝している。

### 第39話・田んぼの仕事

七夕は7月7日だがこちらでは8月7日だ。

以下季節の行事は基本旧暦に従っているとか。ひなまつりも子供の日もそうらしい。私にとっては1カ月遅れの七夕飾りは奇妙な気がする。

義父は行事を大事に知る人だから裏の山から七夕用の笹をとって軒下に飾っている。これに私が色紙で飾りをつけた。我ながら目にも涼しげで見違えるような七夕飾りになった。私にも少しは長所があると思う。こういうことは大好きだし。義母は喜んでくださった。「まあモエちゃん飾ってくれると笹の葉もきれいに見える。ほんに今年はいい嫁御がきてよかったのう」

おりしも天気よく、天の川が新居の上一杯に広がっている。降るような星空は大自然の偉大さを教えてくれる。

このころにはもう稲にも白い小さな花が咲き、穂ができて垂れ下がってくる。収穫は9月の初めごろになるようだ。

母屋の両親は水を抜いた田んぼに分け入って稲の間にできる、ひえを刈っている。いつのまにかひえが出てくるので刈らないといけないそうだ。

ひえをそのままにしておく、稲より背が高くなって倒れてくる。まわりの稲ごと押しつぶしてしまうそうだ。

私は田畑の仕事はしないが、2階の窓からは、母屋の両親が働いているのがよく見える。農業は本当に大変な重労働だ。

私のがのんきに本を読んだりイラストを描いたりしていることに気ががめてきた。これを読む人からも「ちょっとは手伝えば？」と言われそうだ。

労働力をあてにされたくないがゆえに手伝いはしないと公言して嫁いだし、虫が大嫌いでは農家の嫁は務まらない。

義母は昔のことを思えば、ずいぶんと楽になったという。でも機

械を使うといつても身体も使うことには変わりはない。

農家はえらいと思う。泥だらけになつて帰つてきたら、外にあるトイレ（長靴をはいたまま入れるようになっていゝる。もちろん汲み取り式で、自分達の糞便も肥料に使う人もいまだにゐるし、母屋だつてそうだ）に入つて用をたし、外から入れるシャワーを浴びる。

母屋は昔の家だから、トイレもお風呂も外にある。畑仕事を終えたら、泥だらけになるからそういったものは家の外側にあるのだ。理由がわかれば田舎くさい、というのが合理的だなゝに変わる。

私が手伝えるのはせいぜい食事の支度である。でも私の味付けでは義父は物足りないらしく私の目の前で醤油をたしたり、塩をふられる。がつくり。

ああ、稲の穂。

ほうれん草のビニールハウスを横切り、田んぼの真ん中に出ると稲の穂が海の波のごとく揺らいている。緑のさざなみが360度の視界いっぱいに広がる。

その上をツバメたちが旋回している。さらに上空にはとんびがいる。低いところでは、キセイレイ、白セキレイたちがゐる。

きれいな空気。

先祖伝来のお墓も視界に入る。これぞ田舎の風景。

この田んぼから多くのカエルや虫が生まれ、それを狙つてカラスやツバメがやつてくる。長い蛇もやつてくる。

ここには数多くの生命が育まれているのだ。朝の空気のおいしさは山の森林のにおいと同じだ。毎朝深呼吸しているうちに健康的になるような気がする。

仕事に一区切りつけた義父がやつてきた。

「9月になると収穫やけん」

「稲つて成長が早いですね」

義父は稲の穂を2粒ほど手にとり、私の目の前でぶち、とつぶした。白い汁がにじみでる。義父はうれしそうに微笑んだ。

「この白い汁が堅い米粒になるんじゃ」



お米の汁。そうか、この白いお汁が堅いコメになる。一体この田んぼ一面、何億という米粒が取れるのだろう。母屋と私達、義父の弟達の分、それと農協に売る分。これで暮らしているのだ。

私は義父の顔をそつと見た。シワの中まで黒く日焼けした彼の顔は汗まみれだ。義父は私と目があうとにつこりと笑った。私はその笑顔を美しいと思った。

自分のちやちなイラストが一体何になるだろう。

自然が描く絵こそ最高のもの。自然に親しんで収穫を取り入れる農業がこんなに尊い職業であるとは思わなかった。願わくは私の絵もこういう人たちにも称賛される心豊かになれる作品を造りたいものです。

しかし農作業は大変だ。私は働き者の両親を尊敬している。

## 第40話・ぶと

このあたりでは「ぶよ」のことを「ぶと」という。あの大きいサ  
イズの蚊のことだ。

昨日ちよつと散歩しただけで、これにかまれてしまった。右足の  
かかとのすぐ上、3ヶ所も。

はじめはかゆくいい、でもこんなもんかな？と軽く考えていた。と  
ころが右足がだんだん腫れあがってくる。

「お前藪の中を近付いただろう」

トオルが言った。

「うん、近所のおばあさんと少し立ち話をした。その時にさされた  
みたい」

私はかゆくて痛くて、気が狂いそうだ。次の日も腫れはひかない  
かかと近くに刺されたのに、右足のひざから下が全部腫れてしまっ  
た。おまけに熱も出た。

「モエは免疫がないから。ぼくなんか刺されても、そんなに腫れな  
いよ」

ひどい目にあってしまった。山に近いものだから蚊も多いが、ぶ  
ともすぐ多いのだ。おまけにそれを上回る「こだま」という虫も  
いる。蠅のお化けのような虫だ。これはかまれると血を吸われてし  
まう。

畑の近くでちよつと立ち止まっても、かまれるのは私だけだ。村  
の人は畑にいるときは、暑いときでも長袖だし、腰に蚊取り線香を  
つけて畑仕事をする。蚊取り線香はごく普通ので持ち歩きできるよ  
うな容器にひもを通して、肌身離さず作業するのだ。

熱が下らない。私は虫によってこられやすい体質かもしれない  
が、これはひどすぎる。

「アレルギーかもしれない。このあたりはハチも多い。スズメバチ  
にやられたら死ぬかもしれないけん、気イつけにやならん」

スズメバチ！

確かにこのあたりにはハチもいる。黄色と黒の縞のハチはミツバチだが村のキラクターだ。しかしハチも苦手。スズメバチも確かに刺されたら死ぬかも……。困る。

ハチの巣を見つけたら私は逃げる。が、義父は大喜びで巣をとってくる。そして中の虫ごと料理して食べてしまう。

「はちみつもいいが、ハチノコもそりゃあ、おいしいんで」

義母が満足そうに焼けたハチノコを持ってきたときは失神しそうになった。白いハチノコはよく見なくとも、ウジそっくり。

おまけに黄色と黒の成虫も混ざっている。私は半泣きでおいしそうに食べる母屋の人を呆然と見つめるだけだった。

義父は笑う。

「モエさんはな、都会のコじゃけん、食べられんか。まあ、刺されやすいのは確かだからとにかく虫には気をつけんさい」

「はい……」

でも気をつけていても勝手によってくるのは虫の方である。一体どうしたらいいのだろうか。

私は痛さと痒さと膨れ上がったハダシの脚を抱えて途方にくれている。

## 第41話・お盆

お盆になった。心なしか村の人口が少し増えたようだ。あちこちから家を出た家族が帰ってきたり、墓参りをするせだろ。見慣れない車を見るとたいてい他県ナンバーだ。

義母が言った。

「迎え団子をつくらにや」

迎え団子、何それ？

迎え団子とは、8月13日の早い時間に仏さんに供える団子のことだ。もち米を粉にしたもち粉が原料だ。私は作り方を教えてもらった。

もち粉を水に溶かして団子にする。手より少し小さめにまとめる。沸騰させた湯に入れ、浮き上がったら皿にとる。それにきなこ砂糖と塩を3：3：1位にまぜたものをからめる。それだけでできあがり。

それをまず神棚に供えて、それから下げたものをいただく。まあまあおいしい。（好きな人もいる）わらびもちのねっとりしたものと思ってくれたらいい。時間をおくことに堅くなっていくので柔らかいうちに食べてしまうこと。お供えしたらすぐに下げて熱いお茶と一緒にいただく。

それからお墓参りをする。

実家ではお盆は1日お参りするだけだ。お盆と言ってもお墓参りせず遊びに行くだけの人もいる。お盆には靈魂は各自で自分の家に帰っているはずだから、お墓に参っても無駄という考え方もある。

しかしトオルの家ではお盆の間、13日から15日は3日間毎日お墓参りをする。お菓子やお酒は供えない。水と「さかきの葉」、そして「みずのみ」をお供えする。

「みずのみ」とは？

これもトオルの家の習慣らしい。変わっている。「みずのみ」は

お米1合になずび1本、「ささげ」という長いさやえんどうをみじん切りにしてももの。それをお皿に入れず、じかに墓石の上に置く。お盆の期間はこれを毎日する。

私の実家ではお墓参りは午前中にするものだったが、こちらでは夕方である。農村は朝が一番忙しいからという理由もあるのだろうと思う。

私は母屋の両親とトオルとお盆休みでこちらに帰ってきたトオルの弟ジロウさんと一緒にお墓参りをした。お墓は古いくずれかけたモノから新しいモノまでいろいろある。土葬のものも多いので、くずれかけのお墓から中身が見えそうで怖い。しかも夕暮れである。夜なら絶対に行けない。

卒塔婆が傾いた様子は妖怪が出てきそうでまるでゲゲゲの鬼太郎の世界である。

そして15日の夜。

夕食もすませ、9時過ぎに母屋で再び団子を作る。今度は「送り団子」である。作り方は迎え団子と全く同じ。したがって味も同じ。1つ食べたなら結構お腹がふくれる。夕食後なので食べるのがつらかったりする。

食べたならこれでご先祖様を送りだしたことになる。盆提灯を片づけながら義母が言った。

「新しい嫁御を見れてご先祖様もさぞかし満足されたことじゃろう。ほんによかったことや」

次の朝には新居の前にも赤とんぼがいっぱい飛んでいた。もう秋の気配がする。こちらでは「盆とんぼ」というそつだ。

## 第42話・なまり

ようやくこちらの言葉にも慣れてきたころだろうか。最初は語尾がわからなかった。

はじめてこちらの言葉を耳にしたころは「くけん」「じゃあー」などの語尾は聞き慣れていないと聞き苦しいというか乱暴に思った。でもあちらでもわたしの実家周りの方言を「？」と思っただろうか。らお互い様かもしれない。

「じゃけん」とか「じゃ」という言葉は年寄りしか使わないのではないかと思っていたが、小さな子供も使っている。捨てることを「なげる」、舐めることを「むしゃぶる、ねぶる」など。

聞き慣れない言葉もまだ結構ある。それでもずいぶんと慣れた。村の中でも集落によつては微妙に言葉遣いが変わるそうである。

トオルにはわからないが、義父の年代では「この人はあの集落の人」とわかるそうである。

同じ日本でも方言はあるが、この一寒村の中でも微妙に違うとは思議だ。いいや、方言が不思議なのではなく、人間が不思議なのだろう。人間自身1人1人個性が違って当たり前だし。

「モエちゃん、今日農協へ行ったじゃろ。でも目立つことをあんまりしたらだめじゃけん、」

ある日、義母がお茶をすすりながらこう言う。

「どうして私が農協に行ったことを知っているのですか」

農協へ行くのにいちいち誰にも言ったりしない。聞けば農協で私を見かけた人が家に帰る途中、山仕事に出ていた義父に「嫁さんに会った」と言ったそうだ。義母は言う。

「あんた、農協に行くのに、高いっつけかけを履いていったじゃろ。さすが都会の人じゃけんって言われたそうだ」

「あれはっつけかけではなく、ミュールというんです！」

農協に何人かの人とあったが言葉はかわさず会釈だけだった。で

も私の恰好はばっちり見られていたわけだ。かかとの高いミュールは珍しかったのだろうか。

その夜帰宅したトオルからも言われた。

「ぼくも今日嫁さんが農協に行くのを見かけたよって。お前貯金でも引き出しにいったのか、給料日まだなのにな」

んまあ、よく知っているね。私は言葉もない。もし私が悪いことをしたらあつという間に村中に広がるだろう。

「モエ、まあ話題にされるのは、次の若いお嫁さんがくるまでだよ。注目されるうちが、また話題になるうちが花だと思えばいいじゃないか」

「わかりましたよけん」

「違う！わかりましたけんじゃ」

「・・・もう私は何も言わない」

### 第43話・河童

義父とトオルの晩酌のよもやま話を1つ。

トオルのご先祖様から伝わった話がある。

ある晩、ご先祖様が戸締りをしていたら、1人の坊主がやってきて「今夜泊めてくれ」という。快く泊めてあげて、話しをしていたらその坊主が言う。

「実はわしは河童と話ができるんじや。泊めてくれたお礼に河童から伝わった薬を教えてやろう」

河童の薬である。

「きりんじ」という漢方薬の乾したものが蔵に残っている。

これを材料に例の法印になったトオルのひいひいじいさんが処方してやった。打ち身、切り傷などに効いたそうである。昔は薬はあまりなかったので、こういった情報は大変に貴重なものであったと思う。

「ところで、きりんじって聞いたことがないけど、何のことですか？」

「しらん」

義父は本当に知らないようだった。だけどこうも言った。

「きりんじは中国という国からやってきたらしい。河童から聞いたという先祖さまも、後に法印になったじいさんが素人には作り方は決して教えなかった。ただ薬を粉にする道具や書きつけが蔵のどこかにしまっているけん」

私は河童って本当にいるのだろうか、と思って河童のイラストを描いてみた。緑色の肌に緑の髪、頭の上に河童の皿。そこには満々と水がたたえられている。河童はこの水がなくなると死んでしまうのだ。

「この村にも河童がいたといわれる沼がある。でも今はもう土地整備でなくなってしまった」



・・ふうん・・。

「隣町にはハイキングコースや、ゴルフ場の整備をするときは除草剤をまいたりするからね。河童が夢枕にたつて、水が汚れた、なんとかしてくれといってきたこともあった」

・・・ふうん・・。

「ただの夢かもしれないけれど、考えてみればかわいそうな話だ。河童は子供を沼に引き込んで食べたりするというけれど、河童以外にも澄んだ川水でしか、生きられない魚や虫も多いから」

トオルは目を細めた。

「ぼくの小さい頃はあの川だつて、もつともつと深い緑色をしていた。そりゃきれいな川だつた」

「あの川のこと？今だつてきれいじゃないの。お義父さんもトオルも小さい頃はあの川で泳いだのでしょ」

「昔の話だ。今の子はおそこで遊ばない。危ないからな。村にはプールもあるし、今の子みんなプール教室で泳ぎを覚えるから」

義父はため息をついた。

「今の子はいわいそうじゃ。わしの頃は水遊びをしながら、魚を捕ったり虫をとらえたりもうなんでもできたから。危ないところも身をもつて知ることでもできた。それがわかつているのは多分むしろ最後の世代じゃろ。」

この村の空の色だつて昔はそんな色はしていなかった。もつともつと青く澄んでいたけん」

義父はさびしそうだつた。村が便利になつたのはいいけれど、その分何かを失つたのだらう。

河童はもうどこにもいないだらう。河童としゃべることができない坊主もない。昔いたはずの大勢の河童はどうしているのだらうか。みんな、死に絶えたのだらうか。

#### 第44話・因果応報

村の神社に伝わる昔話。

この村は元々幕府の直轄領で、時々お代官様が見回りにきた。

ある時どこから聞いたのか代官が「この神社は靈驗あらたかだ  
そうだが、ご神体を見せてみる」と言ってきた。その代官は好奇心  
旺盛な男だったのだろうか。

ここの神社は現在でもご神体は目にふれないようになってい  
る。また見たことのある人もいないという。だから当時の太夫<sup>たゆう</sup>さんはじ  
め、村人達も青くなって止めたという。それでも見せろ、といっ  
てきかない。

相手は代官。怒らずと後々ひどいめにあわせられるかもしれない。  
村人たちはとうとう折れた。自分達は決して見ないようにして、代  
官に見せたという。

代官もこんな小さな村の神社だから、たいしたものはあるまい、  
とたかをくくっていた。ちらと見るだけで満足したという。

が、その直後から代官は熱を出して身体が動かなくなった。どん  
なに手をつくしても、熱は下がらない。

「これはきつと神社の祟りだろう」

誰が見てもそうだった。強がりをつけていた代官も、ご神体に向  
かい、わたしが悪うございましたと詫びを入れた。

するとその場でずっと熱が下がって元通りに元気になったという。  
「やはりご神体を見てしまったばちが当たったけん」

さて、何年か前に神社の改築があった。改築するのに、ご神体を  
移さないとい事ができない。母屋の義父も村人たちと一緒にご神体  
の移動を手伝いにいった。

みんなご神体をみてはいけないという話を信じているので、ご神  
体が入っている箱をもって、中身を見ようとしたららしい。

「好奇心はあっても、何がおこるか恐ろしい。中身を誰もあけてみようというものも、おらなんだわ」

私も理屈にはあわないかもしれないが、その話を信じる。

小さな村にも神様はちゃんとおわすのだ。

ご神体は木だとも、何かの岩だともいわれている。神社の太夫さんでさえも、その中身は知らないという。

#### 第44話・因果応報（後書き）

追記、この辺りでは神社の神官のことを「太夫さん」といいます。

## 第45話・消防隊

婦人消防隊に入会した。親睦会で消火器の使い方や、消火ポンプの作動方法、消火栓のありかなどの講習を受けた。

この村には1区から8区まで会ってここは第P区にあたる。この部隊は全部で15人ぐらい。私と同じ年ぐらいの人もいた。

消火器やポンプが置いてあるのは、川沿いの場所だと初めて知った。消火栓もゴミ置き場のすぐだった。毎日通っているのに全然気付かなかった。

扱いがめんどくさい、というのが私の本音だが、それでもいざというときに使えないよりは使えた方が良いに決まっている。

大火事がどこかで起きると、消防隊は出勤する。婦人消防隊は後方支援、つまり炊き出しなどの係りだ。あまり出番はないようだ。でも義母が若い時、広範囲の山火事があったときは炊き出しをしたらしい。トオルは消防隊員（地区青年団＆消防団）でもあるので、年末でも順番に火の用心の拍子木をうつたりする。

わりと活動経験の多いトオルは言う。ぼくはあたりが悪いのか、当番のときに自殺者の搜索や検死の体験もした。目の前で他県ナンバーの車が横転して運転者が即死、警察が来るまで現場にいたこともあったそうだ。

「けっこう、ハードだよ。ここは県境だから何かの犯罪者が逃げってきたというつわさもあるし、国道沿いにあるから自殺志願者が遠方からやってきて、ここらあたりでいいかって村の山道に車を止めて首をつつたりするから」

殺人事件もおきたことがあるという。他の県からやってきた人たちが争って、という事件だったそうだ。なるほど一見平和そうな村にも事件は起こるのだ。

願わくは私は入隊している間は、大事件が起きないように願っています。

（著者注：合併とほぼ同時に婦人消防隊の方は消滅しました・・・）。

## 第46話・再び妊娠

何となく身体がだるい日が続いた。おまけに眠い。生理も遅れている。

もしや、と思って買い置いていた妊娠検査薬を取り出してみる。

結果は陽性。妊娠だ！

今度こそ流産しないように大事に育てたい。

私もトオルもうれしかった。産婦人科へ行つてきちんと確認してもらったうえで母屋の義両親、実家の両親に伝えた。

「今度こそは無事に生まれますように」

実家の母から安産祈願済みのプレスレットと安産守り、お婆からは赤い刺し子の安産人形、子宝の水が送られてきた。

わあわあいつて浮かれているうちに、風邪をひいてしまった。

夏風邪だ。一体この大事な時期になんてことだ。

熱まで出てきた。咳も止まらない。それでも我慢していたら咳のたびに胸がきゅーんと痛んできた。肺炎になるかもしれない。でも赤ちゃんのために薬はなるべく飲みたくないし、でもしんどい。

思い切つて病院にいったら妊娠しているのですたら薬は出せませんね、とうがい薬だけもらった・・・。

そうしているとトイレに行く回数が極端に増えた。少量のおしっこばかり出てくる。夜中なんか眠いのに、尿意で目が覚めてしまう。同時に吐き気もある。

つわりが始まったのだ。

まず匂いに敏感になった。トオルは煙草を吸わないが、職場で吸う人がいるらしく衣服に匂いをつけて帰ってくる。今まで気にならなかったのにとて不快感に感じる。

そしてご飯を炊くときのおい、みそ汁のおい、全部嫌いになった。

母屋に行くとたいてい何かを煮込んでいる。玄関先に立つだけで

煮込んだ野菜のにおいができてまた吐きそうになる。

食欲はゼロ。食べられるのはジュースとそうめんだけ。アイスクリームもなんとか。

これがつわりだ。つらけれど、子供を産むためならば耐えられる。そんな健気な私にトオルはちょっと冷たい。なぜなら、においのきつい食事を一切作られなくなったから。食事の途中でも、トイレに駆け込んで吐いてしまうから。

「だって考えてみてくれよ。仕事で疲れて帰ってきてさ、おいしい夕食をさあ食べようとする。その矢先にげーげーされてみるよ。嫌な気分になるよ」

トオルがこんなに冷たいことを言うとはおもわなかった。わたしはトオルにとてもがっかりした。夏風邪でせき込み、つわりで苦しむ私をいたわってくれたのは最初の数日だけだった。



## 第47話・微妙な関係

トオルが明日から夕食は母屋でとる、と言いだした。

「モエはつわりがひどくて、食事の支度をさせるのもかわいそうだし」

「かわいそうだって？うそ！私は吐いたりするたびに嫌な顔をしたくせに！」

「うーん、そうだっけ？ごめん。でも食べられない人を前に、ご飯を1人だけ食べるのってあんまりおいしくないんだよ」

「わかったわよ！夜は私1人で過ごす！新居で2人暮らしとはいってもあんたは母屋にもまだ自分のものを一杯置いたままにしているし、お義母さんが作るご飯の方が食べ慣れているし、おいしいもんね！」

トオルが母屋で食事をするときいて、もう吐きながら夕食の支度をしなくてもいいのだとうれしい半面、ちょっと嫌な気分になった。それだけでなくとも結婚早々のときは手放して私の料理をほめてくれたのに、この頃は母親のおかずの方がいらしく、味付けが薄いだの濃いだのいったあげく、お義母さんに教えてもらえとか言う。

私はトオルに嫌みを言った。

「ママのご飯がいいならば、これから永遠に母屋でご飯を食べるといいわ」

トオルは不機嫌になった。私も不機嫌だ。

「モエ、なんだその顔は。そんなにばくが母屋で食事をするのが気に入らないなら、ちゃんとした食事を作れ、ばくの目の前で食べえややるな！」

私の顔に涙が伝う。

「敷地内同居でしょうが！でも完全に独立してあんたの家がここだけだったら、母屋がこんなに近くでなかったとしたら、あんたは私の作った食事しか食べないでしょ。それなのに、なによ！」

母屋が近いというだけで、私をほったらかして親とにぎやかにご飯を食べたいなんて！」

「モエ、その言い草はなんだよ。ぼくが母屋に行つてご飯を食べるのが気に入らないなら、ちゃんとしたものを作ってくれ。もうそうめんや、できあいのお惣菜なんか食べたくないよ。つわりのせいかなんだか知らないが、やれ汗臭いだの、煙草臭いとか言うし、夜中は何度もトイレにたつからぼくは熟睡できないし。なんとかしろよ！」

「誰の子供を誰が産むとおもっているの？私は・・・」

トオルはふくれっ面をしたまま、母屋に行つてしまった。私はしばらく玄関先で泣いていた。涙が止まらない。

そりゃあ、確かに家事が手抜きだったのは認める。私が泣くのは、トオルの私に対する気遣いがまるで感じられないからだ。それに結婚以来、トオルとケンカしたのは初めてだったし。

夜遅くに母屋からトオルが帰ってきた。わたしはさっさとシャワーを浴び、パジャマ姿で寝自宅をしていた。トオルの顔なんか見たくもない。

トオルは私の寢床に座った。私は寝たふりで知らん顔。

トオルが私の髪を撫でた。母屋で食べたらしいイカの煮つけ、それにビールのおいがしたのでまた吐きそうになった。

「・・・ごめんな、モエ」

私はそのまま、こっくりとうなづいた。それからいきなり、がばつと起き上がり、トオルをつきつばして階下に下りる。

行き先はもちろん、トイレである・・・。げろーっ、げろげろげろ・・・ゴメンナサイ！

## 第48話・キセキレイ

母屋の敷地内に「かでや」がある。かでや、とは蔵のことをいう。その入口にキセキレイが巣を作った。かでやの前には、はしこや木切れがごっちゃにして置いてある。その陰でキセキレイがかわいいてまるい巣を作ったのだ。

「あれは人間にはなつかんけん、そつと気付かれないように見てこらんせえ。モエちゃんにはめずらしかるうが」

なるほど、はしこどドラム缶の合間に小さな隙間がある。そこに両手のひらにかくれるくらいの小さな巣があつた。巣全体は外からまったく見えない。が、丁寧に作られた温かそうな居心地のよさそうななかなかいい住まいだった。

「よくこんなところを見つけて巣を作ったのう。かわいいやつや、」一緒に覗きこんだ義父も感心している。彼も巣の存在に長いこと気付かず、ヒナのちゅぴちゅぴという鳴き声でわかつたという。

今は親鳥はいないらしい。小さな綿くずのような黄色いヒナが4羽見えた。ごそごそと巣の中を窮屈そうに動き回っている。なんてかわいいのだろう！

私はとてもうれしかった。本当になんてかわいいのだろう。ツバメが早く巣立ってしまい、少々さみしく思っていたところだったし。義父が私の肩を軽くたたいた。

「そろそろ親鳥が戻ってくるけん、どいたほうがよかるう。野生の鳥は用心深いけんの」

母屋と新居の間にその「かでや」があるから私は朝夕見る楽しみが1つ増えた。小鳥のヒナがこんなにかわいいとは知らなかった。ところが。

ある朝、はしこの前に鳥の巣が投げ出されたようにばらばらになっていた。嫌な予感がした。そつと覗いて見てみる。

きゃーーーーーっ！

巢の前に親鳥が足だけ見せて転がっているではないか。

ヒナは？ヒナは見えない。

なんてことだろう。

母屋に言つと義父母がすぐにとんできた。

「まあまあかわいそうに」

義母は涙ぐんで親鳥をそつと取り出した。親鳥には首がなかった。硬直した足が抵抗した様子でぴんと突つ張つたままだ。美しいイエローの羽があわれを誘う。

「かわいそうに、かわいそうに」

義父が言つた。

「ヒナが目当てだったのだろう。4羽ともいないしな」

「へビですか？」

「わからん、でも多分そうだろう。この辺は猫もいるがへビも多いから」

空っぽの巢は哀れだった。死骸は畑に埋めた。

「もうここらあたりは、人間のおいもついてしまったけん、次に巢をつくるやつはおらんだろう」

転がり落ちたヒナを巢に戻してやつただけで、野生の親鳥がヒナを嫌つてエサをやらなくなるそうだ。その上突き落として殺したりするそうだ。次に産卵に入るキセキレイはもういないだろう。

私はがっかりした。

親鳥も酷い死に方をしたものだ。せつかく4羽のかわいいヒナを産んで育てていたのに。弱肉強食の怖さを思う。

## 第49話・嫁探し

8月下旬にもなると、朝晩の冷え込みがもう出て来た。薄手の長袖のセーターを着るとちょうどいい。

稲穂も重たげに垂れ下がり、2週間後にはもう稲の借り入れを始めるという。

とんぼもそこらへんをわがもの顔に飛び回り、季節はもう秋である。台風の手前でもあるが、四方山に囲まれたこのあたりまで直撃することはめったにない。そのかわり雨が多くなる。

そんな中、母屋の遠縁にあたるというおばあさんが1人で新居に遊びにやってきた。本当は母屋にやってきたのだが、あいにくと何か農具を買ったと言った町に出て行ってしまった後だったのだ。

新居はまだ見たことがないそうで、案内してお茶を出す。おばあさんはほっぺの赤いかわいらしい人だ。聞けばもう85歳だという。耳は少々遠いがとても元気だ。村の国道を越えて、30分かかかる我が家まで1人でさっさと歩いてきたのだ。

「もえちゃん、いったかいな？こつちに嫁に来てどうやいな？」

「あ、はい。とてもいいところだと思います」

「そうじゃろう、そうじゃろう」

おばあさんは満足げにほほえむ。生粋の村生まれで育った人は義父も同様、村に誇りをもって生きておられる。

「トオルちゃんは、ええなあ。いい嫁っこをもらって。ヒトキちゃんも、ええなあ。若いもんにこんなに近くに住んでもらって、ええなあ、ええなあ、」

ちなみにヒトキちゃんというのは、義父の名前だ。そうか、ヒトキちゃんか。私は笑いをかみ殺してお茶をすすする。

「あの、お子さんは遠くにいらしているのですか」

「うん、わしには3人いてな。1人は東京、もう一人は市内にいる。めったに帰ってこん。後の一人はまだ結婚もせんと、この村でわし

と一緒に住んでおるんじゃ」

「ああ、独身でいらつしやるのですね」

「そうじゃ、もうすぐあれも60歳のう……ええ人があれば、ええとは思っているのじゃが、なかなか難しくてのう」

60歳の息子の嫁探し！

おばあさんは真剣な顔だった。いくつになっても息子がかわいいのだろう。

「あんなあ、あの子は3人の子供たちの中でも一番まじめな子なんじゃあ。誰でもええから、あの子と一緒になつてわしらと一緒に暮らして田んぼや畑をしてくれたらなあ。それやったら、離婚歴のある人でも子持ちの人でもなんでもええんやけど」

「はあ……」

「モエさんとやら、知り合いでええ人がおつたら、よろしく頼むけえ」

「……この村で同居で農家を継いでもらつて……というのは、それは難しいのでは？」

私はすっかり本音を言ってしまった。おばあさんの顔が曇った。

なんてことだろう、私ったら、いくら嫁のきてがあろうかなかるうが、初対面の年配の人に対していうセリフではない。

おばあさんは私に軽くうなづくと質問した。

「確かにここはほんまに田舎の村じゃけん、……あんたはトオルちゃんと結婚する時、悩みなさったか？」

「はあ、ちよつと考えました。でもトオルさんはいい人ですし、気が合うから」

「そうか、そうか。そんならええが」

おばあさんは微笑んだ。

「あの、ご縁があつたらきつといいお嫁さんに巡り合えますよ」

「ありがとう、ありがとう」

心中どう思われたかはわからないが、にこやかにお茶の礼をいつて帰られた。夜、母屋に行つて来客の話をする。

「あのおばあさんは、息子が心配なんじゃ。あちこちでええ人はおらんか、といって頼んでまわっちゃる」

「ふうん、その息子さんもいい人なのでしょう？」

「もちろんじゃ、まじめな働きもんじゃ。ただやっぱり農家で長男で・・、当たり前のように同居を持ちだされては、尻込みする人も多いけんのう」

私は母屋の義父母の顔を見た。

朝から晩まで彼らは田畑の仕事をしている。私はまったく手伝っていないし、手伝えとは一言も言われたことはない。はじめからあてにされるのが嫌だったので、農家の仕事を手伝わないこと、それと同居はできない、別に家を建てること、これを条件に嫁にきたからである。

義父母は何も言わなかった。嫁に来てくれさえすればもうそれで満足、なことを言われた。

気楽さという点では正解だったが、嫁としては気がとがめる点もある。農作物の収穫ぐらいいは手伝った方がいいのかもしれない。夜もふけたが、新居の北側の窓一面に広がる稲穂の海を思った。

それからあのおばあさんの息子さんにもよいご縁があることを祈った。85歳のおばあさんと60歳の息子と2人だけで田んぼを作っているそうだ。早くその中にお嫁さんが来ますように・・・。

## 第50話・お神輿

この田舎にも秋が来た。

トオルあてに1枚の葉書が来たことでわかった。葉書の内容は「おみこしかつぎ」の依頼だった。

「ここらあたりは、秋祭りの役割を太夫（神主さんのこと）が決めるのさ。今年はお神輿かつぎかあ」

「お神輿って重いでしょ？」

「重いよ、だから交替でかつぐ」

さて、この秋まつりは有名でもないので本当にこじんまりとしたお祭りだった。

実家の秋まつりでは大きな「だんじり」という神輿？が家々をまわっていた。あれはかつぐお神輿ではなく、全身の力をこめてひっぱりまわさないと動いてくれない。

上には人が乗り、迫力あるチンチン、ドンツクドン！といった迫力ある太鼓やドラがよかったなあ……。でもここはそういうタイプではないので私にとっては珍しかった。

わっしょい、わっしょいといって肩でかつぐタイプのお神輿はテレビで見たことはあるが実際に見るのは初めてだ。コースが決まっ  
ていて、神社から国道沿いにかつぎ、観音堂まで行くという。

「ちよつと変わっているだろう？神社が観音様に挨拶に行くんだ。年に1回だけ、この秋祭りにね」

「そういえばそうね。観音様と言えば仏教よね？どうしてだろう」

「ぼくもよくは知らない。昔ここには神社が2つあって、それを統合したのが今の神社っていうよ」

「どうして統合したの？過疎だから？」

「知らない。統合したのは大昔、江戸時代ぐらいだったらしいよ。そこに観音様のお堂があつてお移りいただいた、と」

「わかった、そのお礼まいりね」



「多分、そうだろう」

トオルは自身なさげだった。でも多分そういうことだろう。それではなければ神社のお神輿が観音様のところまで行くはずがない。観音堂までかついたら、今度は家々をまわる。回った家では、お酒が出るからこれも祭りでかつぐ男たちの楽しみだという。

「飲みすぎないでね」

「うん、飲みすぎると力が出なくなるからな。ぼくは根性もないから、お神輿もほどほどにかつぐよ。だって、その日1日だけかつぐだけで肩が腫れあがるし」

「肩？」

「お神輿に肩が当然当たるだろう、あれ、すごく痛いんだよ。普段慣れないことをするから余計に。あれでお酒が出なかったら、ぼくお神輿かつぎなんかしないよ」

「不信心者ゝ根性無し！」

秋まつりは幸い快晴だった。私はトオルがかついでいく様子を見守った。沿道にはあんまり人がいない。過疎だもん。お祭りにつきものの屋台も出ていない。過疎だもん。

神社には太夫1人を中心に、村の宮総代や神社目付たちが数人あがりこんでお酒を酌み交わしている。

お神輿を担ぐ人は交代要員も含めて8人ぐらい？皆で輪になってしゃがんで煙草を吸ったり、ビールを飲んだりなごやかな雰囲気だ。太夫の祝詞が終わるとお神輿かつぎが始まった。

急なお宮（神社）の階段を担ぎ手は掛け声をあげ、息をあわせて下りる。観音堂まで1キロぐらい。

わっしょい、わっしょい！

威勢のよい掛け声は神社の森に染み透るがごとく、解けていく。過疎の村の小さなお神輿。これも来年の豊穰を願う大切なお祭りだ。私は見物人もほとんどいない村のお祭りを見た。とても静かだよ。いいお祭りだった。

新居に戻ると母屋の義母が「今日はお祭りじゃけん」といつて栗の入ったお赤飯をくださった。それで終わりだった。

実家の近くの喧騒なにぎにぎしいお祭りも良いが、こういう静かでちゃんまりとした祭りも良い。

神社の神様だって、参詣した1人1人の顔も見覚えてくださるだろう。

## 第51話・お月見

早くも満月、お月見の日になった。

あいにくとちよつと曇つてはいるがまんまるいお月さまがかるうじて見える。

実家では月見の行事はあまりしなかった。せいぜい月見団子を仏壇にお供えするぐらいだ。それから秋の七草やススキを花屋さんで買う。

こちらではススキはたくさん生えている。好きなだけ取れる。よつてススキを花屋さんで購入して飾る人もいない。畑から取ってきて玄関に活ける人もいない。

月見団子は私は細長い白いおもちに、こしあんを帯のように巻いてあるものを供えるものだと思つていたがこちらでは違った。

トオルの家では月見団子は私から見たら・・・ただのおはぎだった・・・。ちょうど秋のお彼岸も近いし、ばたもちと兼用しているのだろうか。

実家で食べ慣れた細長い形の方が、上品に見えるし手でつまめるのでいくらかでもお腹に入る。ところが義母が作るおはぎときたら、とにかく大きいのだ。巨大すぎる・・・。

両手でかるうじて持てるだけの白いおもちに、ぐるりとつぶあんをまぶすのである。1個食べたらもうお腹いっぱい。

このおもちとはトオルの家の田んぼでとれたもち米から作ったもの。こしあんの原料の小豆だつてちゃんと山の中の畑で採れた自家製である。本物の健康かつ自然食品である。

しかしどうしてこんなに大きいのか？

私は1個をようやくの思いで食べて食傷した。おいしいことはおいしいのだが、とにかく大きすぎる。義母は味が気に入らないのかと私の顔を見て心配そうだ。

ようやく2個やつと食べると「もう1個ぐらいは入るじゃろ。ト

オルの分も新居に持って帰れ」と10個大皿に入れて持たせてくれた。

今晩はトオルは宿直だ。早く食べないとかちこちになってしまう。宿直室で同僚にも食べてもらったらいいし、今からそっちへ持って行こうかと電話した。ところがトオルの返事は以下の通りだった。

「いいか。ぼくはおはぎが好きじゃない。おふくろがトオルに、といって皿に持ってきても、もらってくるな。モエ、もらってきた分は全部お前が責任とって食べるんだぞ」

大皿のぼたもちから2個だけ取って残りを母屋に返しに行く。悪いけど、とても食べきれないので、と言う。がっかりしている義母に悪いと思いつつ、私は新居にもどった。

夜空を見上げると曇りが取れて輝く満月が現れている。

でもこのあたりは雨が多いのでまたすぐに隠れるかもしれない。

おはぎがのど元まで詰まっている感覚がする。食べすぎだ。お腹ももったりとして身体が重い。

お月さまは実家で見たと同じように、この田舎でも月の中でうさぎがお餅をついているように見えた。

## 第52話・秋の寒さ

段々と朝晩の冷え込みがきつくなってきた。廊下を素足で歩けない。ここはスキー場のある寒冷地。相応の準備が必要だ。

私は厚手のソックスを履いて長袖のセーターを着る。タオルは慣れているのか、まだまだ足は裸足で半そでTシャツでOK。

トオルは好きにしてよいだろう。問題は寒がりの私。もとの冷え症に加え妊娠中。しかもまだ初期なので、今が一番身体を大事にしないとイケない時期だ。風邪をひきたくない。トイレも近くなつたので、温水が出るようにしてもらった。でもやっぱり寒い。

おりしも秋真っ只中。稲穂は重たげに垂れ、刈り取られるのを待っている。窓から見えるススキも山のようになっている。風にそよいでいる様子はどよめく群衆、といったところか。そんなときにシモヤケになってしまった。

左の足指の薬指と小指だけ。そこだけがかゆい。昨日の夜、お風呂からあがって、裸足のまま2階の寝室に上がった。廊下が凍っているかのように冷たかったが、まあ身体も温かくなっ少しぐらいなら大丈夫だと思ったのだ。それがいけなかった。そこだけが赤く痛くそしてかゆい。かゆみ止めの薬を塗る。

「今からシモヤケになってどうする。ここの冬はそりや厳しいのに」  
トオルは叱咤激励しているつもりだろうが、顔が笑っている。

「モエ、これからこの家の玄関や郵便受けにも気をつける。吹雪の朝、うっかり水に濡れた手で外に出て何かに触ってみろ、決して取れなくなるから」

「そんなことしないわよ」

「いや、お前はしそуд。どこか抜けている人間はすることになっている」

トオルは今、晩酌中で上機嫌だ。ほろ酔い機嫌で私をからかう。  
「凍っている金属に温かい皮膚を押しつけてみる。二度と取れなく

なる。皮膚をはがさなくてはならないぞ。舌なんかつけてみる。舌がぴったり張り付いて二度としゃべれなくなるから」

「いやなこというのね、やめてよ」

「ふっふっふ、お前は甘いんだよ。この田舎の冬をなめている。自分の家の軒下で凍死した人もいる。うっかり屋根に降り積もった雪をかぶってしまい、そのまま窒息して亡くなったり・・・」

凍った道ですべて頭をうってそのうちどころが悪くて死ぬ。またまた足でつつて滑って転んだ先に車が通って轢かれて死ぬ。またまた吹雪に出歩いて道に迷って、田んぼの中に入りこんで凍死する。またまた・・・」

「やめてよ！」

私はトオルの頭を洗っていたフランパンで殴った。ごん、ともカントもつかない音がした。トオルは痛くなかったのかまだへらへら笑っている。

まったくこんな酒癖が悪い男に父親がつとまるのだろうか。私は不安になる。

ゴミ出しに外に出ると、きれいな初秋の夜空、星の光が冴え冴えとして美しい。私は自分の息がもう白くなっているのを見る。まだ膨れていないお腹を押さえた。寒さがしみる。足先もむずがゆい。

大丈夫だろうかという不安が忍び寄る秋の夜長かな。

## 第54話・妊娠真つ最中

妊娠すると感情が高ぶりやすくなる。これは本当だった。

眠くなり、しょっちゅう居眠りしたくなる。これも、本当だ。

つわりは人それぞれというが、匂いにはすごく敏感になる。それも本当だ。

それに涙もろくなっただな、という自覚症状もある。

先日こんなことがあった。連日のように新聞やテレビで報道される児童虐待。以前はへー、と思うだけだったが、今は被害者の子供の顔写真を見るともういけない、涙がぼろぼろこぼれて止まらない。かわいそうに、かわいそうに。

お母さんに殺されて、かわいそうに。

怖かったでしょう、痛かったでしょう・・・

かわいそうに、かわいそ・・・うわーんっ（泣きじゃくる私・・・）

虐待の状況を新聞記事よりもさらに詳細に書かれた雑誌の記事をコンビニでわざわざ立ち読みに行って店先で涙を流したりする。

「ああ、かわいそうに、かわいそうに」

それにわずか1家庭だけ残っていた我が家のツバメの巣が3回目の産卵の後、子育てを一生懸命にしていたのに、ヘビにやられたのか一家全滅した。

もう、いけない。

泣き崩れる私を尻目にトオルがさっさと壊れた巣を捨ててくれた。ドラマをみては泣き、新聞記事を見ては泣き、友達の失恋話を聞いたりしては電話口で泣く。トオルはあきれている。

「モエがこんなに感受性豊かだとは思わなかった」

私は涙をふきふき言う。

「私も不思議・・・妊娠すると神経が高ぶるといって、これがそうなのかも」

トオルはふん、といってビールをあおった。わかってくれないよ  
うだ。そう思うとまた涙がほろりと出た。

私の心のうちが変なのか。私はつるりと出てきたお腹を撫でる。  
妊娠して今、1人の人間をこのお腹の中で成長させている。これ  
は何とすごいことだろう。でも、私の意思とはかわりなく、手足  
の伸ばし、心臓や神経、血管を作り、数々の内臓、皮膚を作りその  
中に血管を網羅させる。私は神様でもなんでもないのに、身体が知  
っている。身体が身体を作るのだ。人間の身体ってなんてすごい  
だろう。

そう思うとまた感動して泣けてくるのだ・・・。



## 第54話・栗拾い

新居の裏に田んぼがあつて、その向こうにお墓がある。そのお墓の上に栗の木が何本か生えている。田んぼのあぜ道を歩くと道端に緑色をした栗のいが落ちてゐる。栗がなっているなんて全然知らなかった。義母はにこにこして言った。

「栗ご飯は好きかな？栗ご飯、炊くとおいしいけん、拾いに行こうな」

私は栗拾いはしたことがない。うれしかった。

「わあ、行きます、行きます」

すると義母はちよつと待ちんさい、といって軍手に長靴に長細いかごを用意した。

「素手で栗のいがなんか拾ったら、けがをするけん、軍手は必ずはめんとなあ」

なるほど。それから長いつかみばさみも持たされた。小学校のゴミ当番のときにして以来、20年ぶりにつかみばさみを持った。

栗拾いはレジャーの1つのように思っていたが、これではまったくの労働に向かう姿ではないか。

畦道からそして山道をあがると、栗の木が5本くらい生えている。落ち葉にささるようにして、あちこちで茶色くなつたいが落ちてゐる。いがの割れ目からつやつやした茶色の栗が顔を出している。

私は喜んでいがをつかんだ。

「あつ、ここらへんのは取つてはいけん、それは隣の山のじゃ、わしらは通らせてもらうだけじゃ」

「はあ」

「拾つてはいけん、拾つてはいけん」

義母の気を遣いようはこっけいなほどだった。拾えば、確実に私達が疑われるからだろ。落ちてゐる栗はそのまま放つておいて、お墓の後ろから山道を上がり、母屋の栗の木のところに来た。

結構険しいし、急斜面に生えている。落ち葉もたくさん落ちている。気をつけないと落ち葉ですべって転んでしまう。

「この2、3日は晴れていたけん、落ち葉で滑ることもないじゃろう、でも、あんたは普通の身体ではないから気をつけんしやい」

途中で義父がはしごを持って上がってきた。義父がはしごで栗の木に登り、木を揺すって義母がバケツの中に栗をどんどん入れていく。ただし、いがは剥いておく。

いがは食べられないのでつかみばさみでいがを固定し長靴で器用に剥くのだ。つやつやの栗が2、3個。多いので4個。端っこの方が極端に実が小さくて中身がないようなものは捨てておく。また剥いたあとの用済みのいがもそのまま落ち葉と一緒に放っておく。

私は義父の領分の山道に転げ落ちたいがを拾っていった。長いつかみばさみでどんどん入れていくと、見る間にかこの中はいがでいっぱいになった。ある程度ためたら今度は平らなところを見つけていがから栗の実だけを採る作業をする。結構手間がかかる。おもしろかったのは最初の10個ぐらいであとは義務感だけでやった。

慣れてくると長靴だけで2、3回いがをこすると栗がぼろりと出てくるようになった。木から勢いよすぎて谷へ転げ落ちた分も惜しくないほどたくさん採れた。

「うん、あと3往復くらいしたら、いいじゃろう」

「えー3往復！」

まったく栗拾いはレジャーではなく、労働であつたのだ。

私ははしやいでいた自分がおかしかった。久しぶりに身体を動かしてすっきりした。形の良いいがを2、3個もらって帰り、玄関に飾っておく。

里芋の大きな葉を形よく敷いて、その上に栗のいがを置くと本当に秋らしいしつらえになった。新居の玄関は小さいが入るとすぐに栗のいがが目がいくだろう。でもトオルからは文句が出た。

「都会にいるならともかく、ここら辺で栗を飾る家なんかないよ。珍しくもないのに、飾るな」

私はむっとして飾るのをやめなかった。そして採れたての栗の皮を慣れない手つきで剥いて栗ご飯にした。

店で売っている栗よりは小ぶりで皮は剥きにくいし、虫食いも多い。しかしおいしかったのはいうまでもない。

栗と山菜と小豆とご飯に義父お手製の漬物、魚の献立にした。魚はさんま。さんま以外は全部母屋の義父母が作ったものだ。私は秋の味覚を思い切りほおばった。

おいしい！

田舎には田舎の良さがある。私は栗拾いでいためた腰をさすりながら「田舎は不便だけど、幸せ」と思った。

## 第55話・いのしし

ある日、退屈して窓を開けてみたら、義父と義母が何やら田んぼのまわりで網みたいなのをぐるりとはいっている。重労働そうだが、くつを履いて見に行った。細い木を畦道沿いにくいを打って、そこに網をはっている。

「こんにちは。何をしていらっしゃるのですか」

「いのししよけじゃ」

「まあ、いのししが出たんですか」

「ああ、これから収穫の時期なのに、荒らされたら困るけん、網をはっておくんじゃ」  
「なるほど」

赤い細い網だった。夜だときつと見えないに違いない。端には赤と銀色の細長いテープもある。光を受けるとキラキラ光るあれだ。

「これはスズメよけですね」

「そうじゃ、スズメも害鳥じゃ。稲穂だけをついばまれちゃ、困るけん」

矢印の吹き矢のようなものも、あちこちに立っている。風見鶏代わりにするには、少々数が多すぎる。

「あれは、もぐらよけ」

「へえ、もぐら・・・」

「モグラが穴掘りよったら、すぐにわかるけん、土が盛り上がって作物の根を引きはがして枯らしてしまうけん、困るんじゃー」

「ふうん」

モグラの巣を見つけ次第、殺すのだという。

いのしし、スズメ、もぐら！

「私、もぐらは見たことがないけれど、つかまえたらずひ見せてください」

「あれは光にあてたら、死ぬけん。まあ、捕まえたら見せてや

る」

農家をしているとテキは野生動物ばかりである。大変だなと思った。

その夜母屋に行くと、晩酌をしながら義父が話した。

「農家は確かに大変だが、スズメやいのししはたかがしれとる。やっぱり一番怖いのは人間じゃ」

「はあ、まあ、そうでしょうね」

私は結婚前まで勤務していた会社の人間関係を思いだす。いろいろあつてそのりの合わない人ともやりあつたが、一応はみんな結婚祝いをくださつた。いい思い出は大切にしたい。

でも義父達は人間が相手ではない、自然が相手だ。それなのに、人間が怖いとは変だなと思つた。

義母が言う。

「隣の畑の人が開墾したのはええが、水を勝手にひいてな」

「水？」

「農家にとつちや、水の回路を何もしらなくて勝手にいじるのは、死活問題になるんじゃ」

「勝手なことを教えるな」

義父が義母を叱つた。従順な義母はそれきり黙つた。

新居に戻つてこの話をするトオルが教えてくれた。

「勝手に水門を開けて水路をいじつたんだ。・・うちに断りなくね。その人は会社勤めを定年退職でやめてここに来た人だからこの村の風習をわかっていない。悪気がないと思うから親父が注意したんだが、それを根にもって嫌がらせするようになったんだ」

「へえええええつたたとえばどんなこと？」

「うちの水路に大きな石を転がしたりするんだ」

「証拠はあるの？」

「まあな。夜に散歩しているところを見た人がいる。大体あそこは自然に石が転がるようなところじゃないし」

私は黙った。私の出る幕の話ではないからだ。

誰がやったかわからないということにしても、揉め事で水門に石を入れたりする。それならば井戸に農薬を入れられてもわからないじゃないか。

「だろ？火つけ、放火のことだがそれも怖いだろ？境界線争いでもめて、火つけしてやるぞ！」と脅かされた人を知っているよ。人間の方が怖いだろ？」

本当だ。野生動物は生きていくために自分の食料を確保しにいくのだ。やっぱりのししやモグラよりも怖いのは人間だ。

## 第56話・もみじ

この村の隣は町だがそれでも温泉が湧いている。またそのもみじがちよつとした名所だ。この時期は県下から大勢の見物客が来るので夜はライトアップされる。とても、きれい。

もちろん昼もいいけれど、夜の方が気分的にロマンチック。しかし夜の国道外れの道は細く曲がりくねっているので私のようなヘタなドライバーには運転しにくいコースではある。

橋を渡れば広くて整備された道になるがそれまでの旧道の道は（私にとっては）頼りなく見えるガードレール、もしそれを外れば確実に渓谷に落ちる・・・。

「昔、酔っぱらって落ちた人、いるらしいよ。モエの場合は運転が下手で落ちることになる。もし死んだりしたら死人の名前をつけたりするから、モエ淵という名前が奉られる。名所になるかもな」

トオルったらそんな憎たらしい冗談を言う。

死んだ場所に故人の名前が冠される別名がつくのは、この村の伝統？らしい。そんな不名誉なこと、されてたまるか、と思う。

「誰でも好きで転落したりする人はいないさ。お前、夜行くのも本当に気をつけていけよ」

トオルは真顔だった。そんな顔をして忠告するほど、私の運転はへたなのか、とショックだった。

しかし夜の運転はしたことがないし、一度ぐらいはいいだろうと思う。トオルを助手席に乗せて紅葉狩りドライブをすることにした。ライトアップされた渓谷は美しかった。観光客も来ている。みやげものや屋台もあまりない、本当に景勝地を楽しむだけの地形だ。これはこれで、あつさりしていてなかなかいいものだ。

問題は帰り道だった。帰り道、曲がりくねった道を運転する私にトオルは怖い話を言い聞かせるのだ。

途中の温泉で雷に打たれて死んだ人の話。

真つ暗なこの道でスーツを着た女性に会った話。

この話はマジで怖かった。

見たのがトオルの他、誰それさん、と知っている人の名前をあげたからだ。

「・・・見たんだよ。後から思えば変なんだ。スーツはツーピースっていうのかな、上着とスカートがピンクでハイヒールを履いていてさ、その人がガードレールの外に立っている。道路に背を向けてさ。どう考えても変だろう、これは。」

それを通して見たのは一瞬なのに、車の中にいた全員がその女を見ているんだ」

「こわい、で、どうしたの？ひきかえしたの」

「いや、確かに引き返す話もしたけれど、やはり変だろう」

「自殺者とか・・・」

「幽霊だろ、あんな夜中にどう考えても変だし」

「こわい」

「ほらっ！ちようどこのカーブだった！」

「キヤー！！」

私は思わず急ブレーキを踏んだ。車はきしんだ音をたてて止まる。トオルはあわをくつている。

「車、早く出せ、出せ！」

「こわい」

「だったらどうして止まるんだ。後ろから車が来たら、このカーブでぶつかるぞ！あつ！対向車線にもはみだしてやがる。いいから、出せ！死にたいのか、事故るぞ！」

私はようよう車を出した。そろそろと整備された国道に入ったら、今度は猛スピードで新居に戻る。トオルは怒って口をきかない。もう少しで事故るところだったので怒っているのだ。

「何よ、あんたがお化けの話しをして怖がらせるからよ」

「へたくそ！どんな場合でも冷静になつて運転するのが当たり前だろ。お前は車1台も、動かす価値もない女だ！」



「言ったわね」

またケンカになった。

紅葉にうつとりしたのは、ほんの一瞬。帰り道のお化けの話とトオルの怒りで台無しになった夜だった。

## 第57話・げぼりん

つわり話しの続き。

妊娠して早くも4カ月に入った。お腹はまだ出ていない。しかしつわりによる吐き気はますます強くなる一方だ。

朝ごはんを炊く匂いで、おえっ。

ピーマンやブロッコリーのにおいで、おえっ。

お風呂の湯気でももうだめだ。

自分のおしっこにおいても吐き気大。

それだけではなく何かの拍子で実際に吐いてしまうので、トイレはいつでも行けるように開けっぱなしだ。

朝夕の冷え込みがきつくなってきたので、お腹が隠れる「ババパ  
ンツ」を色気なくはきこむ。厚手の靴下も愛用する。妊婦は身体を  
冷やしてはいけない。これもみんなお腹の子供のためだ。

体重は3キロも減った。つわりで食べられないからだ。普通だっ  
たらダイエット成功だーと喜ぶが、こんなにつらい思いをして減っ  
てもうれしくとも何ともない。

いつでも、げえげえいう私にトオルは「げぼりん」というあだ名  
をつけた。

トイレを開けっぱなしで便器をあが崇めるように膝まづいて、吐く私  
の姿に哀れを感じたり、怪獣のように思えたり、いろいろな感情が  
去来するらしい。

「げぼりん、かわいい名前だろう」

「うーん、確かに何かに「リン」とつけたら怪獣ばくなるねえ」

私は反論したり、反発する気力なく微笑した。おいしく感じられ  
るものはリンゴジュースとアイスクリームだけだ。

トオルは勤務が終わったら、職場の前の自動販売機でジュースを  
買ってきてそれをお土産にしてくれるようになった。彼なりの励ま  
しらしい。

料理が明らかに手抜きでも文句を言わない。もつとも不足していると感じられる栄養とお酒は母屋からも補給しているらしいが。

夜も私のげぼりんぶりは変わらない。明け方も吐く。起きるなり吐き気がしてトイレに吐きに行く。

明け方はトイレはぐっすり寝込んでいるので、私はそつとトイレを閉めてなるべく音をたてないようにして、ひっそりと吐くようにしている。音を遮断するのは無理でも少しはましだと思う。

ある朝早い時間もそうしていると、トイレがどんどんとトイレの戸をたたく。

「大丈夫か、モエ」

私は吐しゃ物をしたたらせて言う。

「大丈夫・・・もうちょっとかかるから、待っていて」

トイレのトイレとかちあつてしまったと思い、あわてて身支度をする・

トイレから出るとトイレがいきなり私を抱きしめる。

「大丈夫か、本当に？」

これには驚いた。

「大丈夫よ、ただのつわりだから」

「いや、ぼく、トイレの方から大勢の人がしゃべっている話し声がして・・・それでびっくりして起きて来たんだ」

「話し声？いいえ、何を言うの」

トイレには私一人しか入るスペースがない。トイレの外側は畑だ。トイレは玄関を開けて新居を一周した。

「誰もいない」

「あたりまえでしょう。まだ4時半過ぎだもの。5時にもなっていないし」

私はぞつとした。私は誰の話し声も聞いていないのに。トイレが寝ぼけたのだ。

トイレの聞いた話声って一体何の話をしていたのだろう。前にもこんなことがあった。

「いや、話の内容まではわからなかった。大丈夫かと気遣っているようでもあった。がんばれ、とか声をかけているようでもあったけれど、・・・おかしいなあ、」

また人の声の話だ。似たようなことはあった。私は窓を開けて田んぼ越しに北側にずらりと並んで新居の方を向いているお墓を見るでもこんなことがたびたびあってたまるもんか。私はきっぱりと言った。

「さ、寝ましょ。トオルは寝ぼけていたのよ。私がトイレにたったので、半分寝た状態で夢を見たのよ」

「そうかな、いやそうだろうな。でないと説明がつかないし」

そして寝室に戻る。私はお腹をかばって手を置いて寝る。トオルは私の肩を抱いて寝てくれた。お互いの身体は温かった。

この新居には二人しかいないのだ。2人しか暮らしていない。

あれほどひどかったげぼりんとしての吐き気はどこかへ行ってしまった。こういう面から考えると吐き気は心理的なことも影響するのかもしれない。

## 第58話・アケビ狩り

「家でごろごろするのも、つらいだろ、アケビ狩りでも連れて行ってやろうか」

「アケビって、あのアケビ？ トオルの山でそんなのが採れるの？」

「ぼくの山じゃない、親父の山だ。ほら、なめたけの木を転がしたままの山だ」

なめたけ、とはなめこのことだ。ここの特産物の1つだ。

1mぐらいに斬られた木に、菌が植え付けられ、ある程度育つかごを持って収穫に行く。いいものはJA、農協に持っていく。規格外というか気味悪く大きく育ちすぎたなめこは売り物にならない母屋で小さく切られてみそ汁の具になる。これが見た目が悪くとも結構おいしい。

アケビはそのなめこの木が置かれている山の中にあるという。車で途中まで連れて行ってもらった。

それから滑らぬように気をつけながら山美都をあがっていく。道なんかないから大変だ。トオルのようにひよいひよいと登れない。

アケビはその山の上の方にあるという。私は木の枝に髪をひっかけないように、まだ落ち葉で滑らぬようにしてトオルについて行く。山道に慣れているトオルは時折振り返りながら「早く来いよ」といらいらしている。身重の私に向かって何と言うことを言う男だ。腹が立つたが、アケビの木につられてゆっくりと登る。

「さ、ここだよ」

アケビは確かになっていた。2個だけ。

しかもとても手が届かない木の真上近くにある。口をあけて眺めるだけだ。（私はもつといっぱい鈴なりになっていると思っていた）それでも本物のアケビを見るのははじめてだった。美しい紫色だ。実家近くの八百屋さんで売られているアケビは透明のパックに詰められた高価な果物、であるにすぎない。食べたこともない。

が、ここの木は野生のワイルドな感じがする。

「さて、どうやって採るの？」

「もちろん、登るのさ」

トオルは慣れた動作で細い木にしなるように登り素早くもぎとる。  
「ぼくの小さい頃は弟や友達とアケビ狩りをしたよ。おもしろかった」

「ふーん」

トオルは小さなリュックにアケビを押し込むと私の手をひいてさらに高く登って行った。

「きみにもつとおもしろいものをみせてやるよ」

「なに？なんだろう」

「あの崖さ。あの崖もうちの地所なんだ。ここからじつとあの崖を見てご覧」

私は言われたとおりにする。するとおぼろげだが、岩を重ねた崖が人の横顔に見えるではないか！

「まあ、あれは・・・！」

「うん、聖地して崖くずれがおきないように、アミネットもかぶせてある。それでも・・・、人の横顔に見えるだろ」

「ホント、不思議ねえ！鼻がわかる、唇もわかる・・・。目はわかりにくいけれど、だいたいの位置がわかる」

「数年前に大雨があつてな、地盤がゆるんで崖くずれがおきた。村のあちこちでな・・・ここもその1つさ」

「もしかして、そこで誰かが・・・」

「ご明察。その下は村道だからね、車で通っていた人が1人、ね。崖崩れで直撃を受けて亡くなられた」

「うわあ・・・」

「それからしばらくしてさ、崖が人の顔に見えるようになった。親父もそれに気付いた。」

それで整地して2度と崖崩れが起きないようにアミネットをかぶせたんだ」

「そんなことってあるのねえ．．」

「だろう。世の中わからないことが多い。これは説明のつかないことだけど、ちなみに横顔の輪郭はだいぶ崩れてきているよ。成仏しかけているのかねえ？」

私達は黙って崖を見た。崖の人の顔は素知らぬ顔で、村道の道を通る車を見下ろしているように見えた。

## 第59話・秋の牧場

秋風がふいてきた。日中は暑くもなく、寒くもなくちょうどいい具合。こうなると無性にどこかに行きたくなる。

つわりもまだあつて、しんどいな、という気持ちもあるにはあるが、こう空が青く澄んで高いと、どこか遠くへ行きたいな、って思う。

独身の時は山へハイキングに行くのもおもしろかったが、妊娠中ではちよつと怖い。かといって外出は買い物だけというのも情けない。

そうばやいていると、タオルはじゃ牧場でも行つて牛でも見に行かかと車を出してくれた。牧場は村の高原の近くにある。

1本道の誰も通らない道を通つていくと、つきあたりに門が閉ざされている。

「一般人は立ち入り禁止だ。むやみに入ると牛泥棒に間違えられるよ」

「牛泥棒？そんなのいるの？」

「いるさ。夜中にトラックを持ちこんで牛を盗っていく」

「管理人さんは」

「マンションじゃないのにー。でもいたよ。以前牛泥棒に頻繁にやられたところは毎晩村人が交替で張り込みました。当時うちの親父も牛を飼っていたから、ぼくも見張りをやったよ」

「ふうん・・・」

牛泥棒はもちろん牛の肉が目当てである。盗品でも解体すれば誰のものかわからなくなる。売りさばけるルートもあるのかもしれない。

門を開けて車を入れる。牧場の道もきれいに舗装されている。秋になったとはいえ、まだ牧草は青々とした草原だ。その中を牛がゆつたりと過ごしている。



奥の方まで行くと、子牛達のいるゾーンに入った。くいで囲まれた原っぱの中心に、えさ入れと水の入ったバケツがある。牛たちはみんな黒い色をしている。

「よく見かける白地に黒いぶちのある牛の方がイラストを描くときにかわいいよね」

「ここいらで飼育される牛は乳牛ではない。みんな肉牛だよ。この品種の肉が一番おいしいんだから」

「確かに黒光りして健康そうね」

「一級品だよ」

トオルの家は母屋でつい最近まで牛を飼っていたのでくわしい。

「このあたりは牛を繁殖させて、2年ばかり育ててまだ子牛の段階で売るから」

「子牛からお肉をとるんだ、かわいそうだね」

「違うよ。売り先によつて成長すると神戸牛や松阪牛になるのさ」

「ブランド牛とかきくけど、やっぱり味が違うのかしら」

「育て方で違ってくる。飼料が違つとね、やっぱり味が全然違ってくるよ」

くいの中の子牛が私達に近づいてきた。好奇心いっぱいにつぶらな瞳がかわいらしい。

「モー・・・」

えらく大きな牛が子牛を呼んだ。子牛は素直に親牛らしきところに戻る。そして乳を吸いだした。

「親子で放牧しているのね」

「いや、放牧中に生まれたのだろう。子牛にさっさとお乳を吸いだしてもらわないと、はってきて痛くなるからね」

親牛は子牛に乳を飲ませて、自分はゆつたりと草をはんでいる。

秋風の吹く牧場はなごやかだった。

「もうこの2週間もすれば閉鎖される。雪で埋もれてここにも来れなくなるよ」

村の厳しい冬はもう目の前なのだ。私達は風に吹かれたまま、親

牛、子牛を眺めていた。

## 第60話・もやもやの日

台風が近づいてくるらしい。

テレビのニュースはその報道ばかりだ。

でもこの村まで台風がやってくることはめったにないらしい。周囲に山があるせいだろう。しかし台風の影響はあって強い雨が降ったりやんだりしている。急に冷え込みがきつくなった。昨日まで日中は暖かだったのに。

私は風邪をひいてしまったようだ。身体がぞくぞくする。風邪はひきはじめが大事だと言うので、いつもは早めに薬を飲んでおくのだが、妊娠中なのでそうもいかない。

身体を温めるために熱い紅茶をすするくらいだ。食欲がないせいもあって、体力がおちているのが自分でもわかる。

「ああ、私はばかだ。こんな大事な時期に風邪をひくなんて。お腹の赤ちゃんに悪影響が出たらどうしよう」

眠くないのに、じつと横になっていると悪い考えが次から次へ浮かんでくる。悪いほうへ向く想像力には事欠かないようだ。

赤ちゃんに悪い影響がでたら、何かあったら、

自分に無事赤ちゃんを産んで育てるということができるだろうか、のどが痛い、頭も痛い。熱が39度もあって、身体も重いように動かない。当然家事もできない。声も出せない状態なのでタオルの食事は母屋でとってもらうことにする。

義母が見舞いにきた。みかんやりんごを持ってきてくれた。

「何も心配しなさんなや、お腹の子供が大事やけん、身体を大事にせんといけん」

「ありがとうございます」

かすれた声をしばって礼をいう。義母は洗濯もした。掃除もしておいたという。

「それはありがとうございます、でももういいですから」

義母は清潔好きなので、私の家事の至らなさがさぞ目についただろうと思う。

「何の、何の。お腹の子供のためじゃ、ここの家の子供のためじゃもの、身体を大事にせにゃあ、」

やさしい義母の言葉だが義母が母屋に戻るなり私は泣いた。新居に勝手に入って私が寝ている間に掃除や洗濯をした。善意だし、お腹の子供のためだという。それは当然だろう。私はここの家の子供を産むのだし。でも私は無性に実家に帰りたくなった。

実家には母がいつもいる。母は私が帰れば好物を用意してくれるだろう。それを私はお礼もいわずむしゃむしゃ食べる。ここでは義母が用意すればお礼をいわないといけない。これは当然のことだけど・・。

結婚して実家を離れてはじめて実の親のありがたさがわかる。本当に。

義母はやさしくしてくれるけれど、こんなときにはやはり実の母親がいい。私は親子ケンカもよくしたし母親べったりの娘ではなかった。どちらかということなんでも1人でできるもん、という独立タイプだと思っていたのに、こんなに気弱になって実家を恋しいとおもうとは。

悶々しているとトオルがそつとカップを出してくれた。

「モエ、しょうが汁だよ。のどにいいから、お飲みよ」

トオルが私に飲み物をすすめてくれるなんて。感激してふとんから顔を出すとそのカップは母屋のものだった。

「なんだ、お義母さんが作ったものを持ってきたのね」

「そうさ。のどがかすれていたから、かわいそうだっていって。さあ、飲めよ」

私は無言で飲んだ。複雑な気分だった。お腹の子供が心配だからやさしくしてくれるんだ、どうしてもそう思ってしまう。でも一応お礼は言っておかねばならない。

「お義母さんに、ありがとうっていっておいてね」

「明日も見舞いにいくよって。掃除も洗濯もまかせてくれって」

「やめてよ、気を使わないでと言っておいて」

「心配してるよ」

「私の心配ではなくて、私のお腹にいる子供が心配なのよ」

「そんなこと、言ってるじゃないよ」

「いいから、ほうっておいて」

この気持ちはトオルにはわかるまいと思う。しょうが汁も風邪のせいであまり味がわからなかったが片栗粉でとろみがつけてあった。半分だけ飲んだ。

トオルは不機嫌な顔で私を見守っている。私が寝込んでから義母がよく来るようになった。掃除も洗濯もはつきりいつて余計なお世話。ほうっておいてほしい。

「あんたのお腹の子供のためじゃけえ」ってそう言い方、大嫌い。やつぱり姑って大嫌い……。

そういいつつもしょうが汁を飲む私。ああ、いやだいやだ……。トオルも何もかもどうでもよくなって私は布団を頭からかぶって無理やり寝ようとした……。

## 第61話・霜

やっとこさ、風邪が治った。私は自暴自棄にもなり、自分をもてあましていたが、もうパワー全開！

元気になるっていいことさ！

朝起きて新聞を取りに行くと、なんだか足元の土が白っぽい。玄関のたたきを下りて地面を踏みしめると何やらじりじりいう。

地面と地面のあいだに霜柱が立っているのだ。わずか1cmくらいの霜柱だが、柱には変わりはない。しっかりと土を持ちあげているのには驚いた。

誰が名付けたか「霜柱」ってよく言ったものだ。私は感心してしやがみこんで霜柱を見つめていた。

トオルがいつのまにか横に来て立っている。

「モエ、また風邪をひくぞ、早く中に入れよ」

「見て見て、これ霜柱！」

トオルは笑った。

「めずらしいかね」

じやりつと音がした。トオルが霜柱を踏みつぶしたのだ。

「これからもつと寒くなるぞ。また風邪をひくんじゃないぞ、お腹の子を大事にしないとな」

「うん・・・」

空気もきん、と冷えていて身体がしゃんとする。裏の山に太陽の光が当たってきらきらと光る。

「見ろよ」

車にも白い霜がかかっていた。私の車は真っ赤な色をしているのでよくわかる。

「霜って細かい氷なのね。きらきらとしてきれいな」

「そろそろ冬用のタイヤに替えないとな」

「そうねー」

私はそばにあったほうきで、霜を払った。

「やめろよ、ほうきで霜や雪を落としてみる、車に傷がつくぞ」

「えっ、じゃあやめる」

「霜も雪も見かけよりもずっと強いぞ。通りつくとエンジンをかけて車を動かすにも時間がかかるようになるぞ」

「うん・・・」

村で生まれ育ったトオル。トオルの父。今は亡きトオルの祖父。代々そうやって村から出ることなく、この土地を守ってきた。

トオルは新居を眺めて今晚あたりから雪が降りそうだから、この排水パイプは布で補強しなきゃ、とかいつている。

まもなく冬がくる。

冬將軍がこの村にやってくると寒いといってられない寒さがくるそうだ。

でも村はかえって活気づく。高原にスキー場があるので、観光客がやってくるのだ。

義母はスキー場の食堂の手伝いに行く。昔はスキー場のリフトの仕事もしていたという義父。トオルも昔バイトで民宿の手伝いもしていたらしい。

村の冬は私と私のお腹の子供にとっても初めての経験だ。一体どんな冬になるのだろうか。

冬に向けての準備はトオルにまかせよう。私は素直にうなづいた。

## 第62話・初雪

雪がとうとう降ってきた。ちらちらというかわいい降り方ではない。ごおおおおおおおつという激しい降りだ。一晩で40センチも積もった。

明け方にトイレに行くと水が流れない。もしかして水道が凍った？  
びっくりだ。水道どころかトイレのたまり水まで凍っているのだ。  
トイレに行くのも一苦労で身体が心底冷え込む。

「モエは寒がりだからなあ、まー無理もないか」

トオルはトイレにヒーターを入れてくれた。寒いとは言ってもまだつわりによる吐き気はある。だからトイレに入る時間も長い。おまけに便秘がちにもなってきたので、余計に時間がかかるようになった。ヒーターは足を温めてくれるが、今度は頭が寒い。

「こんなに寒くては、もう外には出れないわ」

トオルはあきれて「まだ冬がこれからというのに、これくらいの寒さでくじけてどうする」という。

そうそう、トオルが出勤する前に雪かきが必要になった。ちりとりのお化けみたいなので駐車場から小道に出るまで、雪をかきとり道を作る。

トオルも義父も朝から汗まみれになって雪かきをしていた。これから大雪は降るたびに雪かきが日課になるのだ。

私は身重だが、それなりにできることは手伝わないといけない。

雪国だといっても、実際に降るまで他人事のように感じていた。トイレの水が凍って流せなくなったことを教訓に、凍結予防に今日から水を少しずつ流す。保温する。なんとかなるだろう。

「トオル、雪かきはお湯で溶かせばすぐにすむわよ。沸かして持ってきてあげようか」

トオルは目をむいた。とんでもないことだ、という。

「あのな、モエは都会育ちだから、知らないのも無理はないけどな、



お湯で溶かしても気温が低いからすぐにまた凍るんだよ。そしたらかえって始末に負えなくなる。降ったばかりの雪は踏んでも滑らない。でもわざわざ凍らすと滑る。車も滑る。わかるだろ？」

「そうか、滑るのか」

「人もすべるのも怖いけれど、車で滑る方がもつと怖い。即、事故につながるからね」

「事故ねえ、確かにそうだわ」

「だろ？凍結した橋の上で車が滑って、2回転してやっと止まったことがあるよ。」

あれは滑り出すとブレーキなんか効かない。田んぼの中にダイビングしたこともあるし。まあ、雪が積もっていたから車も傷つかず助かったけれど」

「まあ、それでどうしたの」

「どうするもこうするもないさ。親父に電話して田んぼの持ち主にもあやまって、車を引っ張り出してもらったさ。どんなに雪が降っても、車がないと困るしね」

「ふうん」

「モエはまだ運転がへただから、雪が降っているときは絶対に運転するなよ」

「買物は・・・」

「そんなのは、ぼくが日曜日にでも連れて行ってやる」

「うん」

「特に峠のトンネルの前後は坂道だからな、絶対に滑る。現にあそこではいくつか事故もおきている」

「うん」

いつの間にか雪道での運転談義になっていた。

「特に他県ナンバーの車が危ない」

「どうして」

「大体がスキー客なんだけど、無茶するからな、自分の運転を過信してやがる。トンネルを出る手前で雪が降り積もっているのを初め

て肉眼で見て、急に減速したり、ひどい時には急ブレーキをかけて止まるんだ。

危ないこと、この上ないよ。現に知り合いの人なんか、神戸の方から来たという人にぶつけられてなあ。相手はチエーンもスタッドレスタイヤもつけていなかったんだ。お互い命があっただけマシだったよな」

「チエーンかあ・・巻くの難しそうね」

「何、慣れたらそうでもないよ。でもチエーンも過信は禁物だ。滑るときは滑るから。ぼくはチエーン派だけど信用はしていない。すべては自分の慎重さ加減で事故を起こすか起こさないか、巻きこまれるか巻きこまれないかが決まると思う。」

チエーンの話で思いだしたけれど、以前大阪から来たスキー客に呼びとめられてこのチエーンぼくの車に巻いてくれたら1万円あげるからって頼まれたことがあるよ」

「できない人多いと思うから商売になるわねえ」

「巻き方知らない人、多いからね。ま、ただでやってあげたけど。それに県南からやってくる人は雪がふってないからこっちのトンネルを出て初めて雪が深いのに驚くからね。それではじめてスタッドレスタイヤや、チエーンの必要に目覚めるみたいだ」

ふーん、どこまで聞いていても私にはものめずらしい、雪国の冬の初めの話だった。

### 第63話・にげる

母屋に手作りのパンを持っていったら、あいにくと留守だった。でも煮物の匂いはしている。多分畑に出ているのだろう。

私はパンをテーブルの上に置いておいた。煮物の鍋がぐらぐらいつている。吹きこぼれそうだったので、少し火を弱めておいた。煮汁があと少ししかないのに気付く。ほっておくとすぐに焦げ付いてしまうだろう。

迷ったが、火を止めておいた。

それから新居に戻って新聞を見ていたら、電話がかかってきた。母屋の義母からだ。

「モエちゃん、パンを焼いてくれたのね、ありがと」

「いえいえ、おやつにしてくださいね」

「もちろん。それと火も止めてくれたのね」

「はい、焦げ付きそうだったので」

「火を止めて逃げたのね」

「私、逃げていませんよ」

「だって今自分の部屋にいますのでしょ」

「ええ、そうですけど」

私は火を止めたことにとがめられたと思った。裏の畑で時間を見計らって火をかけていて、戻ってきたら台所の火が止められているというのは、嫌な気がするかもしれない。

焦げ付きそうだからと言って、勝手に火を止めるのは出すぎたことかもしれない。

「声をかけたらよかったのですけれど、火を止めて逃げたつもりはないです」

「でも、逃げたじゃない。自分の部屋に戻ったでしょ」

「まあ、そうですけどね」

自分の口がへの字に歪んでいくのがわかる。しつこくいう義母が

憎らしい。

「せっかくパンを焼いてもっていったのに、これでは余計なお世話  
といったげではないか、なんて失礼なのだろう」

トオルが帰宅するなり、愚痴を言った。

黙って最後まで聞いていたトオルが言う。

「モエ、これは責めて言ったのじゃないよ。ここらあたりでは逃げることを卑怯者の意ではなくとも使う。去る、という意味でね」

「はあ、去る・・・」

私は少し前に畑にいて、細い畦道を歩いて向こうから義父がやって来たときに、脇にどいてくれたセリフを思い出した。

「モエさんや、こっちが逃げるけんの」

私はこのときに変なことをいうなあ、って思ったことを思い出した。なるほど、言葉って、方言って難しいものだと思う。ましてや今日のことは義母のセリフだ。台所をいじられたと不快に思ったと推測したのだ。

方言の1つでもあろうけれど、こういった些細なことで行き違いもあるのである。トオルが教えてくれなかったら、私は義母の対してなんて嫌みなヤツ・・・と思っただろう。

やっぱり鍋が焦げてしまおうが、人の台所はいじらないのが無難かもしれない。

## 第64話・戌の日

さあ、今日で妊娠5ヵ月になった。そして戌いぬの日。

5ヶ月目の戌いぬの日に戌いぬ帯というさらしの帯をお腹に巻くと、安産になるという。日本に昔からあるまじないのことだ。

犬は多産で安産だと言うから、戌帯を巻くのだろう。

その日は実家から両親がきてくれた。

途中兵庫県にある中山寺という安産祈願で有名なお寺に祈祷していただいたという。

さらし、妊婦用ガードル、そしてついでに好物の塩おかきなどのおやつもたくさん持ってきてくれた。祈祷済みの有り難いさらしの布は中に筆文字が書いてある。先にお納めした人の子供の年や性別が書いてあるのだ。

「あけてみて」

実家の母が言う。義母達は興味深そうに見守っている。さらしに文字が書いてあるなんて見たことがないそうだ。

そこにはネズミ年、女、と書いてあった。

「ああ、これをお納めした子供は女の子だったんだ、ということはモエちゃんのお腹の子供はきっと男の子だよ」

「えっ？」

「中山寺に納められたさらしを次にいただいた子供は性別が逆になる。そういう言い伝えがあつてね。ちなみにモエの時もそうだったし、私の叔母も妹も出産のときにそのとおりになった」

「じゃあ、私は男の子を産むの？」

「外れた人もいるけれど、たいてい当たるらしいわよ」

「ふうん・・・」

トオルはそれを聞いて面白い言い伝えだね、と笑った。そういうのは村にはないらしい。

男の子でも女の子でもどっちでもいい。安産だったらそれでいい。

性別なんかどっちでも！

そう思っていたら義父が言った。

「わしは男の子だったらいいが。この家の跡取りじや」  
なるほど、跡取りね・・・。

私はトオルと顔を見合わせた。トオルはにこにこしている。

「男の子かあ、ぼくはどっちでもいいよ。でもまあ男の子だったら力仕事には役立つよな」

お取り寄せの会食を食べてなごやかに時を過ごした。私はさらしを撫でた。くすぐったいような、うれしいような。この私が妊婦だなんて・・・。

私はそうつともう1回お腹を撫でた。



は行つた。

今度は昼じゃ。

一応顔見知りじゃけえ、見舞いのウリを持ってな、電報を持って行つたんじゃ。昼じゃから昨日の夜の岩をとっくり見てみた。

当然岩の上に人なんかいないわな。しかし岩が割れていたんじゃ。ひびが入っていたなんてもんじゃない、上からすつと、まつぶたつに割れている。ちょうどあの人がいたところからすつとふたつに割れている。

その岩にはそんなひびなんかなかったはずじゃ。

首をかしげながらわしは電報と見舞いのうりを渡したんじゃ。

家の主人は脳をわずらつたかとで、寝たきりになつてしまつた。ついこのあいだまで、そう、昨日電報を渡した時は元気じゃつたのに……。

枕元まで見舞いに来たが、意識もないし、ぴくりとも動かん。

「いきなり倒れたんじゃ……」と奥さんが疲れた顔で言つた。

「あんたがきのうの夜中に電報をもつてきてそれからすぐにじゃ、電報は悪い知らせでもなかったのに、急に頭が痛い、頭が割れそうじゃといいだしてのう」

わしは奥さんに聞いてみた。

「話しが変わるが、家の近くのある大きな岩が割れておる、何でか知つておるか」

奥さんはそうかのう、前から割れていたのじゃないかと首をかしげていた。わしはその岩と家のあるじの病気に関係があるような気がしてならなかった。

「それでどうなつたのですか」

岩は今もなおわれたままで、あるじも今も寝たきりで意識不明じゃ。病院に入れられてしもうてもうかれこれ10年にもなるかな。

その家も廃屋になつた。誰も行かん。義父はまじめな顔で言つ。



「話しはそれで終わりじゃ。へたに首をつつこむと今度はわしの家に何がおこるかわからんけん。昔の村は、のう、天狗も八チのお化けもいたから何がおこるかわからんから」

事実話しはこれで終わった。

岩が割れた話しはどこからともなく村でも広まったが、関連付ける人はいても結局は何もしなかったらしい。当のご夫婦も何もしなかったから何もせんでいい、という話しや。

## 第66話・北部E地区からの客

夕ご飯の支度をしていたら、のそつと人間が1人は言ってきた。驚いて持っていた菜箸を落としそうになった。泥棒だと思ったのだ。するとこたつに入っていたトオルがおお、と歓声をあげた。

「お前かあ、久しぶりだなー」

その男は私をまるつきり無視して、何も言わずに居間に入って行くのだ。そして当然のようにこたつに入ってトオルの隣に座った。年は私達と変わらないように見える。マジメそうな顔もしている。作業服を着ている。トオルの友人らしい。

しかし、なんで私を無視する？

何で「こんにちは」も「あがります」または「あがらせてもらいます」とか言わないで無言で入ってくる？インターホンが見えなかったのか、それとも知らないのか？

何で私に何も言わずに当然のようにこたつに入る？

私はむかついてきた。

トオルをにらむ。トオルは私の険しい顔に気付いたのか「あ、コレ、ぼくの奥さんだよ」と言った。（コレとはなんじゃ！）

「・・・どうも、」男はじめて私に頭を下げた。でも視線をあわせてくれない。トオルは上機嫌だ。

「彼女、今妊娠していてね。もう6カ月に入るよ」

「よかったなあ」

男はトオルにはお愛想をいう。

「モエ、お茶を出してやってくれ。こいつはぼくの幼友達でケンチっというんだ」

「あ、そうお？ケンチさんよろしくね」

私はできるだけそっけなく行った。このケンチさんはちゃっかり夕御飯も食べていった。お酒も飲んでいった。

深夜にやっと彼が帰ってからわたしはトオルに怒った。

「なに、あの人は！いきなりのっそりときて、あがるともいわないで勝手に人の家にあがりこんで、失礼にもほどがあるわよ」

トオルは頭をかいた。

「ああ、あいつはいつもそうだ、E地区の人だしなあ」

「何E地区？そこに住んでいるの？何があるの？」

「あそこは古くから住んでいる人で固まっているから、みいんな親戚で知り合いで友達なのさ。だから気軽に何も言わずにあがりこむ習慣があるのさ」

「でも私はそのケンチさんの知り合いでもなんでもないのよ。それにここはE地区じゃないし。礼儀知らずだわ」

「確かにあいつは愛想がないな。女が苦手らしいよ。彼女もいないし、当然結婚はしていないし」

「Eのまわりはともかく、そういう習慣をこっちに持ち込んだからって、県外からお嫁に来た私には通じないわよ。あんな男、女性にもてやしないわよ、絶対」

「うーん、そう言うなよ。まじめでいいやつなんだよ。小さいころから我が家にいきなりやってきたし、それが自然だと思っていたから。でも、言うておくよ。今度からいきなり入ってくるなって」

「あたりまえ！」

母屋にもこの話をしたら、小さいころからケンチはああだったという。

「愛想なしは変わりないよ。おとなしい子だからね。いい子だよ。今でもいきなり上がって何も言わずにこたつに足をつっこんでこたつの上のみかんを食べるよ」

私は憤然と言い返した。

「E地区の人はどうかという以前の問題で、今の時代には通じないわよ。それがわからないなんて彼は変よ」

「そついうな。悪気はないのだし、ほんと、いいやつなんだから、ゆるしてやってくれ」

義父やトオルとはいいい飲み友達らしい。だからケンチさんはフリーパスなのだろう。でもこの新居は別だ。ここは私の家でもあるのだから。

「ぼくの奥さんは怖いと思われてしまうよ。困るよ」

「私は困らない。あの時は私は本当に怖かったのだし。泥棒だと思っただのだし」

まったく何という習慣なのだろう。私には理解できないことだった。

## 第67話・わらじを編むおばあさん

もうすでに亡くなっている人の話だ。

村に1人暮らしのおばあさんがいらしたそうさ。

90歳になった頃から、もういろいろな人にお世話になったといつて、近在の幼稚園、小学校の生徒たちのために日がな1日、わらじを編んで暮らしていたそうさ。編んだ後、あげる。子供たちが喜んで受け取る姿を見ておばあさんは喜ぶ。いい話だ。

とてもいい人で、当時幼かったトオルも覚えているという。（わらじももちろんいただいたが、どこかへやってしまったそうさ。）トオルは懐かしそうに言う。

「そのおばあちゃん、よく覚えてるんだ。いつも人形を背負っているんだ」

「人形？」

「ほら、小さな子供が遊ぶだろう？口をぽかんとあけてミルクが飲める赤ちゃん人形さ」

「ああ、ミルク飲み人形ね、私も持っていたよ」

「うん、その人形をすごくすごくかわいがっていたね」

「1人暮らしでちよつとさみしかったのかな、でもいい話ね」

「有名な話だよ。そのおばあちゃんに、赤ちゃん元気ですかって聞いてみるとうれしそうに返事するんだ。それから背中におんぶした人形を見せて今日はこの子の髪の毛がのびたから切つてやらなきゃ」とか言うんだ」

「髪の毛ねえ、自分の赤ちゃんを育てたときのことを思い出して世話していらしたのね」

「そうさ、その人形の髪の毛も本当に切っていたんだよ」

「まあ、人形の髪の毛はのびないのに？」

「それがのびたのさ」

「まさかあ」

「本当だ。親父もぼくも見た。村の人も見たはずだ」

「・・・」

「みんな言ってた。おばあちゃんがあんまり人形をかわいがるので、人形に魂が入り込んだのだろう」

「そう・・・」

「モエ、別に信じなくともいいんだけど、人形だって、かわいがってやると生きてくるんだろうな。本当に髪の毛の毛がのびたんだよ」

「ふうん」

「世の中不思議な話はいくらでもある。この話は有名だよ。小さな子供の足にわらじをはかせるとよいからって近くの農家にわらじをもらいにいって、毎日わらじをうって、わらじを編む。いいおばあちゃんだろう？」

「うん・・・」

「人形は誰でも人形だ、と思っていたが、このおばあちゃんにとってはまさに生きた子供だったのさ。だから誰も人形とは呼ばなかった。子供さん、お元気ですか、とか。この子は本当にいい子ですねーって声をかけていたよ」

「ねえ、そのお人形に名前はついていたの？」

「人形の名前か？」

「うん」

「いや、それはつけていなかった。と、思う。ぼくは男だし、そこらへんはわからない」

人形は魂が入り込みやすいと言われるけれども、こういう話なら怖くない。

おばあちゃんの人生の最後を彩ったお人形さん、この世に生まれた甲斐があっただろうと思う。

身体が動く限り、人形をかわいがって、毎日子供たちのためにわらじを編んで・・・、いい人生じゃないか。私も見習わねばならない。

## 第68話・寒さ対策

妊娠による頻尿のため、夜に何度もトイレにたつのが本当につらい。廊下の床が冷たいので、座布団で寢床からトイレへの道を作った。（座布団6枚、とびとびでつなぐ。こうすると足が冷えないかと思って・・・）

本当に寒いので、タオルが少しでも温かいようにと、窓にブラインドもつけてくれた。

「いいか、これから朝起きて、窓を開ける。窓の外と部屋の中の気温がまるで違うから、ほら、

こういうふう窓の溝に水がたまる。びちゃびちゃになるよ。これは結露っていうんだ。だから窓の溝にタオルをうめて、なおかつ結露防止のシートを窓に貼りつけておくんだ」

ブラインドを取り付けるのをまっていたかのように、寒波がやってきた。毎日ものすごい吹雪だ。朝起きると本当に寒い。新聞が8時になっても来ない。（夏には明け方の5時には来てた。）やっときたと思って玄関を開けたら、地面から吹きつけているような吹雪だった。地響きがする吹雪だ。

トイレにたつと床が濡れている。タオルが寝ぼけておもらしでもしたのかと思ったが、どうも違う。なんと換気扇から吹雪が吹きこんでいるのだ。換気扇にタオルを埋め込んでもらう。本当にトイレにいくのも一仕事だ。

妊婦なので尿意が頻繁に出るけれど、我慢すぎて膀胱炎になっちゃうのも困る。薬はなるべく飲みたくないし、お腹の赤ちゃんにもよくないだろう。

結露にもまいった。実家で結露という目にあったことがないので「結露」という言葉すら知らなかった。結露取りや結露防止シートまで存在するのを知らなかった。

タオルにホームセンターのお店に連れて行ってもらったが、本当

に結露のための商品がたくさんある。なんでも押し入れにももし結露して水がでくると中に入れていた布団が全部だめになるという。結露防止の布や敷物をいろいろ購入した。結構な出費になってしまった。

この寒さ、コレからが本当の寒さの本番だという。

雪もやまない。外にも出れない。

寒い寒い村の冬がやってきた。



## 第69話・村の温泉場にて

この村にも温泉がある。冷泉といってそのままでは冷たいがそれを沸かして温泉にしているそうだ。知名度はいまいちだが、一応立派な温泉だ。

私は温泉が好き。寒くなっても入ると湯ざめしにくい。ゆつくりとのびやかな気分になれる。

村の温泉施設があつて「村民」の私は200円で入らせてもらえる。露天風呂もあつて、いいところだ。

ところで、私は我ながら妊婦らしくなってきた。裸になるとよくわかる。

お腹が出て来たのは当然だが全体的に太ってきたのが嫌だ。乳房は大きくなり、乳首は紫色で乳リンというのが広がってきた。まるで巨峰のよう。そして色白なので、赤い血管が広がった乳房に一面に透けて見える。網目模様が恥ずかしい。色気も何もあつたもんじやない。

でも温泉には入りたい。朝の早い時間だと誰も入ってなくて貸し切り状態だ。とうわけで時々入りに行っている。

本格的なスキーシーズンに入ると客でいっぱいになるから、今が行き時？かもしれない。もっとお腹が大きくなり、出産になるとなかなか出歩けなくなるし、今のうちと思つて温泉に行っている。

これで何回目かの入浴だったか忘れたけれど、こんなことがあつた。

男湯と女湯は当然交替になるが、2階にあるお風呂の方が好みのデザインだ。村の山が見渡せるから。

さてその2階の露天風呂に入ったら1人のおばさんが入ってきた。その人は村の人ではないようだった。先客の私に気づくと微笑んで会釈される。

「私は広島から来ました。あなたはどちらからですか？」

村の住民だと言うと、にっこりとされる。

「ここはいいところですね。私はとなりの国民宿舎にとまって昨日は登山しましたよ」

「えー、冬山登山ですか？雪がたくさん積もっていたでしょう？」

「冬の山つていいものですよ。主人と末の息子と3人でね、まるまる1日かけて登りましたよ」

話し好きの人らしくとりとめのない話をされた。

「何カ月ですか？」

「はあ、7か月です」

「楽しみですね」

おばさんは話を続けられる。お風呂にゆったりとつかりつつ話し上手なおばさんにつられて聞きいる。

「私には息子が4人いますね。その前に流産を4回経験しています。もうだめか、と思うこともあったけれど、まだまだ、まだまだと思いましてね。あきらめませんでした。がんばりました」

4回も流産をされたと聞かされてびっくりする。そのあと4回出産したという。

「主人と義母があちこちの神社の有り難いお札を買ってきてね・・安産祈願の札です。ますますプレッシャーがかかって毎日泣いていました。善意でやっているかわかっていてもね、やはりね。つらかったです。でもね、主人があるとき、子供ができるお水があると聞きましてね」

「あ、もしかして、この村にある滝？」

「ええ、今は雪で埋もれて行けません。広島から通いました。観光地でもなんでもないとこでそこがかえって新鮮でした。今もそうみたいです。私達毎週滝のお水を飲みにいったのです」

「それで願いがかなって・・、よかったですね」

「ほほ、1回身ごもってから、はずみがついたようです。4人。立て続けに産みましたよ」

「わあ、すごい」

「さすがに4人目を授かったときはどうしようかと思いましたよ。けど、最初の流産を経験していますから、それを思えば有り難すぎる悩みです。経済的にも苦しかったけれどがんばりました。今はおかげさまで息子は4人とも成人して気楽で幸せな身分です」

お風呂からあがって休憩所に行くと、すでにそのおばさんの夫らしい男性が待っていた。末の息子と言う男性はもう30歳くらいか少し歩くのが不自由そうだ。

「この子は小さいときに大病をしましてね。この子の知能もその時のままです」

私は言葉に詰まった。こういうときはなんて答えればいいのかろう。私は黙り込んでしまった。

おばさんは微笑んだ。まるでこっちの気分はわかりますよ、というふうに。

「・・・上の息子3人は立派に巣立って行きましたが、この子だけは私たちの手元に置いています。いつまでも子供で、やんちゃで・・・ほほほ、幸せですよ」

私は何度もうなづいた。おばさんもご主人も息子さんも私と私のお腹を見てにこにこしている。

そしてここの休憩室でジュースと一緒に飲んだ。身体がぽつぽと暖かい。今日はとってもいい日だと思った。

多分、おばさんとそこのご家族が私に元気と幸せをくれたのだと思う。

### 第70話・葬式その3

老人が多いので葬式も・・順番にくる。義父母の友人も多いので必然的にいろいろな葬式話を聞く・・。

「モエさんや。今日は呼び返しの話をしよう」と義父がおやつの時間に熱いお茶をすすりながら教えてくれた。

「呼び返し」

昔は「よびかえし」といって、死人が出た屋根にあがって死んだ人の名前を呼んで魂を返してもらう儀式をやった。別に名前を呼んだから生き返ったためしは、ない。だけどこれをやることで、残された家族としては死人に対してできるだけのことをした、という仕掛けになる。

でも今はもうどここの家でもそういうことはしない。

ただ迷信はいくつか生き残っている。特に猫に関する話がみんな根強く信じている。

ある家の葬式の時、その家は猫が3匹いたはずだ。猫は死人のそばに近寄らせてはいけない。この話は以前にもしたが、猫を近寄らせると死人が動く、らしい。（よびかえしのときは単なる儀式で死人が動くことはあつてはならない）

で、3匹のうちの2匹は見つかって蔵の中に追いやったが残り1匹がどうしても見つからん。死人が動いたらどうしてくれるんならとみんなで血相をかえて探しまわった話等してくれた。

結局は死人は生き返ってはいけない、生き返ってほしいからよびかえしなどはするけれど、生き返ってはいけないのだ。

一体どういふことが聞き返したいといふかまぜつかえしたくなる話も多いがこういう話は黙って聞くのがいいのだろう。

今日はトオルは宿直で帰宅しない。かつこいう話を聞いて1人新居に戻ると家鳴りというか、変な音がビシパシッと聞こえてくる。

こういうのがラップ音というのか？でも今ではもう慣れた。怖が  
っていたって仕方がないから。

でも今晩はことさら大きい音がするような気がする。

誰か外にいるような気がしてならないので、早めに2階の寝室に  
上がって就寝する。

葬式。避けては通れない人生の大事な行事。いつかは私も見送る  
し、見送られる。大事だからこそみんな大切にしている慣習や迷信、  
儀式がある。土地柄によって違うのもわかるような気がする。

## 第71話・葬式その4

葬式の話ばかりでごめんなさい。

村には過疎らしく老人がやたらと多いので勢い誰それが亡くなられたときの話が話題が多くなる。先日は親戚の人が亡くなってその49日に義父母が呼ばれて供養に行ったそうだ。だから今回のこの話は葬式事態の話ではなく葬式の当事者の話でもない。でも親戚でよばれた人の話になる。

49日は近親者だけで近所の人の手伝いはない。（手伝いを必要だと思った人はお願いするらしい。）

義父母は村内といえども、ひどい吹雪の中を1日外出してこられた。遅いので心配していたが、送りの車が戻ってきたら2人ともおいしいお酒をよばれて（いただいたての意）いい気分でにこにこしながら帰宅した。

そしてモエさん、これといって大きな紙袋をくれた。

中には菓子パンばかり。数えたら20個もあった。どうしたんですかつとびつくりしてたずねたらお返しだという。

分析してみると、クリームパン4個、つぶあんぱん4個、こしあんぱん4個、ジャムパン4個、メロンパン4個合計20個・・・。

「こんなに菓子パンばかり食べられないですよ、母屋でもらって」というと母屋にも20個あるという。

「うちの母屋の分とタオルが出した分で2軒分の返しじゃあ。もらつときんしゃい」

「え・・・」

底の方には白いおもちまである。それと例によって不祝儀でもお赤飯。

折詰もタオルは今日は仕事で出て言っているからタオルの分もといつて法事用の折詰もある。折詰はわかるけど、菓子パンはどうして？

というとお酒で気持ちよくご機嫌うるわしい義父が教えてくれた。「葬式パンじゃあ。昔はこれがおもちだったが今はもうおもちを作るのも時間も手間もかかるけん、パンにする家が多いんじゃあ。ヒツク・・たくさん食べりやあええんでえ」

それでも1軒あたり20個も！賞味期限もあるし、食べきれないよ・・トオルに職場の皆さんにもっていくように明日のおやつにしていたくようにと伝えるとトオルは首をふる。

「いや、今日の法事は村の人だしね。他の人が絶対持つてくる。職場がパンだらけになるぞ。」

冷凍しておけよ。お腹がすいたときにチンして食べるし。

うなづいた私。確かに法事のお下がりならば無駄にしてはもったいない。しばらく菓子パンは買わなくともいいなあ、と思いました。（筆者注：モエさんより。こういう法事が続くと朝も昼のお弁当も晩御飯も菓子パンだったことがあるそうです・・。もつと日持ちのするお煎餅や味付け海苔とかでいいのでは？と思うがそれはよそ者の考えで口をはさむことではないですな。パンはこちらでは村のJAでも入手しやすい山崎製パン、ヤマザキパンの菓子パンが100%の確率で多いそうです。）

## 第72話・烏帽子岩

村のトンネルを抜けたら、大きな岩がごろごろしているところがある。

「烏帽子えぼしの形をしているだろう。だから烏帽子岩っていうんだ」

「変な形ねえ」

「ぼくも小さい頃、そう思っていたんだ。でもおじいさんがそこを通るたびに昔話をするものだから、覚えちゃったんだ」

「伝説があるのね」

「うん。鬼がいたんだ。人間の帽子をまねようと、岩で烏帽子を作ったのはいいけれど、頭が大きすぎて入らなかったんだ。それで癪さくをおこした鬼が川に放り込んだのさ」

「人騒がせな鬼ねえ」

「うん、誰かが烏帽子に似ているからってこの話を作ったのだと思うよ。そんな大きな頭をした鬼がいるはずもないさ」

「そうね、いるはずがないわね」

「だろ、大体このあたりは鬼の伝説が多いけれどさ、村の山にだって鬼が相撲のけいこをしたという岩があるし、考えてみればおかしいよな」

「田舎っぽい昔話ね」

「キツネ話も多いし」

「誰かが化かされて、というありきたりのパターン！もう聞きあきたわよね」

私達はさんざん昔話をばかにした会話をした。

・・・それではちがあたったのかもしれない・・・

その帰り道、ちょうど烏帽子岩を通りかかった時だ。急にエンジンがきれて車が止まってしまった。

トオルがあわててエンジンをふかす。でもかからない。車が走ら



ない。

「どうしてえ？」

暖房も切れて寒くなってきた。冷えてきたのだ。おりしも山の中、国道とはいえ、もう真つ暗闇だ。こういう時にかぎって車一台通らない。

「困ったわね、携帯は？」

「持っているけど、ここは圏外。通じないよ」

「ええっ、どうするの？ねえ、どうするの？」

「誰かが通るまで待つしかないよ。モエ、ぼくのジャンパー貸してやるから、お前は身体を冷やすといけないから」

「うん、ありがと」

私達は黒くそびえてみえる烏帽子岩を眺めていた。いつもよりこころなしか大きく見える。

私達は暗闇の中ライトの明かりで薄黒い岩を見つめていた。川の流れがやけに大きく聞こえる。私は急に不安になった。トオルが身体を堅くしたのだ。

「ねえ、どうかしたの？」

「岩が動いている・・・、ように見えない？」

「ええっ」

「地震かな・・・？たつた今、ぐらぐらと動いたように見えた」

「そう？私は感じなかったけれど、」

「うん、気のせいかな」

でも私は口をつぐんだ。トオルがすごく緊張していたからだ。

結局あの後、すぐに通りがかった車に応援を求めることができた。幸い村の人だったので、トオルの顔もご存じで話しもうすぐついた。村のガソリン屋さんがまだスタンドの中にいて帰宅されていない。だったので、直接こちらにきて車を見てもらえたのだ。

なんでもゴムのベルトがかたくなっていたらしい。そして急にそれが切れたらしい。事故にならなくてよかった。

修理には30分かかったが、無事動いた。

修理の間もトオルはちらちらと後ろを振り返る。もう真っ暗でどこで川か岩かもわからないが、烏帽子岩を気にしているのはわかった。

ようやく無事に新居に帰りついてから私はトオルに聞いてみた。

「烏帽子岩でしょ、ねえ、どうしたの？」

トオルは大きく息をついた。

「うん、おれ、悪口をいったからな。ばちがあたったんだよ・・・」

「そんなに怖い岩なの？崇られたの？」

「いやあ、偶然にしてもなあ、でも何度も岩が揺れていたように感じてなあ・・・あのへん、ちょっと君が悪いなあ」

ちなみに地震はどこにも起きていなかったそうだ。

だから結局何でなのかはわからない。

### 第73話・すべるハナシ

1 晩で30センチも雪が積もった。寒い。

トオルは朝早く起きて雪かきをした。でないと出勤のための車が出せないからだ。除雪車も出勤していた。ブルドーザーの小さいので雪をかくためのだけの車だ。村の職員が動かすという。

雪かきをしている音を聞きながら、私は凍った窓から外を眺めていた。

お腹も赤ちゃんは昨日あたりから動き始めた。胎動だ。私はお腹をさすりながら、つぶやく。

「冬が始まって、終わって……。それからあなたは出てくる。私の赤ちゃん！はやく会えるといいね」

母屋の義両親も実家の両親も、身重の私を気遣ってくれる。

「あれするな、これするな」

つわりはまだあって、からだがだるく何か目新しいことをしたいという気力も出ない。それでも郵便局ぐらいまでは外出できる。

幸い今日は雪もやんだ。なので運動も必要だと、ゆっくりと徒歩で行くことにする。

ところが、すべる、すべる。道が凍っている上に、雪がさらに積もったので一番すべる状況らしい。また屋根の下をつたって歩くのも、雪がどつと落ちてくる可能性もあり、これも危ない。

そっというわけで私は外出をあきらめた。

どこへ行っても命が危険だ。

「気をつけなせえ、気をつけなせえな」

義母はくどいほ注意する。顔を見るたびに言う。よほど危なっかしいことをしでかしそうな妊婦に見えるのだろう。

でもたまには買物もしたいな。

でも義母は買物も危ないから買ってきたと勝手に私達の新居分まで買物をしてくる。もちろん善意からきているのはわかる。

でも、私はそれがイヤ。

くれたものはお豆腐、納豆、それとお手製の漬物におみそ、キャベツ大根玉ねぎ……。おまけにかぶの煮つけを鍋ごと全部と、大皿に入れられた大量のおでん。

あんまりうれしくなかった。

だって今日の晩御飯は缶詰のミートソースを開けてスパゲティにするつもりだったからだ。ああ、スパゲティとかぶの煮つけはあわないな。

罰あたりの恩知らずの嫁と思われるだろうが、はつきりいつて義母の好意は有難迷惑だった。買物に行けないなら行けないなりに、工夫するという楽しみがある。大きなお世話とはこのことだ。

洗濯もいっていつているのに、持つて行って母屋でしようとするし、掃除も楽しみもしていないのに、勝手に玄関を掃いていく。

「すごいありがた迷惑です」

その一言が言えないのがつらい。

敷地内別居は敷地内同居と同じ。

同居と同じ！

ちよつといらいらしている私。若い夫婦だけでやっていきたいというのが、どうしてもわかってもらえない。お願いだから義母は干渉しないでほしい……。

## 第74話・見立て

またまた葬式があった。今度は家の近くではないので、テゴ（お手伝い）には行かなくてすんだ。トオルの上司の息子さんが車の事故死されたそうだった。

昨日の明け方、国道のトンネルのそばで車が滑って大破、即死だったそうだった。相手はなく自損事故だったというが目撃人はいず、警察の見解でそうなったらしい。

この村で生まれ育った青年で21歳だったという。結婚はされていて、今年生まれたばかりの女の子がいるそうだった。運転も上手な人だったのに、となり村の温泉で飲み会をして明け方までお酒が抜けるように休んでいて、その帰りだという。

一服はしていてもお酒が残っていたのではないかと、それでもないとあんな見通しの良いところで事故を起こすはずがない、というのがみんなの意見だった。

私とは面識はないが、まだ私よりずっと若い奥さんの方は、J Aなどで出会ったりしていたので顔は知っている。いつも赤ちゃんを抱っこしていて笑顔のすてきな人だ。お気の毒としかいいようがない。

トオルも母屋も今回は「見立て」ぐらいは行ったほうが良いという。私もそう思う。（今回は家は離れているのでテゴという手伝いはしなくてよい）

「見立て」というのは、霊柩車の見送りのことを言う。

お坊さんがお経をあげはじめ、終わりのころになると鐘を鳴らす。その鐘が鳴りだしたら、家の周りに人が集まって読経を聞く。鐘を鳴るのを聞きつつ霊柩車が出る。人々はその霊柩車に頭を下げて死者の見送りをするのだ。

鏡を裏返して下着に忍ばせ、私は義父とトオルにはさまれて「見立て」に立つ。鏡の意味は死者に群がる悪いモノを避けるためとい

う意味らしい。私が妊婦のため、赤ちゃんに影響が出ると困るというのだ。葬式にいったぐらいで、妊婦はそんな悪い靈魂？に出会いやすいというのだろうか？

でもそういう話を信じている義母が大変に心配して鏡をくれたのだ。ちゃんと裏返しにしてポケットに入れたか、と何度も聞くので閉口した。（でも私もだんだん心配になり、言うことはちゃんと聞いて鏡を裏返しにして参列しました）

見立てに出たまわりの人々の話を聞いていると（霊柩車が出るまでの鐘の鳴っている時間が結構長いので会話をしているもそれはいいらしい。霊柩車が出たら見えなくなるまで見送るときは会話してはいけない）亡くなられた当日は晴れていて凍結していたらしい。凍った橋の上のカーブをスピードを緩めずに走っていたのではないかと言ううわさだった。車は1回転して止まったが大破して本人は胸を強く打って即死だったらしい。

「・・・まあ、苦しまなかっただけマシだろう」

「即死だって、」

「奥さんが気の毒だな。まだ若いし、同居だし、この葬式が落ち着いたらもう実家に帰るわな」  
ヒソヒソ・・・。

残された赤ちゃんとお奥さんがお気の毒でご遺族の顔なんか見れなかった。

遺族の行列にきらびやかな葬式の飾りが目につく。葬式飾りはこのへんでは笹の葉に色紙で作られた飾りをいう。これは常会の男性の仕事だという。私はいつも手伝いと言えばテゴといってご飯の炊きだし役だからこういうものか目にするのはこれがはじめてだ。

いろいろな葬式飾りがあったが、ゆっくり鑑賞するものではない。珍しいらしいが、それよりも寒い。雪こそ降らなかったけれど、寒い。1時間も立ったままお坊さんの読経を聞いてつらかった。

これが「見立て」だった。「見立て」が死者への「お見送り」になる。

私達は無言で見送り、神妙な面持ちで帰途についた。

留守番をしていた義母は部屋を温めて、妊婦の私を気遣ってくれた。そして裏返しにして入れていた鏡を私から受け取るとそれを神棚にあげておがみ、塩をまいた。

その晩、私は夢を見た。

トオルがどうやら事故死したらしい。

新居の裏のお墓が人でいっぱいだ。私はすでに子供を産んでいるらしく、喪服を着て子供の手をひいている。見立てに来てくれた人がお墓までついてきて言う。

「トオルくんは、凍結した道なのに、めいっぱい車のスピードをあげてガードレールにぶつかって事故死した」

「とんでもない！」

私は叫んだ。跳び起きて目を開けると私は涙を流していた。トオルが心配そうな顔をしてのぞきこんでいる。

「大丈夫か、うなされていたぞ」

凍結した道の怖さを知った葬式だった。

## 第75話・買い出し

寒波がやってくる。私達は大雪に備えて県外の大きな商業施設に買い出しに行くことにした。

車の事故現場を通らなくてはいけなくて気が進まなかったがここを通らないとどこにもいけない。そういえばこのあたりの国道はあちこちお地蔵さんが立っていて、お菓子や御花が供えられている。今は雪に埋もれてみえないが、先日の葬式でやっとういうわけで事故が多いのだとわかった。お地蔵さんの意味もわかった。

国道ではたぬきが死んでいることも多い。

トンネル付近は創設の工事中から何らかの事故が多かったという。村のトンネルは真偽はともなく幽霊話もあるところだけれど、幽霊に関しては私は出会ったこともないし、通らないと村から出れないし、もう行ったり来たりには慣れていた。

結局は何もなかったのだし。

それよりもお豆腐や肉類を買いこんでおきたかった。時刻は昼過ぎ、お天気を読み取れる義父に時間を決めてもらう。それと忠告ももらった。

「雪が降ってきたら危ない。でも雨が降ってきたら大丈夫。くれぐれもスピードを出してはいけんぞ。特に坂道ではブレーキを踏むな。タイヤがすべるぞ、車がまっすぐにすすまなくなるぞ、ブレーキは絶対に踏むな」

義母は心配そうだ。

「モエちゃん、あんたそんな身重の身体で行かんでも。村の農協に行けば売ってるけん、村で買いんさい」

うーん。農協は定価販売だし、品物が限定されてくる。私は品物が豊富なところで選べる買物がしたいのだ。適当に聞き流してさっさと身支度していくことにした。



晴天でこころなしに暖かめの日だ。寒いことは寒いんだけど。念のためスピードを落として慎重運転を心掛ける。

無事到着し、楽しい買物タイム。バーゲンしていてトオルの防寒ジャンパーも安く変えた。ほくほくしての帰り道。

山の中の新居へ戻るその緩やかなカーブの続くあたり。そこで雨が激しくなってきた。雪ではないのでその分暖かくなったのだろう。霧も出て来た。私は速度を落としてライトを煌々つけて運転する。人影・・・。

花束。

大量の花束！に気付く。

あっと思つて思わず車を止めてしまった。

多分そこが例の事故現場だったのだろう。車が2台、止められていた。事故現場に遺族の人が御花を供えに来られていたのだ。

私はそろそろと車をすすめる。それにしてもびつくりした。

トンネルに近づくにつれて霧が晴れてきた。この辺りは本当に天候がめまぐるしく変化する。

私は例のトンネルで人影を見た。

手を振っている。どうやらエンストかなにかを起こした人らしい。どきつとした。幽霊かと思つたのだ。そろそろと車を徐行して止める。ハザードランプもつけておく。エンストを起こしたらしい車には若い男性が乗っている。携帯電話が通じないし、困った、困ったと言つておられる。

「あのう、公衆電話ならこのトンネルを抜けたところにありますよ。入口が雪でふさがっているけれど、使えるはずですよ」

「うん・・・、今友達が歩いて電話をかけにいますから、どうも」

確かに前方に男性が歩いている。横目に見てトンネルを抜けた。後ろに小さな子供と母親らしき人が手を引いて歩いている。その人の連れだろうか。

峠のトンネルに出てくる母子の幽霊話を急に思い出して背筋が寒

くなくなった。考えてみれば何も不思議はない1日なのに、妙にびつくりさせられた1日だった。疲れた。  
でも！買い出しは成功だ。当面、食料には困らない。

## 第76話・大雪

その日の晩から雪がまた降りだした。

義父の天気予報が見事当たった。

「テレビでいう天気予報なんかアテにならんわ。県南がメインだからここらあたりの天候は言わないしな。県北部中心の天気予報もこの山の中まではあたらん。天気自体がまったく違うしのう」

特に降雪予報が違う。このあたりでは雪が多いから。県南ではほとんど降らないし。（だから暖かいところというイメージがあり、大雪で困ったというと県外の人に驚かれたりする）

「じゃあ、天気予報を見てもしかたないですね」

「参考にするとしたら、北陸の地方かのう」

「新潟県とかですか？」

「いや、金沢じゃ、金沢が一番似ているから」

とりあえず寒いので毛布をもう一枚余分に出して暖房を「強」にして就寝。

明け方タオルに起こされる。

「ほうら、見てご覧、すごい雪。雪国だよ」

窓を開けると一気に部屋の気温が下がった。

真っ白だった。窓の結露が凍っている。

牡丹雪がちらちらと降っている。2階の寝室から母屋の屋根が見えるが、そこも真白である。1晩で真っ白な銀世界になったのだ。

「わあ、寝ている間にこんなに積もったんだ」

「すごい降りだったよ。今日も1日降り続けるだろうな」

「そうかあ、冬がきたんだなあ・・・」

タオルは汗をかいている。

「あれ、暑いのに」

「暑い？当然だ。ぼくは駐車場の雪かきをしていたんだよ。でないと出勤できないからな」

「あらあ、雪かき」

「きみがグーすか寝ている間にひと働きしたんだよ」  
「ぼぼぼぼっという音もしている。」

「あっちの窓を見てご覧」

「あの音は何？」

「親父が除雪機を操作している。家庭用の雪かき機だ。母屋の庭を  
はいでいるのさ」

「おもしろいように雪がはじかれるのね、初めて見たなあ」

「うん、でもアレは危ないからモエは近寄るなよ。高速回転して雪  
をよけるから金属もはじかれるし人体だと切断されてしまう」

「そう？怖いわね」

「あれを使うのも結構体力いるんだよ」

その日はやはり1日雪が舞っていた。静かな1日だった。私は部  
屋をがんが暖めゆつくりとイラストを描いたり読書をして過ごし  
た。

母屋へ行くと義父は上機嫌だった。

「この分ではスキー場ではもっと積もっているぞ。スキー客がたく  
さん来てくれるぞ」

スキー客がたくさん来るほど村が潤うのだ。スキー客が落として  
いつてくれる食事代、リフト代、温泉入場料、遠方から来られる人  
なら宿泊費やガソリン代等。

母屋は昔スキー客のために民宿もしていたそうだ。だからこうい  
うことには敏感だ。私は義父の会話で改めてこの村は知名度低いな  
がらも観光地だったということを思い出した。

## 第77話・お歳暮

お歳暮の季節がやってきた。

トオルが適当でいいから職場の上司や親せきに何か送っておいてくれと言う。

適当でいいといわれても、何が一番いいのかわからない。それにまだ結婚式でしか会ってない人だとこの家とどういつながらがあるのかもよくわかってない家もある。

ま、適当に、ということで、自分がもらってうれしいお菓子等がいいだろう。

義母にそれをいったら一番いいのは「酒」じゃと断言する。

「お酒ねえ・・・」

でもトオルが私に選択をまかせてくれたのだし、私はおいしいチョコレートの詰め合わせをお歳暮用にと通信販売で申し込んでおいた。

チョコレートにしたよ、というとトオルは絶句していたが、まあ、よからうという。

「なあに、その顔は？ やっぱりお酒の方がよかったの？」

「いや、たまにはチョコレートも毛色が変わっていいだろう。子供がいる家も多いし」

「そうだ。モエの実家にはチョコレートはだめだからね。ぶりだからね」

「えっ？ あの魚のぶり？ なんで、」

「なんでって、そういうきまりなんだ。大きいのを丸ごと1匹頼まない。今度市内へ出て中央卸市場に頼みに行こう」

「ぶり、ねえ」

「このあたりではお嫁さんをめとると、その年の暮には婚家（嫁ぎ先）から実家へ新客するといって、ぶりを贈る習わしなんだ」

「ふうん、じゃあ、実家の父にいつておくね、ぶりが行くよって」

それから母屋にこの話をする。と義父がもつと詳しく教えてくれた。  
「昔は今みたいに宅配便なんかなかったからな、大きなぶりを丸ごと1匹買つてそれを縄で綺麗に模様網でくるんでふちどつて持つて行つたんじゃ」

「縄で綺麗な模様網つてどんな模様なんですか」

「いやいや、それはわしらの父親の代までの話じゃ。今はその特殊な編み方はもう誰もできんじやろ」

「あとう、お義父さんもできないですか」

「わしにもできん、でもどんな模様だったかよく覚えてるよ。網の模様で魚の皮が見えないようにするんじや。嫁をめとるときだけのしきたりじゃけえ、そう何度も見れるもんじやねえ。すたれるのも当然かもな・・・」

そう義父もできない。この習わしはすたれてしまったのだろう。となるとどんな模様だったか見たくなるが、写真にも残っていない。そうで、もつたいない話だ。

その分、新しい習慣もできた。便利になった。遠距離結婚ができたのも、交通が便利になったからだ。そうでなければ大都市にある私の実家から、この寒村に嫁ぐこともないし、それ以前にトオルとも知り合いになれなかっただろう。

由来がわからないながらも、ぶりを贈るというちゃんとしきたりを守ってくれるトオルに感謝している。

その日の晩も私の赤ちゃんが元氣にお腹の中で動いてくれた。

## 第78話・お餅つき

妊娠8カ月。誰が見ても妊婦だとわかるようになってきた。

くしゃみをするごとに少量だが、おしっこが出てしまう。まだつわりもある。ブロッコリー、イカ、温めた日本酒の匂いがだめだ。細かい泡のついたつばが良く出る。

カゼをひきたくないのも、ものすごい厚着をしている。

ブラジャー、スリップ、毛系のチョッキ、毛系のベスト、マフラー（家の中でも巻いておく）、その上に厚手の毛系のとっくりセーター着用。

下半身は下着の上に毛系のパンツ、腹帯、その上に毛系の腹巻き、とどめに厚手のフリースのズボン。

ここまで厚着を重ねていると、見た目もあつたもんじゃない。ただの太ったおばちゃんだ。髪もぼうぼう。美容院に行きたいが、こんなに寒くては外出もおっくうになる。第一車を出すのに、雪かきをしないと出れないし。面倒だ。

ふと自分の全身を鏡に映して、自分にびっくり。見苦しいこと、この上なし。

座り切りでイラストの仕事を細々とこなしてばかりで運動を全くしない。気がつけば妊娠前より10キロ増し。

検診時には毎回医師に怒られている。太り過ぎると妊娠中毒になる可能性が大きくなるからだ。適度に運動は必要だが、寒過ぎて外出したくない。

何となく鬱々とした毎日であるが、とうとう今年も終わり近くなってきた。母屋からこれから正月用のおもちをつくから手伝えるなら手伝って、といってきた。

トオルも有休をとって手伝うと言う。

聞けばこれは毎年の恒例の年末行事だそうで、今年取れたもち米をおもちにしてお供えする。また多目に作って大勢の親戚やまた今年から私の実家にも贈るといふ。

母屋に入ると、お米を炊く匂いで充満していた。無理のないように力仕事なしでおもちを丸める手伝いだけさせていただく。

このあたりのおもち（お供え餅）は、実家あたりのものとは違い、すごく薄い。つまり厚みのないおもちである。煮汁に放り込んで食事をすることが多い土地柄のせいだろう、薄べったいおもちにした方が早く煮えるのだ。

最初の臼でお供え餅を作る。臼といっても昔ながらの杵つき臼はみんな蔵の中。今の臼は電気で動く。ウーン！

でもお供え餅の順番は昔と変わらない。神様、庚申様、かまど様、仏様という順番になるそう。

そして最後の方に、というかそれからが本番で、親戚たちに送る分、最後に家族が食べる分。

牛を飼っていたときは、最後に牛たちに食べさせるお餅もついたという。

くず米にホウコというものを混ぜると牛餅というものになる、らしい。

「まあ、今はどこもそういうことはせんけん。昔は餅搗きも朝早くから一日仕事で、活気があったけん、」

義父と義母はこのときだけ、さみしそうな顔をした。



## 第79話・スキーの話し

村には村の高原のスキー場がある。

だから村の子供たちは、小さいときから雪に親しんでいる。当然幼稚園から授業や遊びにスキーが入る。スキーは滑れて当たり前土地柄だ。

こんな教育環境なのに、村で生まれ育った私の夫のトオルはスキーを全くしない。

かく言う私もスキーはしたことがないが、それでも妊娠していなければ、きっと挑戦していると思う。

それなのに、それなのに。トオルはこれから先も絶対にスキーはしないという。

「ねえ、どうしてスキーをしないの？ 弟さんなんか、スキー大会で3位になったこともあるというのに」

「あれは小学校の村の大会での話だよ」

「ねえ、トオルはどうして滑れないの？ スキーの授業のときはどうしていたの？ 一応は滑れるのでしょうか？」

トオルはうなづいた。

「うん、確かにぼくは滑ろうと思えば滑れるよ。でもあることがきつかけでスキーはやめたんだ」

トオルの口は重かった。こういわれるとかえって興味がわいてくる。

「ねえねえ、何があったの？」

「いや、ぼくが中学校3年生ぐらいの頃の話だけだな」

「なになに？」

それはこういうことだった。

村は過疎だから生徒数は少ない。それでもトオルが中学生のころは1年生から3年生まで60人ぐらいいたそうだ。3年生は21人。

苗字の順番で言えばトオルは6番目だったそう。

「それでな、3年生は中学最後のスキーシーズンだろ。ぼくも高校から村を出て下宿して高校に通うことになってたから村をでなくてはいけない。だから本当に最後だろ？」

みんな幼稚園からスキーに親しんでいる。最後のシーズンで張り切っていたのに、クラスメートが次々に怪我をするんだ」

「怪我？スキー場で？」

「そうさ。最初のヤツは足の骨を折った。その次が女の子で足首をねん挫した。」

その次が親指を突き出して骨折。それが全部出席番号順だ。3人目が続いたあたりで、これって順番だよな・・順番に怪我しているよなって、話題になってきた」

「確かに、ちよつと気味が悪いわね」

「だろ？でも偶然だと思うだろ。そしたら4人目と5人目が、ペアでリフトに乗っていて、一番高いところからそろって落ちたんだ」

「うわあ」

「ひとりとは脳しんとうを起こしたくらいですんだ。もうひとりは背中を骨折した。命には別条なかったけれど、長いこと入院していたよ」

「で、6番目がトオル、あなたね・・」

「うん、ぼくこわくてね。スキーの授業を受けないことにしたんだ。先生に怒られ、親父にも怒られ・・。いろいろ大変だったけれど、それからすぐに卒業になったし」

「で、7番目は？どうだったの」

「いや、そこで事故は止まった、止まったんだよ」

「変な話よね。偶然だろうけれど」

「でも言われたよ。トオルがスキーをやめたから、あれが止まったと」

「そうだね」

怪我が原因でスキーをやめる人はいるが、トオルのような理由で

スキーをやめた人はいないだろう。不思議な話だ」

「だからぼくはこれからもスキーはしないし、したら怪我しそうで嫌なんだよ。そこまでしてスキーしたいほど好きでもなかったし。これでいいんだ」

トオルは真顔でこんなことを言った。

「・・・モエがスキーをはじめたら、次は君になるかもな、ま、冗談だけど」

「・・・」

私は産後スキーをするかどうかで、今から悩んでいる・・・。

## 第80話・お正月の準備

村ではじめてのお正月を迎える。

クリスマスをすませば（ここではクリスマスは祝わなかった。クリスマス気分も、村の役場に小さなイルミネーションがついただけしよばい）あとは正月準備をするだけだ。

義父が30日にしめ縄を作った。

私の実家では全部スーパーで購入していたが、こちらでは義父の手作りである。材料のわからして、母屋の義父母の田んぼからとったものである。

実家のしめ縄は、横長だが、こちらでは縦長だ。

義父はわりに、つばをつけて丁寧にシュルシュルと言う感じで両手でわらを上へ上と練り上げる。それをしめ縄を仕上げとしてホンダワラという海藻の一種をつけ、みかんもつける。

いたってシンプルだ。

地方地方へ行くとやっぱり違うものだ。

母屋は神道の家だから、おもちの他、山の幸も供える。（山の山の田舎のせいもある）

山で採れた、ごぼう、ニンジン大根ずいき、まめ、きゅうり、ほうれん草、みんな自分たちで作った作物を供えるのだ。

三宝という台の上に半紙を折りたたんで形よくのせ、白い生米をばらつとまき、その上にお供え餅をそつとのせる。これも私の実家ではない作法だ。

これと並行して大掃除をするのはどこも一緒だが、腰をかがめる拭き掃除は大きなお腹がつかえてつらかった。だから掃除機をぶいぶいいわせてすませてしまった。

大みそかでは年越しそばを食べるが、このあたりではいわしも一緒に食べないといけない。年越しいわしという。

食べたいわしの頭は捨てないで、竹の串に刺し、ひいらぎの葉をつけて玄關にさしておく。これは年中飾っておかないといけない。魔よけになるそうだ。

この村に来て初めてのお正月。私にとってはめずらしい習慣がいろいろあった。

## 第81話・ウサギ

猟が解禁になったとかで、義父の知人の猟師さんがウサギを1匹くださった。

あのかわいいウサギである・・・。

「あんた、初孫ができるんじゃないが。トオルのお嫁さんに食わせてやれやあ」

有り難いお申し出である。

でも、あのかわいいウサギである。

肉類は好きだがウサギなんか食べる機会がなかった。

「メスウサギだそうだ。オスよりメスの方がうまいといわれるけど、よかったのう」

義父が目をはそめた。こわごわと生のウサギの肉をのぞいてみたが、すでに解体されて細切れになっている。こうなつてくると普通のスーパーで見かける肉とは区別がつかない。

「煮くいじゃな。もちろん、たたきにしてもおいしかろうが、寒いからやつぱり鍋じゃ」

義母がいそいそと支度している。

「少し取っておいて、たたきにもしておこうや」

ウサギのたたきとは驚くが、お肉を念入りにたたいたあと、炒り大豆と焼いたみかんの皮を混ぜてさらにたたく。大豆はつなぎで、みかんの皮は香りをよくするためだそうだ。

義父は気長に2、3時間はたたいていただろうか。

「わしの小さい頃はよくこれを手伝わされたもんや」

義父がこの寒いのに冷酒をなめながら、上機嫌で説明してくれる。「昔はじいさんも、このわしも鉄砲をもっていたけんの。ウサギはうまいぞ。それにこれは捕れたばかりじゃ。ちゃんと血抜きとガス抜きをしたけんな。ちよつと小さめで目方が1キロしかなかったが、身がしまっているけん、こいつはうまいぞお」

煮くいの作り方はすき焼きと全く一緒であった。大根、ねぎ、牛蒡に春菊、エノキ、白菜に。こんにゃく、しめじ、焼き豆腐。ウサギの肉はおいしかった。

たたきはみかんの香りがして、思ったよりはくせがなかった。ウサギには気の毒だが、私達は十分に堪能させてもらった。

## 第82話・大日如来

雪がやんだ。

たまには美しい雪景色を見ようと、タオルがドライブに連れて行ってくれた。

村内ドライブで、実はいつも気になっている場所が1つだけあった。今日はそこへも連れて行ってもらう。

小さな村道に何かがずらっと並んでいる。今日は雪に埋もれて全景が見えないが、お地蔵さんらしきものであつて、お地蔵さんではない。

前を素通りするばかりだったが、今日はタオルにこれは何なのか教えてもらった。

「あれは全部来日如来さんなんだ」

「大日如来？」

「ぼくもよくは知らない。大日如来ってえらいんだろう？それがずらっと並んでいる。ダムとかで水没するような土地から全部もってきてここに埋め替えたといっていたから」

「ふーん」

私達は車から降りて雪の中を踏みしめてよく見た。

大小いろいろあるが、どれも私の膝の下ぐらいの高さしかない。大きさはばらばらである。雪に完全に埋もれているものもあった。

「確かにどれも大日如来と彫られてあるわ」

「だろ？」

「あ、あれ。馬頭観音・・・、ばとうかんのん、って読むの？」

「うん、1体は大日如来と並べて馬頭観音と彫られているな。これって死んだ牛や馬の霊を慰めるためにあるらしいよ」

「へえ、牛や馬・・・、村では確かにたくさん飼っていたというわけね」

「村人たちは同じ家の中に、土間をはさんで、牛や馬と同居してい



たからね。現に母屋もそうだったし」

「ふうん」

「何で大日如来かっていうんだろ？馬頭観音はわかっていてもな」

「うん、どうしてなの？」

「大日如来は確かに一番偉いんだ。昔の人はちゃんとわかっている。牛や馬なしでは村人は生きていられない。だから家畜が死んだら、手厚く供養したんだよ。その現れだろう。よその立ち柄では為死牛馬、と書かれているだけだったりするが、ここらあたりだけは違ふようだ」

「愛情の現れ・・・？なんだかわかるような気がする」

私は何と言っているのか思いつかない。

昔の人が真剣にお祭りしていた大切なものに向かって、私が口をはさむことではない。

でも丁寧にまつられていた様子がうかがえる石碑群の前に、2人で手をあわせた。今度はお供えに、にんじんでも持って行こうかな。

### 第83話・大黒様&向こう大黒様

母屋の大黒柱は真つ黒な色をしている。築100年は建っているから当然だ。いつもそこには注連縄しめなわをはっている。

これは年に1回だけ、お正月に取りかえるのだ。家の中で一番大事なのは、この大黒様だと義父は言う。こちらでは、大黒柱のことを大黒様、だと言うのだ。知らなかった。七福神の大黒様とはまた違うらしい。

だが、事実大事にされている。義父は重々しく言う。

「これは信仰の対象にもなっているんだぞ」

「はあ、家内安全、ですね？」

「そうじゃ、モエさんはかしこいのう」

お酒を飲みながらだと、義父は機嫌よく、昔話をしてくださる。

「どこの家でもそうじゃが、大黒様の根元には1個の甕かめがある。埋め込んであるんじゃないよ。さて、この中には何があると思う？」

「甕、ですか？じゃあ、小判とか？」

「いんやいんや、マルハガネじゃ」

「マルハガネってなんですか？お守り？」

「まあ、そうじゃろう。根元に完全に埋め込まないで、神棚に供えている家もある。いろいろじゃがな」

「それで・・・マルハガネってなんですか？」

「早い話が鉄のかたまりじゃ。丸い鉄。

この村の山には良質のたたらが取れたけん、製鉄していた。一番よいハガネを取ってお守りにしたのじゃ」

「へええ・・・」

「大黒柱と言うが、この村ではみんな、大黒様と言う。七福神の大黒様と違って、文字通り、大黒柱の大黒様じゃ」

「大事な柱だからでしょ」

「そうじゃ。そしてその対面には、向こう大黒様がいる。これも大

事な家のお守りじゃ。大黒柱がなかったら、家はどつしりと構えてはおれんからじゃ」

「それで注連縄とかはったり、お水を供えたりされているのですね」  
「そうじゃ、そうじゃ」

義父は昔話をよく知っており、私にわかりやすく教えてくれる。

私は母屋の大黒様と、向こう大黒様を見た。

真つ黒に黒ずんでいて、威厳がある。

柱にひびが入ると、不吉の前触れ。

曲がると、絶家の前触れ。

ささくれると、怪我の前触れ。

などという、言われがあるそうだ。

土間の大黒柱をはさんで、昔はどこの家でも牛や馬と接して、一緒に暮らしていたという。

大勢の家族に雇われ人、毎日のように続く田畑の仕事、山の仕事、みんな人の手で培われていた。

今はなんでも電気やガソリンで、動かせられる便利な農具があつ

て、年老いた義父、義母の2人だけでも十分に農家の仕事ができる。

「昔はなんでも活気があつてよかったのう。もちつき1つでも、近所の子供たちが遊びに来たりして、そりやお祭り騒ぎだったのに」

義父はちよつとさみしそうな顔をした。彼は村で生まれて村から出たことがない。それでも義母が楽しそうに言う。

「モエちゃんが次々に赤ん坊を産んでくれたら、この家も元通りじゃ。にぎやかになるう。大きくなったら、畑の仕事も手伝ってくれりようが」

義父は大きくなった私のお腹を見て、微笑んだ。

お二人ともそりゃあ、お腹の子供の誕生を楽しみにしている。

大黒柱も待つていてくれるだろうか。次々と子供が産めるかどうかはわからないが、とりあえず、まず、1人目だ。

責任重大なんだ。

## 第84話・お正月を迎える

大みそかになった。

大阪に出て働いているトオルの弟さんのジロウくんも里帰りしてきて、母屋はにぎやかになった。義父母は2人しかいないけれど、子供が揃って正月を迎えるのでうれしそうだ。

床の間には麗々しく、天照大神の掛け軸が下がり、いつも飾っている牛のコンクールの入賞メダルは押し入れに追いやり、いろいろなお供え物を飾る。

大みそかの真夜中に村の神社にお参りした後、私達は順番に床の間に行く。

掛け軸の前に置いてあるお神酒を一杯ずつ飲む。そして干し柿とみかんを1個ずつもらって居間に戻る。

家庭内でも床の間のお参りの順番と言うものがある。

まず、義父、義母、そして長男のトオル、その次は弟のジロウさんかと思いきや、長男の嫁の私になるという。義父はこういった作法にやかましく順番をきっちり決める。

私がジロウさんの前にお参りしている間、ジロウさんもきちんと正座して私の後ろに控えておられた。

こういう改まった感じのお正月は私の実家ではあまりしなかったので、ちょっとびっくり。そして新鮮だった。私はよその家にお嫁にきたんだなあ、とつくづく思った。

こういうときでなければ、私達は恋愛結婚だから、家の嫁という立場を意識しないのだ。

さあ、お正月だ！

おせち料理に餅入りのお雑煮。

ごぼうやにんじん、大根の醤油煮、こんにゃく、そしていわしの佃煮等。

お雑煮はおすまし汁に、別の鍋に煮ておいたお餅を入れる。

口当たりが良いといって、トオル達はお餅を3個一度におすまし汁に入れてぺろっと食べたりする。

私には1個が精いっぱいだった。正直言つとお餅を食べるとすぐにお腹がいっぱいになる。

お昼御飯のメニューも決まっていて、とろろ汁とみそ汁を併せたものをすることになっている。お雑煮は土地柄によって全く違うという。実家では白みそのお雑煮だったからおすまし汁タイプのお雑煮はめずらしかった。

同じ日本でも違うのだ。

まらの1軒、1軒でも、お雑煮の味は微妙に違うという。材料はみんな、家の畑で作ったものだ。お味噌もお米もお餅も、お供えのお野菜もお漬物もみんな。みんな母屋の義父母の手作りだ。

こじんまりとしたよいお正月だった。

こういつた行事食は、私も義母にきちんと習わないといけない。そして次の世代に伝える義務があるだろう。

## 第85話・流しのお店

雪が常時70センチ積もっている。降らなくとも気温が低いのでいつこうに解けない。

こう雪が深くなるとどこにも行けないし、身重の身体では家の中を動くのもおつくうな時がある。でも体重が増えて来た。つわりがなくなったとたん、際限なく食べてしまうようになったのだ。食べつわりというそうだが、それはそれで困る。

今では10キロ増加。ちよつとは運動しないといけない。でも食べたいし。でも買物に行けないし・・・だから業者の車がやってくるとうれしい。

スーパーのようによりどりみどриというわけにはいかないし、割高だ。それでも買物は楽しい。もう何年にもわたつてきている業者さんだとあこぎなところはないし、ちゃんと愛想よく商売してくれる。

みかん売り、魚売り、焼き芋売り、いろいろだ。

なかでも一番楽しみなのは週1回必ずやってくるパン屋さんだろう。ここのパン屋さんははるばる港のある丁県からやってきているという。

遠路はるばるやってくるパンは手作りだ。やや高いのは仕方がないが、あげぱんがおいしい。ので肥るのを心配しつつ、毎週購入してしまう。

パン屋さんはまだ若い男性である。生真面目な雰囲気だが毎週私を買うせいか、愛想もよくなり端数をおまけしてくれたりする。

流しのパン屋さんはその人だけなので独特の音楽が流れてくると、近所の小さな子供達も太ももまであるゴム長靴をはきこんで雪の上をすべらぬようにそろそろと歩いてパン屋さんの車に近づいていく。パン屋さんが来るのを楽しみにしていた様子がうかがえてとてもかわいい。幸い私達の新居は道路に面しているので、家の前で車を

止めて店開きをしてくれる。

パンを選ぶのは楽しい作業だが時間が遅いせいか売り切れも多いのが残念だ。聞けばここで商売を終えたらもう終業で家に帰られるとか。私はなんとなくパン屋さんに話しかけてみる。

「いつもこの時間に来られますが、帰りが遅くなりますか？」

「はあ、そうですね。私は県外から来ているもんですから帰宅するのは12時ごろです」

この村には国道沿いは明るいが村道にはいると街灯が少ない。真つ暗な中を流していると怖いこともあります、とおっしゃる。

「まあ、聞かせてほしいわ。そういう話は大好きです」

「いやあ、この間もちよつとね、あれ？と思ったことがあります」「なあに、なんでしょう？」

「この家ですよ、ここ、あなたの家でしょ」

「はあ、」

何を言い出すのかと思った。パン屋さんはあわてたように笑った。

「あ、いや。怖くはないんですよ。見間違いでしょうし」

「どうされたのですか？ぜひ教えてください」

「いや、あなたの出てくる時ってわかるんですよ。鈴の音が鳴る時があつて・・ちりん、ちりんって」

「ええ？鈴の音オ？」

「ええ、でも小さな音なんです。で、あなた、お腹が大きいから気をつけてあげてって、言われているような感じの音なんですわ」

「まあ」

鈴の音はこの村に来たばかりのころ、確かに私も聴いた。でも、気のせいじゃないかと思っている。

でも、この人は・・。パン屋さんはまじめな顔だ。

「笑われるかもしれないが、私はこういうことは詳しい方だね。奥さん、あなたは何かに守られているのでしょうか。きっと丈夫で元気な赤ちゃんは生まれますよ。身体を大事にしてくださいね」

私はパンの袋をしっかりと抱えて大きくうなづいた。誰かはわから

ないけれど、見守ってくださいありがとうございます。



## 第86話・とんど

あつという間に小正月。

この日は夜明けとともに起きる。

あずきがゆ

小豆粥を炊いて、煮えたお餅をほおばる。お腹いっぱいになった。義父がしめなわやお飾りはずして「さあ、行くぞ」と言う。これからとんどがはじまるのだ。

「とんど」とは、とんど焼きともどんどん焼きともいう。この村では「とんど」だ。

お正月の飾りを焼いて今年1年の健康を願うまじないだ。時刻は朝の7時。

しめなわやお飾りを持ち寄って近所の畑で燃やす。今年のよい方角となる恵方えほうは、となりの畑になるらしい。外へ出たらもうご近所の人たちが集まっていた。

私達も早速その輪に加わる。

お正月に遅根したものを全部焼いてしまい、その火で鏡もちやお飾りのするめを小さな木切れにはさんで焼く。

小さな子供は書き初めの半紙を持ってきて焼く。とんどの火で焼いて書き初めの火が高く燃え上がるとお習字がうまくなるらしい。きやあきやあと楽しそうに焼いている。

お供えの食べ物が焼けるとその場でみんなで分け合って食べてしまう。紙コップ持参でお酒を持つてくる人もいて、楽しい雰囲気だ。もちろんまわりは雪で埋もれているので、座ることはできない。

立ちっぱなしの宴会みたいなものだ。みんなでそれらを食べ終わると、この1年は息災ですごせるらしい。

とんどは実家でもあったが、私の子供の時にはすでに焼き場所がなくなり、廃止になっている。まわりは全部住居で田んぼなんかないし、広範囲でたき火ができる場所なんか全然ない。

だからとんどの習わしを大切にかつ当たり前のようにやるこの村

の風習がとても好きだ。子供達も厚着をして火にあたる。

普段あまり見かけない古老も杖をつきつきやってきて火にあたる。最終的には4、50人も集まっただろう。国道をはさんで向かい側の集落のひとたちのとも見える。

粉雪の舞う中、非常になごやかなとんどだった。お腹が大きい私にも近所の人たちはやさしい。

「モエちゃん、もうすぐじゃな。いい子が生まれるけん、楽しみじやの」

私がお礼を言うよりも先に義父母がうれしそうに答える。

「うん、これからじゃ。楽しみじゃ、楽しみじゃ」

そう、もうすぐ生まれるのだ。

小さな赤ちゃんを近所で見かけるとどうしても顔をのぞきこんでしまう。この赤ちゃんは私の今いる赤ちゃんと同級生になるだろうから。もしかしたら親友になるかもしれない。

ケンカ友達になるかもしれない。

過疎の村だから同級生も少ないし、仲良くしなくては。きっと幼稚園から中学校まで同じクラスになるだろうから。幼馴染になるにきまっているし。

その赤ちゃんの頭をなでさせてもらった。その子の親も私と同じ年くらいだろうか。あまり見かけなかったのは、実家にずっといたからという。これからよろしくね、とあいさつしあう。

とんど焼きは楽しかった。

この大雪でも早く除雪車が通って道をきれいにしてくれていたから、難なく歩いて焼き場に行くことができた。

午前中にとんどのすべてが終わったが、なごやかな1日を過ごした。

## 第87話・冬の祭り

村の高原には湖がある。これは人造湖だ。ここはうんと寒くなる  
と、氷紋<sup>ひょうもん</sup>が出てくるという。

トオルは見たくてもなかなか見れない珍しいものだという。

義父は何度か見たことがあるらしい。凍っている湖の上に美しい  
紋様が浮かんではひっそりと消える。冬の山と湖が造る自然の芸術  
作品だ。

なぜ凍っている水面に紋様が浮かぶのか、正確にはわかっていな  
いらしい。

氷紋のタイプにもいろいろとあるらしいが、非常に珍しい現象で  
あることにはかわりはない。

だからこの村でもこれを観光の目玉の1つにしている。なかなか  
見れないのでせめてこの名前を冠したまつりがある。厳寒のこの時  
期に「氷紋まつり」というのが開催される。場所は高原にあるスキ  
ー場だ。

雪像デザインコンテスト、屋台、有志の歌や踊り、最後にはレー  
ザー花火で締めくくられる。まだ歴史の浅いイベントだが、スキー  
のついでということで結構お客さんが来るようになったらしい。

こつというのは村をアピールするのにいい機会らしく地元の有線テ  
レビも取材にやってくる。

私もトオルにせがんで連れて行ってもらった。夜の方が花火がき  
れいというので夜に行く。

駐車場が満杯でうんと遠くにやっと止められた。実はトオルは職  
場全体で雪像コンテストに参加したらしい。日曜日に職場総出で1  
日ばかりで作ったという。結果はどうだろうか？

見に行ったら雪像はピカチュウだった。ピカチュウの頭に黄色い  
ペンキを吹きかけて横に雪の階段をつけて鼻から滑れるようにして  
あった。ピカチュウそっくりではないが表情がかわいらしく、小さ

な子供に人気で滑り台の順番待ちまでしてある。

それで3位入賞。1位はドラえもんだ。県外の教員組合の有志参加で、これはドラえもんの胴体に小さなくりぬきがあつて、その中の小さな階段を上ると小さな展望台に出る。そこがドラえもんの顔の裏手になり、一気に滑り台になってドラえもんの胴体を斜めに横切つて地面に到着するというしかけ。

雪像に滑り台をつけるのはどうやらはやりらしい。

ちなみに1位の商品はスキーリフト券と村特産のお米だつて。

トオルの職場は3位だつたが温泉の入場券をいただいた。

いろいろな雪像を見るのも楽しく、またイルミネーションも綺麗やがて花火がはじまつたが同時に吹雪もはじまつた。どうなるのだろうと思つていたが吹雪が多少あつてもレーザー花火は大丈夫らしく時間通りに開催された。吹雪が時々花火をかき消すがまた復活する。非常に幻想的できれいだった。

まつりに冠された「氷紋」は象徴的につけられたものらしい。が、やっぱり私は本物を見たくなくてトオルに見せてく見につれてつてくとせがんだが、これは無理だと言われる。

「めつたに見られるもんじゃないし。第一あそこはとても寒いからじつと立つて待つていても力ゼを引くだけだ」と言う。

そばにいたトオルの知り合いも見たという人はいない。

「どうしても見たければ、夢の中で見るんだな。モエは器用だからきつと見えるよ」

トオルは笑いながらそんな憎まれ口をたたいた。

仕方ない・・・私はそうさせてもらった。

夢の中の氷紋はその上に龍、ドラゴンが浮かんでいてとても美しい光景だ。イラストの原案に使わせてもらったことはいうまでもない。

## 第88話・来る日も来る日も

雪ばかり！

雪ばかり！

雪ばっつっつかり！！！！

私の車は妊婦でもうすぐ出産だし、だから危ない、というわけでスタッドレスタイヤに替えていない。だからこの雪の中、運転して買い物にも、というわけにもいかない。

普通タイヤで凍結した道を運転すると滑って100%の確率で事故を起こすだろう。というわけで最近家にこもっている。イラストの仕事はしてはいるが、ずっと家にいるからといっていいイラストが描けるというわけでもない。

もう身体をうごかすのもおつくうなくらい、肥ってきているが食べることに楽しみがないのだ。家にずっとということは私にとって大きなストレスになっているのがわかる。

何となくもやもやとするある日の夜のことだ。

トオルは村の消防隊の新年会とやらで夜遅くまで帰らない。2次会も行くだろうし多分帰りは午前様になるだろう。

今夜も私、ひとり。

また口さみしいので、ホットケーキを焼いて食べたり、ポテトチップスを1袋食べたりする。肥るわけだ。

それでも食べてないと苦しい。これが食べつわり……。お腹がすいていないのに、食べたいのだ。摂食障害ってこういう気分なのだろうか。

それでもまだ食べたりない、というより「さみしい」

どうやら私はお腹がすいているのではなくて、退屈しているのだ。

吹雪はやんだようだ。静かな夜。

玄関先は雪に埋もれているだろう。玄関ぐらいはきれいに掃いておこつか。明日の朝、朝刊の配達もあるし。

玄関ぐらいははいておこう。玄関が凍りついてトオルが入れなくと困るから。

そう思ってスキー帽を目深にかぶり、防寒ジャンパーをはおってほづきを手に取る。今は雪はやんでいるがまた降りだすだろう。この間に少しでも雪かきをしておけばあとが楽だ。

夜空が澄んでいて、星がそれはきれいにきらきらと輝いていた。星をこんなに間近に見たのは本当に久しぶりだ。そういえばここにきて間もないころは星ばかり眺めていたように思う。

そうだ、あの鈴の音。

鈴の音が私を誘ってくれていた。あれからまったく鈴の音は聞いていない。あの冴え冴えとした鈴の音。それでもいい。

私はほづきを手にしたまま、星空を仰ぐ。星座には詳しくないが、それでも北極星ぐらいはわかる。その時お腹の中にいる子がぐりぐりと動いた。ああ、この子も北極星を見ているんだ……。私の目を通して一緒に星空を仰いでいる。

お腹に手をやる。やさしくさする。呼応するようにお腹が動く。その感触を楽しんでいると、チリンチリンと小さな鈴の音がした。はっとして、あたりを見回す。

「だあれ・・・」

私は小さな声でつぶやく。

鈴の音は畑の方からした。でも雪で埋もれて畑は見えない。第一人がいれる場所じゃない。もう真っ暗だし。星明かりでもよく見えない。私は少し怖くなつて家に入ろうとした。

鈴の音はまだしている。こんなに長く鳴っているなんて……。どうしてよいかわからなかった。退屈感もふつとんでしまった。やっぱりこの新居には何かある。そう思う。

トオルは午前2時に酔っぱらって帰ってきた。

「下戸のくんが乗せて帰ってくれたけど、途中の橋が凍結していて、車がすべって1回転したよ」

酔っぱらったタオルはろれつがまわらぬ口ぶりでそう教えてくれた。  
(・・・まあ無事で何より・・・)

## 第89話・体重制限

2週間に1度の産科の定期健診で私はお医者さんにすごくすごく怒られてしまった。

すでに体重が妊娠前から15キロも増えてしまったからだ。

「前から肥りすぎるなって注意はしていたのに、何ですか、あんたは！」

年配の医者怒った。

この産婦人科はお医者さんが長年 医大病院に勤務していて腕がよいと評判だ。建物も新しく清潔で綺麗。だから人気がある。ただどういうわけかプライバシーが完璧でない。待合室でも医者の声が聞こえてくる時がある。

私もカーテンの外を気にしていたが、今日の医者のご機嫌が悪いらしく説教がずっと続いた。

「あんたね、このままホントに母親になる気なんですか？このままで産む気なんですか？」

難産間違いなしだよ、あんた！これから妊娠中毒になるよ！赤ちゃんがかわいくないんですか？あんたはよくても赤ちゃんがづらい思いをするんだよ！15キロも！太って！！」

そしてきわめつけ。来月の献身までには必ず今の体重よりも何キロでもいいからおとしていらっしやい！とのきついお達しだった。

果たして診察室を出てカーテンを開けて、待合室に戻るとそこに座っている妊婦と患者全員が私の顔を見た。

やっぱり丸聞こえだったのだ。とても嫌だった。

どうしてあんなきつい言い方をするのだろう。確かに15キロも体重を増やした私が悪い。太り過ぎで妊娠中毒になっても自分の責任だ。

でも何もあんなにネチネチということないじゃんか！

私の目に屈辱の涙がにじんだ。



「ホントに母親になる気があるんですか？」

先生の厳しい言葉がまだ頭の中でリフレインしている。

出産は里帰りで実家近くの産院でする予定だけど、大丈夫だろうか？その産院では友人が看護師として勤務している。その夜、彼女に相談の電話を入れると、こう返事がかえってきた。

「あ、うちの病院ではそんなきつい言葉は言わないよ。そりゃ怒られるのは万一のことがあれば当の医師が責任を負わないといけないからだよ。」

開業医は口コミと評判が命だからね。私の友達もうちの産院で出産したけれど、20キロ増加でもちゃんと産めたよ。

妊娠中毒さえならなかったら、大丈夫、心配ないよ。でも、体重は確かに増えすぎなので、これ以上は増やさないでね。がんばるんだよ」

友人のやさしい言葉に勇気づけられる。

そして2週間後。

案の定、次の検診があさって、というのに、体重が落とせなかった。先生にまた怒られるだろう。私は悲しかった。落とすどころか1キロ増加。これでも1キロですんだのだ。でも怒られる。

そこで検診の2日前から絶食。

次の朝から当日は水も飲まない。そして検診直前の体重測定は寒いのを我慢してうんと薄着をした。

毛糸のパンツも中のチョッキもみんなはずして、下着は薄い絹にする。果たして2キロ減！

「やった！」

さすがに今回は先生は何も言わなかった。

ただ尿が濃くなっているといわれたただけだ。水を飲まなかったせいだろう。

無事診察が終わると近くのファーストフードの店に飛び込み、ハンバーガー2つとポテトのしサイズ、大好きなアップルパイとウー

ロン茶をがぶ飲み。とても幸せな一瞬だった。

トオルにこの話をするとききられたが、これもおんなのメンツがかかった私にとっての大事件だったのだ。

でも今度の診察でも絶飲絶食をする勇気がない。どう切りぬけようか今から悩んでいる。

## 第90話・義母を泣かす

今は2月で一番寒い時期だ。来る日も来る日も雪ばかり降るので私はすることがない。

いや、やろうと思えば仕事だって山ほどある。雪かきもしないといけない。

でも積極的にやる気がないので（怠け者・・）毎日読書をしたり編み物をしたりして暮らしていた。

どうやら母屋の義母も同じ気分らしく、近頃は3時ごろになるとおやつをもって私のいる新居にやってくるようになった。

それはいいのだが、一度来たらなかなか母屋へ戻らず6時ごろまでいすわるようになった。

最初は私もきちんとお茶を入れて話し相手になっていたが、それも同じ話しかしない義母のあいづちに正直飽きてきた。

彼女は若くして同じ村の義父のところに嫁いでこられたひとだ。実家も農家だったので、都会でサラリーマン家庭で育って私の話しや私のイラスト関係の仕事の話をおもしろがって聞いてくれる。また聞きたがる。

でも私にとつては失礼だけど、話し相手としてはおもしろい相手ではない、のだ。イラストの話を聞く、といっても私が一方的に話だけだし、イラストの絵を見ても上手ねーとしかいえないし。

彼女の唯一の趣味はカラオケの演歌を歌うこと。私、演歌はあまり好きではない。カラオケもはつきりいって嫌い。クラシック音楽大好きな私とまるでかみあわない。

最初は遠慮がちにインターホンを鳴らしてお邪魔しますと新居に上がってきた義母も、今はすっかり慣れた。母屋からシャベル持参で雪をかき分けながら新居にやってきて、長居のための厚着をしてやってくる。今はもう勝手に上がって、こたつに入り、部屋の掃除

まで頼みもしないのにやっていく。寝転びながら演歌を聞いたりするようになった。

お菓子を山ほどもってきて、食べる食べるという。おかずももってきて、今晚のおかずにしろしろという。こっちはこれ以上体重を増やしたくなくてわざとお菓子も買わずに我慢しているのに。ちゃんとそれとも言っているのに。

私は悪いと思いつつ、義母がうつとおしくなってきた。ええ、悪いお嫁さんです。

義母はやつと帰る夕方必ず私のお腹をなでて「赤ちゃんや、早う出てきんさいや」という。

初孫の誕生を楽しみにしてくださっているのは、わかるがお腹はさわられたくない。さわってもいいのは医師とタオルと私の実家の母だけだ。理屈ではない。単にさわられるのがイヤなのだ。

さて、今日は私はどうとう義母を怒鳴ってしまった。イラストの締め切りが迫っているので、母屋に電話で今日は仕事が忙しいのでお茶の時間は開いてできないので来ないでください、と言っておく。そして2階で仕事をしていた。私が集中して描きこんでいる合間に義母が上がり込んで散らかった居間きれいに掃除してしまっていた。となりの和室もついでに！お風呂も！台所も！！

「モエちゃん、忙しそうだから・いつもちよつと気になっていたけん、掃除しておいたけん」

仕事に夢中で掃除機をかける音もわからなかった。見違えるように美しくなった部屋を前に、そして誇らしげにどう？という表情の義母を前にとうとう「迷惑です」と言ってしまった。

「こーいうのを有難迷惑というのですよ、もう帰ってください！」

「まあ、モエちゃん・・」

義母は私の剣幕に非常の驚いたようだった。私の顔をまじまじと見つめる。

「モエちゃん、ごめんね・・でも少しだけと思って・・」

「迷惑です。それにお菓子もいらないうて。何度行ったらわかるん

ですか？最初から別居のお約束だったのに、これじゃ同居みたい。干涉しないでくださいったら！」

義母はもう何も言わず、無言で母屋に帰った。ちらりとみた顔に涙がにじんでいたようだ。

私は思い切り怒鳴ったものの、後味が悪くまた、気分もついでに悪くなってむしゃくしゃとしていた。

トオルは帰宅後母屋に行ったきりなかなか帰ってこない。トオルも義母から話を聞いたらしく困った顔をしている。

「モエ、お母さんにあんまり来るな、長居はするなっていっておいながら」

そしてため息をついた。

「みんな仲良くできるのも、結局は君次第なんだ。お母さんは君のことがかわいいとおもっているのだから。全部善意でしたことだし、がつくりしていたよ」

「そうね・・・怒鳴ったことは悪かったわ。確かに善意でされたことだもんね・・・」

私は自分が悪者になっているのを感じている。トオルは私に背を向けて寝てしまった。

それから義母は新居に来ても長居することはなくなった。少しほっとしたことは言っておこう。

でもお義母さん、ごめんなさい。たまにはケーキを焼いてごちそうします。でも部屋は散らかっても私のものだから部屋のものにさわったり、掃除しないでくださいね！

## 第91話・実家の母

小正月もすぐすぎて、久々に実家に戻った。タオルも一緒だ。実家は気楽でいい。私の使っていた部屋もそのままにしておいてくれている。

私の実家の両親もそりゃあ、孫の誕生を楽しみにしてくれている。お腹をぐりぐりとさわってくれるが、不思議と実家の親ならば気にならない。

「モエ、お腹の子供は、男の子、女の子どっち？」

「まだわからないみたい」

「腹帯には確か女と記名してあったから、その反対の性別で生まれてくると言っしそれなら男の子よね！ブルーか黄色のお洋服をそろえてあげる」

「ママ、気が早すぎるよ」

「予定日はいつだったっけ？」

「5月 日」

「あら、やだ。 日といえば、おじいちゃんの命日じゃない！そのコ、やっぱり男の子かもよ。そしておじいさんの生まれ変わりかもよ！」

私の母は時々ふうがわりなことを言い出す。タオルはびっくりして黙ったままだ。私は母をフォローする。

「私はママはちよつと変わっているの。怪談とか不思議な話が大好きでね……。誰かの命日やその近い日に赤ちゃんが生まれると生まれ変わりとかいうの。そういうの信じる人なのよ」

「そ、そ、そうですか……。そんな考え方があるんですね」

「現に私はひいおばあちゃんの命日と3日違いで生まれました、弟はひいおばあちゃんの水子の命日と1日違いなのよ」

タオルは咳払いした。

「でも、悪いけど、ぼくはそういうのはあまり信じないです」

私の母は笑った。

「いいのよ、びっくりさせましたね」

「モエは自分のことをひいおばあちゃんの生まれ変わりって信じているの？」

「信じていないわよ」

母が話しに割って入った。

「でもあんたは小さい時に、ひいおばあちゃんがしまっていた宝石のありかを当てたでしょ。覚えていないだけよ」

トオルは目をしろくろさせている。

「物心つかない小さなころは、前世の行動に添うらしいよ。モエも3つぐらいになったら出産時の苦しかった感覚を覚えて教えてくれてびっくりしたよ。今、モエのお腹の中にいる子もいつか生まれて来た時の様子を覚えてくれるよ」

ママはウインクした。トオルは黙ってコーヒーをすする。

「小さなころのモエはこう言ってたわ。暗かったから、外にでたら明るかった。しゅーしゅーという音がどこからかしていたって。コレ吸引器の音なのよ。出産のときの様子を覚えていたのだから」

「もう忘れたよ、やめようよ、こんな話！」

父はさつきから黙っているがあきれて首をふっている。父も母のこういうところは好きではない。でも私自身は母の血をひいているせいか、こういう話には拒否反応はない、というよりむしろ好きなくらいだ。でも話す相手は選ばないといけない。超現実派のトオルに聞かせても盛り上がらないだけだ。

生まれ変わりの話はちよつと信じられないが、残っているひいおばあちゃんの写真を見ると、将来私が年をとったらこんな顔になるのだろうというくらいにそっくりだ。

トオルは最後まで母の話をバカにせず聞いていた。帰宅後にこう言っただけだ。

「君のお母さんって変わっているなあ・・・」

私は笑っただけだ。でも新居の変な話にも違和感なく接すること

ができるのは母のおかげでもあるだろう。何しろ幽霊話が大好きな子供だから。



## 第92話・なんだろう？

雪が常時50センチは積もっている状態だ。新居よりずっと標高が高い村のスキー場は2メートル積もっていると。ちょうどスキーシーズンでお客さんがたくさんきているらしい。

村唯一の国民宿舎はほとんど満杯。温泉施設も連日スキーの帰りという客で満員らしい。土日になると村を横断している国道も混雑する。過疎のこの村の道路が渋滞するのはこの季節だけだという。それから救急車も結構、行き来する。これは例のサイレンの音でわかる。その音を聞きたびに「ああ、また誰かがスキー場で足を折ったな」とわかる。救急車は多いときには3往復はするらしい。大変そうだ。

村には救急の医療施設はないから、市の病院まで運ばれるらしい。車で1時間はかかる。スキーは楽しいがどうしたってへんぴな不便な場所が多いし、その分万一怪我をしたら大変だ。

私はもうお腹が大きくなっているので、力仕事はしないでいいと言われている。タオルが全部雪かきをしてくれる。母屋の分と新居の分、義母がちょっと腰を痛めたので大変だ。

義父は家庭用の灯油で動く除雪機を持っている。この季節には大活躍だ。これを動かすと雪は高く舞い上がって吹き飛ばされる。

2階の窓から外を眺めるとあちこちの方角から雪が舞い上がっている。どこの家でも小型の除雪機をお持ちなのだ。雪国の必需品だからだろう。

新居から母屋に通じる細い通路には、除雪機が入らないので、手で雪かきをしないといけない。タオルは出勤前と帰宅後にシャベルで雪かきをする。それと寝る前にもする。

「何がおこるかかわからないから、いつでもすぐに母屋に行けるようにしておくんだ。だから通路だけは雪がない状態にしないといけない」

「私、やっぱり手伝おうか」

「いや、だめだ。雪は見た目と違って重い。屋根の雪がいきなり大量に落ちてくることもあるし、モエは慣れていないから雪かきは当面しなくてよい。モエは暖かいお茶を入れてくれたらいいよ」

ある夜だった。夕食後に雪かきをするといってトオルが出て行った。が、少しして戻ってきた。変な顔をしている。

「なあ、ちよつと出てくれないか」

「なあに？」

庭先に出るとききれいな月が見える。いつのまにか雪がやんでいたのだ。星も見える。久々のすつきりとした冬空だ。

「きれい・・・」

トオルはきよろきよろしている。

「どうしたの？」

「いやあ・・・」

「あつ、鈴の音を聞いたのね？」

「違うよ、違う」

上を見ている。

「・・・さつき、変な雲が1つだけあつてな」

「雲なんか1つも出てないよ」

「うーん、やっぱり気のせいかな」

トオルは首をふるとシャベルで雪かきをはじめた。

「ねえ、何か見たの？」

「いや、気のせいだよ。寒いから中に入って。ばくもこれが終わればすぐ戻るから」

居間でお茶を飲んで待っている。トオルが雪を払いながら、戻ってきた。熱いコーヒーを入れてやる。

「ねえ、何を見たの？」

「いやあ、雲の形があんまり変だったから・・・」

「雲なんかなかったよ」

「その時にはあつたのさ。それが気持ちの悪い雲でなあ．．」  
「一体何を見たの？」

「雲が女の子の顔に見えたんだ。おかっぱの幼い女の子だ」

「雲の形って何かに見えることが多いよね」

「いや、それが笑っていたんだ」

「かわいいじゃないの」

「いやにリアルでさ。歯ぐきの1本1本まで見えるんだ。月が煌々と照っているから本当によく見えた」

「ふうん．．」

「それが角度を変えると骸骨に見えるんだ」

「いやだ、それでどうしたのよ」

「さあ、でも何となく気持ちが悪いよな」

「うん．．、」

気のせいだろうとは思う。鈴の音の方が同じ怪異でもましだろう。何だったのかいまだにわからない。もしかしてキツネかもしれない。山にえさがないので、人家のあるところまで下りてきているらしいから」

### 第93話・除雪車

ががががあー、という音で目がさめた。まだ朝の4時半だ。もうこんな早い時間に村の除雪車が動いているのだ。

なんでも村の職員が交代で除雪作業をしてくださっているらしい。トオルも起きてきて、私の寝室にやってきた。（私達は妊娠してから寝室は別居状態です・・。私がトイレが近くなったため、トイレに一番近い和室で寝ているので）

「モエ、起きているね」

「うん、でもまだ5時だ。もうちょっと寝ようかな」

「こっちきていい？」

トオルは私の寢床に入ってきた。毛布を半分個して、一緒に手をつなぐ。除雪車の音はまだしている。

「除雪車はね、けっこう事故が多いんだ。雪をのければいいものの、目測をあやまって川に落ちたり谷に落ちたりして。雪で道路の端が見えないからね。」

除雪車に巻き込まれるようなことがあったら身体がばらばらになるし、怖いよ。気をつけるよ」

トオルはこっちを見た。暖かい寢床の中で、どうしてまたこんな寒そうな話をするのだろうか？

「これは違う県での話しだけだな、除雪車に巻き込まれて亡くなった人がいた。即死だよ」

「もうやめようよ・・」

「モエの好きなお化けがでてくる話だよ」

「何？幽霊とか？月並みじゃん」

「幽霊じゃないよ。その除雪車から血が流れるようになったんだって」

「普通じゃ、ありえない話だね」

「それも事故現場にさしかかったときに限るらしい。それから除雪

車もいきなり止まったりするらしい」

「ありがちなパターンの幽霊話ねえ」

「だろ？修理に出しても異常なし」

「それで？」

「その上、タヌキやウサギが飛び込むようになったらしい。わけもなく」

「血を好む除雪車！ヴァンパイアにでもなったのかな」

「人がそばを通ると、ひっぱられるような気がする」と噂になってね・  
・、誰も乗りたがらなくなったらしい。

人の血を吸ったものは、たとえ無機質な機械でも何かが変わってくるのだろうか。話をしてくれた人はごく普通の人でね、でも、まじめな顔をして教えてくれた。世の中、理屈じゃないなって」

「確かに理屈に合わないことってあるもんね」

「その人、たまたま除雪の仕事が終わってから、運転席に防寒帽を忘れたとかで、取りに行ったんだって、お昼休みにね」

「うんうん、それで？」

「例の事故を起こした除雪車が一番端にあった。その人が使った除雪車はその隣で帽子はもちろん見つかった。で、寒いから除雪車の刃先が凍っているだろ」

「・・・うん」

「刃先の中に人間の顔が映っていたって。血まみれの顔が。顔だけ飛び出しているように見えたって。事故を起こした例の除雪車から」  
「・・・」

「見えるはずのないものが見えた。気のせいかと思ったが、今後例の除雪車を見るのも怖かったって。なるべく見ないようにして別の除雪車のエンジンをかけてさっさと出て行き、仕事を終わるとさっさと駐車して出て行っただと。もちろん事故を起こした除雪車は使えないこともないけれど、そのままだ」

「刃先に映った幽霊って・・・それって成仏してないってこと？供養を求めているってこと？それともその人の目がヘンなの？」

「わからないよ、でもその人は現場責任者みたいな地位にいたから、すぐに祈禱師さんをどこからか呼んでお被いしたらしい」

「それで」

「結局は廃車にしたらしい。ホントの話した。月並みな展開だとモエは笑うかもしれないが、話しをしてくれた人は全然笑わなかった」

除雪車がたてる音は小さくなっていたが、まだまだ続いていた。私達は布団の中で手をつないだまま、軽い眠りに入っていた。

## 第94話・赤ちゃんの夢

胎動がだんだん激しくなってきた。特にお風呂に入るとすごい。きのうなんか手らしきものが、お腹からぽこつと飛び出してきて驚いた。

湯船に入ってくつろいでいると、お腹が妙にふくらみ、そこからぽこつと手か足かはわからないけれど出てくる。すごいことだ。

検診のたびに見れる赤ちゃんの写真も人間の形をしている。羊水もある。胎盤もある。血液もある。もちろんへその緒も。

自分が作るうと思っても作れるものではない。フツーの人間の私が、人間を作っているのである。人間の身体の妙というか、不思議さに感動する。

さて、どんな赤ちゃんだろう？私に似ているかな、タオルかな？義母に似ちゃったらちよつとイヤだな。やっぱりこの私が痛い思いをして産むのだから、私に似てほしいな。

この間、うたたねをしていたら、こんな短い夢を見た。

赤ちゃんがすでに生まれていて、私の腕に抱かれている。おっぱいもちやんと出ているらしく、ちゅうちゅうと吸っている。赤ちゃんのお顔は、私の乳房に隠れてよくは見えない。

でもかわいい赤ちゃんであることはわかっている。夢の中で私は、すでに母親になっている私を不思議に思っていない。

「さあさあ、たくさんお乳をお飲み」

ところがその私がいる場所はお墓の中なのだ。裏の畑のお墓に囲まれてお乳をやっている。さんさんとふりそそぐ日差しの中で。

赤ちゃんがお乳を飲むのをやめた。

「どうしたの？もうおなかいっぱいになったの？」

赤ちゃんが目をあけてにっこりと笑った。タオルにそっくり！かわいい赤ちゃん！

そしてなんと、赤ちゃんがおもむろに口をきいた。

「うん、ありがとう。お母さん、もうちょっとだけ、こうして抱いていてね」

そこで私は跳び起きてしまった。外はまだ暗い。吹雪の音がする。夢だったのだ。あんまりリアルで驚いた。びっくりした。

でも心がほんわかった。お腹の子が何かの合図のようにぐるりと動いた。一緒に夢を見ていたんだ。

この子も私と同じ夢を見ていたんだ。

私はうれしくなって、何度も何度もお腹をなでた。お腹の中も、手の動きに答えるように動いてくれる。

私達は親子なんだ。通じ合っている！

とてもうれしい夜明けのひと時だった。



## 第95話・弟さんの帰郷

トオルの弟、ジロウさんが村に戻ってくるようになった。

高校を出てから大都市の工場に勤めていたが、何を思ったのか急にUターンして村が隣町で仕事をさがすという。

母屋の義父母は息子が戻るので喜んでいる。が、トオルは心配している。

「一体どういう仕事につくつもりだろうな。都会にいれば仕事はすぐに見つかるのになあ」

ジロウさんが知らせの電話をよこしてから、1週間もたたないうちに大きな荷物とともに帰ってきた。

礼儀正しい人で、私を見てちゃんとあいさつしてくれた。

「お義姉さん、ぼく、帰ってきました。これからよろしくお願いします」

お正月の帰省には何も言わなかった。この吹雪の中を帰郷してきたのは、どうしてかはわからない。トオルに言わせれば失恋したらしい。でも普通は失恋してくらいでは荷物を引き払ってこっちに帰らない。森林組合かダム工事現場あたりで何か仕事がないかさがすという。

きのう母屋に行くとジロウさんはまだ寝ていた。こたつの中で。

義父母は上り口の土間で小豆あずきのよりわけをしている。

私の出入りする音で、ジロウさんは目が覚めたらしい。

「ああ、よく寝たな。この頃眠れなかったから」

義母が心配そうに土間から声をかけた。

「いつもうなされているみたいなんじゃ。かわいそうに。ここで昼間寝ているんじゃない」

ジロウさんは私を手招きして、パソコンでも教えてあげようかと言う。エクセルを習いたかったのでよろしく、と言った。

ちよっとしてからジロウさんは私を見て言う。

「モエさんって靈感ある？ なにかカンが強いところがあるらしいね」  
私は驚いた。そんなことはない、とあわてて首をふる。義母が何かいったのだろう。なんでもおおげさに言う人だから。

ジロウさんはうつむいて言う。

「都会でちよつと事故にあつてな……。ぼくのバイクと車が接触事故をおこして。幸い両方とも怪我はなかったけれど」

「はあ……。」

「事故現場はお地藏さんのすぐそばだった。多分以前死亡事故でも起こした現場だったと思う。見通しの悪いところだから、本当に偶然だろうけれど、ちよつと気持ちが悪いだろ？」

「うん、そうだね。確かにちよつと気味がわるいわね」

「それでも怪我はなかったし、示談でも揉めなかったし、よかったなつて思っていた。そしたら子供が夢枕に立ってね……」

「ゆ、ゆめまくらあ？」

「うん……。事故現場でもまつられている子供だろうとすぐにわかった」

「そ、それで？」

「ニコニコ笑っていてね。よかったね、怪我しなくてよかったねって……」

「んまあ……。そ、それで？」

「夢にしてもやけにリアルでねえ、その日にお菓子とジュースを持って行つてお供えしたんだよ。バイクはミラーを壊しただけで確かに怪我がなかったのは奇跡的だったし。それですんでよかった、ありがとうって」

「いい話じゃないの」

「それで、あのう……。ジロウさんがこの村に帰ってきたことと関係あるの？」

「いやあ、直接的にはないけれど……」

「何があつたの？ よかつたら教えて教えてジロウさん」

「なんでもないよ。でもそのことがあつてから、無性に家に帰りたい

くなくて、帰りたくなって……。今まで田舎の家なんかってバカにしていたのに、急にさみしくなってね」

「そうかあ……」

土間もいつのまにか小豆をよりわけの音がやんでシーンとしている。義父母も心配して聞いていたのだ。

話はそれだけである。続きはない。

ジロウさんは直接的には関係はないといていたが……。私達にはわからないつながりが帰郷をうながしたのかもしれないと思った。

## 第96話・赤ちゃんの性別

3月になった。

暦では春でも、村はまだまだ厳寒である。

妊娠歴すでに8ヶ月半。検診にはトオルの仕事が終わってからの夜診に連れて行ってもらう。未知が凍結していて1人で運転して診察させるには危なすぎるというのだ。私の運転が下手なんで心配かけている、がうれしいことだと思う。

さて今回の検診でやっと子供の性別がわかった！今は内診しなくてもお腹の上からゼリーを塗ったくり、その上に器具をあてるだけで、赤ちゃんの様子が診れるのだ。

先生がおっしゃった。

「あ、赤ちゃんの性別が今はつきりわかるけど、どうする？知りた  
い？」

私は一瞬だけ迷ったが「教えてください」と言った。

「男の子ですよ」

「わあ」

「見ますか？ここがおちんちんね。またのところから、つきでいて  
るでしょ？」

「はい・・・はい・・・、本当に男の子ですね」

「これだけはつきりしていれば、間違いはないでしょう」

待合室に戻り、待っていたトオルにすぐにこのことを教える。ト  
オルもにこにこした。

「そうかあ、男の子かあ」

男の子でも女の子でもよかった。きっと女の子ですよ、と言われ  
ても喜んだに違いない。

もらった写真を見せる。顔なんかはつきりと映っていないのに、  
「かわいい子じゃないか」と言った。母屋の義父母にも伝える。

特に義父は昔堅気のところがあるので、「男の子でよかった。立

派な後継ぎになるけん」と喜んだ。

新居に戻り2人で熱い紅茶を入れる。向かい合ってしみじみとお茶を飲んだ。幸せな気分だ。

あと2カ月で子供が生まれる。このお腹の中にいる子が、外に出てくるとは！

私はそつとお腹をなでた。

ちりん・・、鈴の音がした。びっくりしてあたりを見回す。トオルも聞こえたようだ。目を丸くしている。

私達は顔を見合わせた。鈴の音って何かの知らせなんだろうか。それきり音は鳴らなかったが、もう慣れてしまつて今更怖くともなうともなかった。

この深い雪が全部溶けたら春がくる。子供が生まれる。ここはもつとにぎやかになるだろう。楽しみだ。それこそ本当に春がくるのだろう。

## 第97話・春がくる

妊娠、9カ月目に突入した。

もうすぐ本番だ。どうしよう。陣痛の痛みに耐えられるかな？私でも本当に産めるかな？

明日から実家に戻る。実家近くの産院で出産するのだ。里帰り出産だ。荷物はすでに宅急便で送ったが、なにやかやと忙しい。

今度この村に戻ってきたら、私は子連れだ。

山にはまだ真つ白な雪が残っている。けれどテレビのニュースでは、桜前線情報が流れ、すでに南の方では桜が満開だそうだ。

でもここはまだまだ雪が深く、桜どころではない。

実家にしばらく戻るのでお別れに母屋の義父母とトオルとジロウさんと食事に行った。

「ここはね、桜なんか3月に咲かないよ。4月もまだ早い。スキーもできるのにまだまだ、まだまだだよ」

「そうねえ、すごく寒いもん」

「そのかわり、5月になり雪が解けると一気に温度が上がって桜がほころびる。ちょっと遅い花見ができる」

「そして桜と桃と梅の花が一度に咲く」

「ここでは一度に春が来るんだよ」

「そりゃあ、桜も桃も梅も同じところに一列に植えているところは、少ないけれど、あちこちでああ、春だと実感できる。田んぼの準備に忙しくなる。桜と桃と梅が終わったら今度はヤマボウシの花が咲くんだ。緑のいいにおいで村が包まれる。この村は本当にいいところなんだよ」

義父母やトオルはこの村で生まれて育った。

みんなこの村が大好きなのだ。村を誇りに思っている。市町村の合併問題で将来的にはどうなるかはわからないが、この誇りはいつまでもかわらないと思う。

私の出産は実家だが、育てるのはこの村だ。私の赤ちゃんはこの村のおいしい空気を吸って大きくなるだろう。私もまたタオルと年老いるまで、村の空気を吸って生活していくだろう。

そう、ここはとてもいいところなのだ。

## 第98話・出産

初産というのに、私のお腹の周囲はすでに1メートルを超えてしまった。体重20キロ増加。お腹どころか身体全体が重い。

38週目に入った頃に実家の町に里帰りした。実家に帰って4日目だがもう村が恋しくなっている。

もちろん実家は懐かしい。父も母も私の帰りを喜んでくれた。

出産に備えて準備品をいろいろ購入する。でも一段落するともう村の静かな生活が恋しくなる。村では朝起きて新聞を取るために玄関を出た瞬間、冷たいそしておいしい空気が私の身体を満たしてくれる。後ろの山から透かし出た朝日が私を照らしてくれる。

天気の良いときも悪い時も、山の靈気があたりを充満する。目覚めよ、と。さあ今日も生きよと励ましてくれる。人間と自然が共存しているのだ。買物には非常に不便だけど、いいところなんだ。

私は既に村の住民になったのだ。早く赤ちゃんを産んでトオルや義父母の待つ村に戻りたいと思う。

もちろん私の実家だって大好きだ。母なんかいつ出産するかとわくわくして待っているようだ。早く陣痛が来てもいいよね、とかいうので困る。またこういうこともいう。

「もうあの村に帰ってこなくってもいいじゃないの。村は自然環境は確かにいいかもしれないけれど、子供の教育にはどうかしら？塾もないから、受験のときには不利じゃないの。ずっとここで暮らして気が向いたときだけ村に帰ればいいじゃないの？いい考えだともうけれどね？」

母は私と赤ちゃんを村に返したくないのか、無茶苦茶を言う。でもその母だって村に遊びに来て温泉に入るのが楽しみなのだ。

お腹の赤ちゃんはいつ出ようかと様子をうかがっているらしい。時々激しく動く。出産の本には、お産が近づくと胎児の頭がおりてくるから胎動がおさまると書いてあるが、私には当てはまらない。



どうなっているのだろう。

ある晩、もう明日で予定日だ、というその晩。

私は夢の中で鈴の音を聞いていた。ここは田舎の村ではない。実家なのに。

ちりん、ちりん・・・、ちりん・・・

「ああ、私の新居の鈴だ。守り神の鈴だ」

私は夢うつつで聞き惚れていたのだと思う。そしてパチンと言う音ではっと目が覚めた。なにか生暖かいものが股を濡らした。

「破水だ！」

私はそろつと起きる。時刻は0時をまわっている。不思議と冷静になった。動く都度に羊水が流れ出てくるので、ゆっくりと起きて父に車を出してくれるように頼んだ。

病院に到着すると即入院。まもなく陣痛が始まった。

そして・・・私とトオルの赤ちゃんが、初めての赤ちゃんが誕生しました！

文章でこうして書くとは1行ですんでしまいが、つらい陣痛の後に一生忘れられない出産の喜びがあった。

ついさっきまでお腹の中にいた赤ちゃんは、私の身体から出てきて、今はもう私のそばにいる。

本当に小さい、小さい赤ちゃんが私のそばで寝ている。くしゃくしゃの顔、小さい指。小さい細い足。

かわいい赤ちゃん！

鈴の音は知らせの音だったのかもしれない。

夢の中で私は聞いた。

村の鈴の音が私の枕元まで見舞いに来てくれたのだろうと今も思う。

## 第99話・再び鈴の音（エピソード）

予定日に私は無事、大きな男の子を産みました。

最終的には私は20キロ太ったが、心配していた妊娠中毒にもならず、無事に出産を終えた。

名前は義父がつけてくださった。「ひで」くんです。

生まれた次の日には、実家近くの産院までトオルも母屋の義両親もみんな、赤ちゃんの顔を見に来てくれた。

それから1カ月。実家を出て新居に戻る。もちろん赤ちゃんも連れて。その翌日に村の神社に初参りをする。

私達と赤ちゃんのためにだけ、太夫さん「神主さんご夫妻は神社の戸を開けて待っていてくださいました。（普段はお参りする人も神主さんも常駐してなくて、無人なのだ）」

このひでくんのためだけ、神社を開けてくださったのだ。

小さな神殿を上がり、かしこまって祝詞を聞く。

その祝詞の中に鈴の音が混じっている・・・ような気がする・・・。まさか。最初は気のせいかと思った。でも間違いない。かすかだけど、聞こえる。

神主さんはわからないのか、わかっているのか、祝詞を肅々と続けられている。トオルは聞いているのだろう、多分、耳をすませている。

赤ちゃんはむっつきりもせず、じっとしていた。

鈴の音って、これってきくと、私達の新居の守り神なのだ。私はそう思った。

祈祷が無事終わり、母屋でお祝いの膳を囲んでぎやかにご飯を食べた。義父母もにこにことして、赤ちゃんをあやしている。

新居に戻って、私達と赤ちゃんと3人だけになった。赤ちゃんをはさんで私とトオルはにっこりとほほ笑みあう。鈴の音はもうしない。でもまた折にふれてまたするだろう。私達はもうその出所を探

そうとはしないし、そう思わない。

ここは確かにちよっぴり不思議なことがある。村では私はまだたった1年の住民だ。それでも不思議な話をずいぶんと聞いたと思う。これから聞くことはあると思う。

とりあえずはこの話、99話目で終わりにします。

読んでくださって、ありがとう。

さようなら！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8587r/>

---

田舎暮らし百物語（仮題）

2011年8月9日03時10分発行